

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

なが よし てん じん だん
永吉天神段遺跡 4
第3地点

（曾於郡大崎町）

2019年2月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（南西から）

序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋申良 J C T）の建設に伴って実施した、曾於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡第 3 地点における発掘調査の記録です。

永吉天神段遺跡第 3 地点では、隣接する第 2 地点と同様、旧石器時代から近世の遺構・遺物が発見されました。

旧石器時代では、点数はわずか 1 点ながら角錐状石器が出土しました。

中世では、五輪塔の笠石を段差の踏み石に転用した道状遺構をはじめ、屋敷に伴うと考えられる土坑墓や、第 2 地点に引き続き鹿児島県で初となる地下式坑が 7 基発見されたほか、貿易陶磁器や国産陶器などの交易品が出土しました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心を高め、御理解をいただくことを通じて、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたり本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、大崎町教育委員会、調査中に御指導をいただいた先生方、株式会社バスコ、発掘作業員、整理作業員、本遺跡の所在する大崎町永吉の档ヶ山集落の皆様、その他関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 31 年 2 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 前迫 亮一

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながよしてんじんだんいせき4 だい3ちてん							
書名	永吉天神段遺跡4 第3地点							
副書名	東九州自動車道(志布志IC~鹿屋串良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	22							
編集者名	今村 敏照・横手 浩二郎・相良 典隆							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-70-0574 FAX0995-70-0576							
発行年月日	2019年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながよしてんじんだんいせき 永吉天神段遺跡 だい3ちてん 第3地点	かごしまけん 鹿児島県 そおてん 曾於郡 おおきまち 大崎町 ながよし 永吉 あざ てんじん 字 天神	464686	104	31° 26' 35"	130° 58' 58"	確認調査 2011.07.01) 2011.09.28 本調査 2015.05.11) 2016.01.27	7,724	東九州自動車道 (志布志IC~ 鹿屋串良JCT) 建設に伴う記録 保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
永吉天神段遺跡 第3地点	散布地	旧石器		角錐状石器・台形石器				
	集落	縄文早期	竪穴住居跡2軒	前平式土器・下剥峯式 土器・磨製石鏃				
	散布地	古墳	土坑3基	成川式土器(辻堂原式・ 笹貫式)・須恵器				
	集落	中世	土坑墓1基 土坑15基(地下式 坑含む) 道状遺構1条 柱穴	土師器・備前焼・瀬戸焼・ 青磁・白磁・青白磁・ 染付・中国産陶器・軽 石製品・石塔・砥石・ 古銭				
散布地	近世	土坑1基	薩摩焼・備前系磁器・ 古銭					
要約	本遺跡は持留川とその支流に挟まれた標高約50mのシラス台地縁部に位置し、旧石器時代～近世の複合遺跡である。 主となる時代は、中世である。従来、大隅半島の古代～中世は発掘調査事例が少なかった。本遺跡では、土坑墓や地下式坑など、大隅半島の当該時期を考える上で、貴重な資料となる遺構が発見された。							



遺跡位置圖(1:50,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（志布志IC～鹿屋中良JCT）建設に伴う永吉天神段遺跡第3地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町永吉字天神に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）及び公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「調査センター」）が実施した。
- 4 発掘調査は、平成24年度に埋文センターが、平成27年度に調査センターが実施した。
- 5 整理・報告書作成は、平成29年度に調査センターが実施した。
- 6 平成27年度は、発掘調査支援業務並びに整理・報告書作成支援業務を株式会社バスコへ委託し、埋文センター及び調査センターの指揮・監督のもと発掘調査、整理作業を行った。
空中写真撮影は、株式会社ふじたに再委託した。
- 7 遺構図・遺物分布図の作成及びトレースは、今村敏照、横手浩二郎の指示・確認のもと調査センターの臨時職員が行った。
- 8 出土遺物の実測・拓本・トレースは、今村、横手の指示・確認のもと調査センターの臨時職員が行った。
なお、報告書の作成には adobe 社製「IllustratorCS5」、「PhotoshopCS5」を使用した。
- 9 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、調査センターの吉岡康弘、横手が行った。
- 10 金属製品の保存処理は、埋文センターの武安雅之が実施した。
- 11 本報告に係る自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 12 執筆担当は以下のとおりである。
第1章～第3章 今村敏照・横手浩二郎
第4章、第6章 横手浩二郎・相良典隆
第5章 バリノ・サーヴェイ株式会社
- 13 使用した土色表記は「新版 標準土色帖」（1970 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 14 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 15 本書で使用した方位は、すべて座標北（G.N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 16 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑
SD：溝状遺構 SL：鍛冶関連遺構 ST：土坑墓
P：柱穴
- 17 遺構の縮尺は次を基本とした。また、各図中に縮尺も示している。
竪穴住居跡：1/50
土坑墓・土坑・焼土・柱穴：1/40
大型土坑：1/60
遺状遺構・溝状遺構：1/80、1/200
- 18 遺物の縮尺は次を基本とした。また、各図中に縮尺も示している。
土器・土製品：1/3
小型石器・軽石加工品：1/1～1/2
大型石器：1/3～1/4
- 19 掲載遺物番号はすべて通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の番号は一致する。
- 20 掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合、表面が左、裏面が右に配置してある。
- 21 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は「NTJ」である。

本文目次

表紙	
巻頭図版 (カラー)	
序文	
報告書抄録	
遺跡位置図	
例言	
目次	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 確認調査	1
第3節 本調査	2
第4節 調査の経過	3
第5節 整理・報告書作成	4
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理・地質的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡	12
第3章 調査の方法と層序	17
第1節 調査の方法	17
第2節 層序	18
第4章 調査の成果	27
第1節 旧石器時代の調査	27
第2節 縄文時代の調査	30
第3節 弥生時代から古墳時代の調査	43
第4節 中世の調査	60
第5節 近世他の調査	95
第5章 自然科学分析	109
第6章 総括	113

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	9
第2図 東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT)建設に伴って調査された遺跡	16
第3図 基本土層図	19
第4図 調査前地形測量図	19
第5図 確認調査トレンチ位置図	20
第6図 グリッド配置図及び本調査範囲図	21
第7図 土層断面図(1)	22
第8図 土層断面図(2)及び作成位置図	23
第9図 土層断面図(3)	24
第10図 土層断面図(4)及び作成位置図	25
第11図 土層断面図(5)及び作成位置図	26
第12図 旧石器遺物出土状況図及び地形測量図	28
第13図 旧石器時代の遺物	29
第14図 VII層上面地形測量図及び 堅穴住居跡、土坑配置図	31
第15図 堅穴住居跡1号	32
第16図 堅穴住居跡2号	33
第17図 土坑1号	34
第18図 VI層上面地形測量図及び 集石配置図	35
第19図 V・VI層遺物出土状況図	36
第20図 集石1号、2号	37
第21図 集石3号、4号	38
第22図 縄文時代早期の遺物	39
第23図 IV層上面地形測量図	41
第24図 縄文時代後～晩期の遺物	42
第25図 IV層上面地形測量図及び 遺構配置図	44
第26図 焼土1号、土坑2号、土坑3号	45
第27図 弥生時代の遺物	46
第28図 II・III層出土遺物分布図	47
第29図 古墳時代の遺物(1)	48
第30図 古墳時代の遺物(2)	49
第31図 古墳時代の遺物(3)	50
第32図 古墳時代の遺物(4)	51
第33図 古墳時代の遺物(5)	52
第34図 古墳時代の遺物(6)	53
第35図 古墳時代の遺物(7)	54
第36図 古墳時代の遺物(8)	55
第37図 古墳時代の遺物(9)	56
第38図 古墳時代の遺物(10)	57
第39図 古墳時代の遺物(11)	58
第40図 中世の遺構配置図(全体)	61
第41図 土坑墓配置図	62
第42図 土坑墓1号	63
第43図 地下式坑配置図	64
第44図 地下式坑1号と出土遺物	65
第45図 地下式坑2号と出土遺物	66
第46図 地下式坑3号と出土遺物	67
第47図 地下式坑4号と出土遺物	68
第48図 地下式坑5号と出土遺物	69
第49図 地下式坑6号と出土遺物	70
第50図 地下式坑6号の出土遺物	71
第51図 地下式坑7号	72
第52図 その他の遺構配置図	74
第53図 土坑4号(出土遺物)、5号	75
第54図 土坑6号	76

第55図	土坑7号, 8号	77
第56図	道状遺構1号(平面図)	78
第57図	道状遺構1号(横断面図)	79
第58図	道状遺構1号(縦断面図)	80
第59図	道状遺構1号の出土遺物(1)	81
第60図	道状遺構1号の出土遺物(2)	82
第61図	道状遺構1号の出土遺物(3)	83
第62図	道状遺構1号の出土遺物(4)	84
第63図	溝状遺構1号	85
第64図	柱穴分布図及び個別断面図・出土遺物	86
第65図	Ⅱ・Ⅲ層出土遺物分布図	88
第66図	土師器	90
第67図	国産陶器	91
第68図	青磁	92
第69図	白磁・染付	93

第70図	石器	94
第71図	近世の遺構配置図	96
第72図	土坑9号と出土遺物	97
第73図	時期不明遺構配置図	98
第74図	軽石集積遺構	99
第75図	集積遺構出土の軽石加工品(1)	100
第76図	集積遺構出土の軽石加工品(2)	101
第77図	焼土2号, 土坑10号	102
第78図	薩摩焼・肥前系磁器	103
第79図	I層の主な出土遺物	104
第80図	重鉱物組成及び火山ガラス比	111
第81図	火山ガラスの屈折率	111
第82図	斜方輝石の屈折率	111
第83図	暦年校正結果	112

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	10～11
第2表	志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡	12～15
第3表	旧石器遺物観察表	29
第4表	縄文時代早期土器観察表	40
第5表	縄文時代早期石器観察表	40
第6表	縄文時代後晩期土器観察表	42
第7表	縄文時代後晩期石器観察表	42

第8表	弥生時代～古墳時代遺物観察表	105
第9表	土師器観察表	107
第10表	陶磁器観察表	108
第11表	石器観察表	110
第12表	重鉱物・火山ガラス比分析結果	113
第13表	放射性炭素年代測定・暦年校正結果	114
第14表	地下式坑の規模	116

図版目次

図版1	縄文時代早期の遺構(1)	117
図版2	縄文時代早期の遺構(2), 古墳時代の遺構	118
図版3	中世の土坑墓, 土坑	119
図版4	地下式坑1号	120
図版5	地下式坑2号	121
図版6	地下式坑3号, 4号	122
図版7	地下式坑5号	123
図版8	地下式坑6号	124
図版9	地下式坑7号, 溝状遺構, 土坑9号	125
図版10	道状遺構	126

図版11	遺物出土状況	127
図版12	旧石器時代, 縄文時代の遺物	128
図版13	古墳時代の遺物(1)	129
図版14	古墳時代の遺物(2)	130
図版15	地下式坑6号の出土遺物	131
図版16	他土坑及び道状遺構出土遺物	132
図版17	土師器, 国産陶器	133
図版18	青磁	134
図版19	白磁, 薩摩焼	135
図版20	重鉱物・火山ガラス	136

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育庁文化財課（以下、県教委文化財課）は、平成11年1月に鹿屋申良JCT～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋申良JCT間の埋蔵文化財分布調査を実施し、50か所の遺跡（調査対象表面積854,100㎡）の存在が明らかになった。この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、県教委文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の四者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の厳密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで、県教委文化財課は、まず、平成13年1月29日から2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石籠遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋申良JCT～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査を実施し、同年9月17日～10月26日及び12月3日～12月25日の2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化の協議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日、「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉

財部IC間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結され、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま継続されることになった。

また、日本道路公団からの委託業務は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

第2節 確認調査

永吉天神段遺跡の確認調査は、県内遺跡事前調査事業で平成23年7月1日から同年9月28日に実施した。

1 調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター所長 寺田 仁志
調査企画	次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の縄文の森調査室長 井ノ上秀文
調査第一課長	堂込 秀人
調査第一課第二調査係長	大久保浩二
調査担当	文化財主事 馬籠 亮道

2 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載した。写真撮影は適宜行っているので記述を省略した。

7月 調査開始。調査施設設営及び環境整備。1～31トレンチ（以下、T）を設定・掘削。

8月 トレンチ調査。遺物取上げ。1T：旧石器時代剥片・縄文時代早期被熱破砕礫出土。2T：方形竪穴住居跡検出。弥生土器・石剣出土。4T：柱穴検出。下剥峯式土器・被熱破砕礫出土。8T：柱穴検出。磨製石鎌出土。15T：縄文時代早期土器片出土。16T：Ⅱ層遺物集中部下部硬化面検出。23T：Ⅱ層土器片及び柱穴検出。V層被熱破砕礫検出。24T：柱穴検出。27T：Ⅱ・Ⅲ層土器片が密集して出土。Ⅶ層（サツマ層上面）柱穴検出。30T：Ⅱ層土器片出土。Ⅲ層縄文時代後期土器片出土。

9月 29・30・31トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。16T：硬化面を竪穴住居跡と判断。6・15・18T：縄文時代早期土器片（石坂式土器）出土。12・13・16・21・27T：弥生時代～古墳時代土器片（山ノ口式土器・東原～辻堂原式土器）出土。30・31T：縄文時代晩期土器片（組織土器）出土。文化庁文化財部記念物課林正憲調査官来跡（14日）。

第3節 本調査

確認調査の結果、遺物の分布は調査対象地の広い範囲で確認され、中世～古代、古墳時代～弥生時代、縄文時代晩期、縄文時代早期、旧石器時代の包含層が確認された。調査対象範囲が広大であり、各地点で存在する包含層の時期や内容には差があるが、調査対象面積37,100㎡、調査対象延面積87,588㎡と確認した。

確認調査の結果を踏まえ、改めて遺跡の取扱いについて県教委文化財課、国土交通省、埋文センターの3者で協議し、遺跡の現状保存は困難であることから、埋文センターが本調査を実施することとなった。平成24年度は埋文センターが本調査を実施し、発掘調査は、「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、株式会社パスコへ発掘調査業務の委託を行い実施した。

平成25年度からは、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を含めた国事業関係を円滑に進めるために発足した公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、調査センター）が、県から受託して発掘調査を進めることになった。

整理作業・報告書作成業務については、平成27・28年度は、「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき、株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行い実施した。平成29年度は調査センターが実施した。

本調査は、平成24年7月2日から平成25年1月28日（第1地点含む）、平成25年6月13日から平成26年1月28日、平成26年5月12日から平成27年1月28日、平成27年5月11日から平成28年1月27日（第3地点含む）までの期間実施した。調査体制については、以下のとおりである。

1 調査体制

(1) 平成24年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	県立埋蔵文化財センター所長 寺田 仁志
調査企画	次長兼総務課長 新小田 穰 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文 調査第二課長 富田 逸郎 調査第二課第一調査係長 八木澤一郎
調査担当	文化財主事 川口 雅之
調査事務	主幹兼総務係長 大園 祥子 主査 岡村 信吾
現地指導	鹿児島大学大学院理工学研究科 准教授 井村 隆介

福岡大学人文学部教授 武末 純一

(2) 平成25年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 富田 逸郎 総務課長兼総務係長 山方 直幸
調査企画	調査課長 鶴田 静彦 調査第一係長 八木澤一郎
調査担当	文化財専門員 湯場崎辰巳 文化財専門員 彌榮 久志
事務担当	主査 岡村 信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授 武末 純一

(3) 平成26年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人 総務課長兼総務係長 山方 直幸
調査企画	調査課長 八木澤一郎 調査第一係長 中村 和美
調査担当	文化財専門員 湯場崎辰巳 文化財専門員 彌榮 久志 文化財専門員 隈元 俊一
事務担当	主査 岡村 信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授 武末 純一 福岡大学人文学部教授 崎崎 祐輔 鹿児島大学法文学部教授 本田 道輝 鹿児島大学教育学部教授 日原 正守 鹿児島国際大学国際文化学部 教授 中園 聡 鹿児島県立短期大学生活科学科 教授 揚村 因 鹿児島女子短期大学助手 下野真理子

(4) 平成27年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人 総務課長兼総務係長 有村 貢 調査課長 八木澤一郎
調査企画	調査第一係長 中村 和美

調査担当	文化財専門員	隈元 俊一
	文化財専門員	上村 俊洋
事務担当	主査	荒瀬 勝己
現地指導	大分県立歴史博物館	
	企画普及課長	原田 昭一
	鹿児島大学大学院理工学研究科	
	准教授	井村 隆介

2 発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」、調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ発掘調査の委託を行った。なお、埋文センター及び調査センターの各年度調査担当職員が常駐監理して、発掘調査の統括を行った。委託内容等は以下のとおりである。

(1) 平成24年度

委託先	株式会社バスコ
契約期間	平成24年6月8日～平成25年2月22日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 新川 浩
	主任調査員 池畑 耕一
	調査員 西田 茂、丸山 清志
	黒沢 聖子
	測量技士 小林 進哉
検査	中間検査 平成24年10月18日
	完成検査 平成25年2月13日（実地検査）
	平成25年2月15日（成果物検査）

(2) 平成25年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成25年6月3日～平成26年3月14日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 池畑 耕一
	調査支援員 西田 茂、秀嶋 龍男
	黒沢 聖子、翁長 武司
	宮本 栄二
	測量技士 小林 進哉
検査	中間検査 平成25年10月10日
	完成検査 平成26年2月19日（実地検査）
	平成26年3月4日（成果物検査）

(3) 平成26年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成26年4月11日～平成27年3月12日

委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 西田 茂
	調査支援員 池畑 耕一、秀嶋 龍男
	小柳 太一、黒沢 聖子
	翁長 武司、宮本 栄二
	上屋 眞一（5月26日～）
	関口 昌和（7月1日～）
	関口 真由美（7月1日～）
	玉城 乾一郎（～11月27日）
	測量主任技士 中野 広行
	測量技士 河野 正博
検査	中間検査 平成26年10月16日
	一部完成検査 平成26年12月19日
	（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
	完成検査 平成27年3月3日（実地検査）
	平成27年3月5日（成果物検査）

(4) 平成27年度

委託先	株式会社バスコ
委託期間	平成27年4月13日～平成28年3月11日
委託内容	発掘調査業務 1式
	測量業務 1式
	土工業務 1式
担当者	主任技術者 川野 勝弘
	主任調査支援員 西田 茂
	調査支援員 上屋 眞一、浦辻 栄治
	関口 昌和、翁長 武司
	宮本 栄二
	高田 由利佳（～11月26日）
	測量主任技士 中野 広行
検査	一部完成検査 平成27年8月10日
	（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
	中間検査 平成27年10月21日
	完成検査 平成28年2月23日（実地検査）
	平成28年3月1日（成果物検査）

第4節 調査の経過

第3地点の調査は、平成27年度に第2地点の一部と並行して実施した。第2地点の調査経過については、「永吉天神段遺跡2 第2地点-1」調査センター発掘調査報告書（13）並びに「永吉天神段遺跡3 第2地点-2」調査センター発掘調査報告書（17）に記載してあるので、ここでは割愛する。

【発掘調査】

5月11日 発掘調査開始。B～G-3～9区、重機による表土剥ぎ。B-5～7区、人力によるⅡ層掘削。

弥生時代～中世の包含層が、想定より残存範囲が少ない可能性があることが判明。埋文センター福山所長現地指導(14日)。堂込調査センター長現地指導(20日)。

6月 B・C-6～13区、D～F-6～9区、G-9～11区、重機による表土剥ぎ。B・C-6・7区、人力によるⅡ層掘削。土坑6、7、9検出。

表土中から「石包丁片」(第79図No280)出土。第2地点現道付替えに伴う電柱移設現地協議(大隅河川国道事務所他、11日)。大崎町高齢者講座遺跡見学(大崎町教委他13名、11日)。

7月 B～H-8～13区、重機による表土剥ぎ。B・C-3～7区、D・E-4・5区、人力によるⅡ～Ⅲ層掘削。土坑墓1号、土坑2、4、10号、地下式坑1、2号、焼土跡1号検出。土坑9号の帰属時期を近世と判断。地下式坑1号について、当初は大型土坑と仮称。

8月 B～D-3～5区、C-11～13区、F・G-10・11区、人力によるⅡ～Ⅲ層掘削。C-13、D～H-10～13区、人力によるⅤ層掘削。Ⅱ～Ⅲ層から溝状遺構1号、道状遺構、土坑3号、地下式坑3、4号検出。Ⅴ層から集石1、2号検出。大型土坑が、地下式坑と呼ばれる遺構であることが判明。現道付替工事の遅れ。空撮(5日)。一部引き渡しに係る完成検査(6日)。

9月 B～D-3～7区、C～E-10～11区、人力によるⅤ層掘削。D-5～10区並びにG-9～11区の北辺、D～G-10区西辺に旧石器調査区を設定し、人力によるⅧ層以下の掘削を開始。Ⅴ～Ⅵ層から土坑1号、堅穴住居跡1号を検出。下剥峯式土器出土。Ⅵ層は、当初無遺物層と想定していたため、調査対象面積等について文化財課、榎バスコ等と追加協議を行い、調査に着手。側道工事に係る工事立会(7日)。18日大崎町モニターツアー、鹿児島大学学生他来跡(8名、18日)。

10月 B～C-3～7区、C・D-10～13区、人力によるⅤ層掘削。C-4・5区南辺、D-6～9区北辺及び拡張区、G-9～11区拡張区、D～G-10区西辺、人力によるⅧ層以下掘削。堅穴住居跡2号検出。また、旧石器調査区から礫石器(第13図No4)、剥片(第13図No3)出土。第2地点電柱移設に一部遅れあり。中間検査(21日)。

11月 B・C-6区西辺、C-10区並びにD-10～13区拡張区、人力によるⅧ層以下掘削。調査対象区域の包含層掘り下げを終了。角錐状石器(第13図No1)出土。井村隆介鹿児島大学大学院准教授、地下式坑現地指導(2日)。第2地点電柱撤去作業終了(24日)。

12月 地下式坑2、5、6号調査。大崎町教育委員会来跡(2名、2日)。空撮(4日)。大分県立歴史博物館原田昭一氏現地指導(9～10日)。

1月 D-12区、旧石器時代包含層補足調査。地下式坑報道発表(18日)及び報道向け現地公開(21日)。

発掘調査終了(27日)

【整理作業】

第3地点の出土遺物については、6月から水洗い・注記等基礎整理作業に着手し、10月から分類、1月からは接合作業に移行した。

2月4日、埋文センターに収納した。

第5節 整理・報告書作成

1 整理・報告書作成作業の組織

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は、県から受託した調査センターが平成27・29年度に実施した。平成27年6月～平成28年1月は、永吉天神道遺跡整理作業場で発掘調査の一部として基礎的整理作業(水洗・注記中心)を行った。

平成27・29年度の整理・報告書作成作業に係る組織は、以下のとおりである。

(1) 平成27年度(平成27年4月～平成28年3月)

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 堂込 秀人
作成企画	総務課長兼総務係長 有村 賢 調査課長 八木澤一郎
作成担当	調査第一係長 中村 和美 文化財専門員 湯場崎辰巳 文化財専門員 隈元 俊一
事務担当	主査 荒瀬 勝己
報告書作成検討委員会	6月8日・8月18日・11月9日・11月26日 調査課長ほか5名

(2) 平成29年度(平成29年4月～平成30年3月)

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長 前迫 亮一
作成企画	総務課長兼総務係長 中村伸一郎 調査課長 中原 一成
作成担当	調査第一係長 今村 敏照 文化財専門員 今村 敏照 文化財専門員 横手浩二郎
事務担当	主査 荒瀬 勝己
報告書作成指導委員会	6月7日・8月2日・10月4日・11月6日 調査課長ほか5名
報告書作成検討委員会	6月12日・8月9日・10月11日・11月9日

2月13日 センター長ほか5名

2 整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託

平成27年度整理作業・報告書作成作業の実施にあたり、調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。委託内容等は以下のとおりである。

委託先	株式会社バスコ		
契約期間	平成27年4月13日～平成28年3月11日		
作業期間	平成27年5月11日～平成28年1月28日		
委託内容	報告書作成作業支援業務	1式	
	整理作業支援業務	1式	
	印刷製本業務	1式	
担当者	主任調査支援員	池畑 耕一	
	調査支援員	黒沢 聖子、関口真由美 松本 拓	
検査	中間検査	平成27年10月21日	
	完成検査	平成28年3月1日	

3 整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

(1) 平成27年度

整理作業は、第1地点の報告書作成業務と第2地点のA地点の整理作業と並行して始まった第3地点の発掘調査の進捗にあわせて、6月から基礎整理作業のみ実施した。(第1地点並びに第2地点の報告書作成業務経過については、「(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書」(8)並びに(17)に記載済)

- 4月 支援業務委託準備、入札
- 5月 支援業務委託開始
- 6月 出土遺物の水洗、注記開始
- 10月 中間検査
- 1月 基礎的な接合作業実施

2月 遺物を埋文センターに収納、支援業務委託作業終了、検査準備

3月 成果物提出、支援業務委託終了、完成検査

※ 本道第1地点の報告書を刊行。

(2) 平成29年度

第2地点2「古代・中世・近世編」の刊行と、第3地点の報告書作成業務(本報告書)及び第2地点3「縄文時代晩期～古墳時代編」の整理作業を調査センター直営で行った。

第2地点2「古代・中世・近世編」

- 5月 遺物図版作成(～6月)
- 7月 原稿等所内校正(～9月)
- 10月 印刷・製本入札
- 1月 報告書納品

第3地点(本報告書)

- 4月 遺物分類、接合、実測(～6月)
 - 5月 遺物トレース(～7月)
 - 7月 石器実測委託(～10月)
 - 9月 遺構図等データチェック・修正、統合・レイアウト(～2月)
 - 10月 挿図仮レイアウト、観察表作成、原稿執筆(～3月)
 - 11月 石器実測委託(～2月)
 - 12月 自然科学分析委託(～3月)
 - 1月 挿図完成
 - 2月 観察表完成、図版作成、作業員作業終了
 - 3月 原稿完成
- 第2地点3「縄文時代晩期～古墳時代編」
- 6月 包含層出土遺物搬入、分類、接合(～11月)
 - 10月 遺構出土遺物搬入、接合(～12月)
 - 12月 包含層出土遺物実測(～2月)
 - 石器実測委託(～3月)
 - 2月 包含層出土遺物実測終了、作業員作業終了

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境

大崎町は、鹿児島県の東南部、大隅半島の東部に位置する。東は志布志市、南は肝属郡東串良町、西は鹿屋市、北は曾於市と接し、南東は志布志湾に面している。

大隅半島は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に張出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)である。

西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500~600m級の山々、南部の大笠岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長上にあり、その間には丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流や、湾奥にある始良カルデラの入戸火砕流で、これらの火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開削されるが、丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず、広大な台地となっている。

一方、低地は高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成されるところもあり、特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は、北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川、東部を田原川、中央部を持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね2つに分けられ、北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き、起伏の激しい溪谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって、緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり、場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ、西部から永吉台地、飯塚台地、飯塚(中沖)台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川、永吉台地と飯塚台地の間を持留川、飯塚台地の東側を菱田川がそれぞれ流れている。台地の大部分は、約29,000年前の始良カルデラ起源のシラス土壌の上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色土壌が広がっている。

大崎町は、志布志市から東串良町まで約16kmにわたって続く幅1~1.5kmの砂丘海岸のほぼ中央部にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて、東串良町に至るまで約7kmの海岸線があり、弥生時代などの遺跡は数mにわたって砂に厚く覆われている事例もある。

永吉天神段遺跡は、永吉台地の東側縁辺部に位置し、志布志湾から直線距離で約6kmある。持留川とその支流に、東側と南西側を挟まれた標高約35mの河岸段丘及び標高約50mの舌状台地に立地する。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留川の流域沿いには、下層遺跡や荒園遺跡・麦田下遺跡・高久田A遺跡などがあり、本遺跡同様、旧石器時代~中世の遺構・遺物が確認されている。また、台地の麓には、三所大権現や櫛ヶ山古石塔群が所在し、付近の民家では多量の古銭が採取されていることから、中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。

第2節 歴史的環境

大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが、近年大隅中央広域農道や東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって、次第に歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

野方の天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が、二子塚A遺跡で副片が発見されている。永吉天神段遺跡とは持留川を挟んだ位置にある飯塚の荒園遺跡では、細石刃文化期の石器類が発見されている。永吉天神段遺跡では角錐状石器やナイフ形石器など、ナイフ形石器文化期の遺物やその製作跡が発見されている。

縄文時代

周辺では、縄文時代の遺跡の発掘調査例が増えつつある。早期では、野方の天神段遺跡で、多数の集石・窪穴土坑・落とし穴状遺構等が検出され、前平式・桑ノ丸式・石坂式・塞ノ神式・善浜式土器、石鏃・打製石斧が出土している。二子塚A遺跡では集石が検出され、吉田式・石坂式・塞ノ神式土器、石鏃・石匙などが出土している。井俣では、金丸城跡で石坂式土器・石鏃・凹石などが、岡別府の下層遺跡では集石13基や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・平格式・塞ノ神式土器、石鏃・石鏃等が発見されている。平良上C遺跡では、堅穴住居跡・集石・窪穴土坑と、石坂式・下洞釜式土器が、飯塚の荒園遺跡では、集石や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・

平格式・塞ノ神式土器、石鏃・石匙、耳輪などが発見されている。串良川の東側、永吉台地の西端にある鹿屋市串良町益畑遺跡では、前平式土器の時期の竪穴住居跡2軒、連穴土坑16基、集石85基、土坑160基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下割釜式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式などの土器や、石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器が出土した。

前期では、天神段遺跡で、曾畑式土器に伴い現状では西日本最古となる石剣や、石鏃・石皿・磨石等の多数の遺物が出土している。野方の立山B遺跡で、曾畑式土器が出土している。

中期では、立山B遺跡で阿高式土器が出土している。持留の京の塚遺跡では前期末から中期前半の土坑が170基以上検出され、在地の深淵式土器とともに東海系土器、近畿地方の大蔵山式土器、瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式とみられる土器が出土しており、広域な交流が伺われる。石鏃・石匙など石器の出土数も多く、扶杖耳輪も出土している。

後期では、京の塚遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器、磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では、指筒式・擬似唐滑文系土器が、細山田段遺跡では、土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。

晩期では、天神段遺跡で、竪穴住居跡・土坑群とともに、入佐式・黒川式土器、石鏃・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石が出土している。立山B遺跡と細山田段遺跡で、黒川式土器が出土している。京の塚遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第1地点では尖突文土器を伴う竪穴住居跡や鉢・壺、打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第2地点でも同時期の土器・石器などが多量に出土している。

弥生時代

砂丘後背地に立地する益丸の沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査で、竪穴住居跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され、入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器、鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており、河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されていることから、埋葬遺跡があった可能性もある。岡別府の下堀遺跡では、山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径8mの円形大型住居跡2軒・掘立柱建物跡5棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある河岸段丘状の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった河岸段丘上にある麦田下遺跡では、高付式土器、西南四国系の土器、瀬戸内系の土器などを含む後期の土器溜まりが検出されている。

田原川・持留川沿いには弥生土器の散布地が多く点在している。

古墳時代

志布志湾岸沿いには、大型前方後円墳をはじめ、多くの古墳群があり、畿内との関連をうかがわせる地域とされている。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀前半頃）の大型前方後円墳で、隣町に所在する串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第2の規模を誇る。墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mあり、そのまわりを幅12～23m、深さ約1.5mの塚が巡っているが、さらに周堤帯を挟んで周濠が巡る二重周濠の可能性も考えられている。周濠跡からは伽耶系陶質土器あるいは大阪府陶邑産産の須恵器や埴輪が出土している。墳丘の高さは、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、本来の後円部は現在より高かったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪片、形象埴輪片が採集されている。明治35年に盗掘を受け、腐食した直刀や鏝、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられている。

神領古墳群は、前方後円墳4基、円墳9基で構成されている。10号墳は墳長54mの前方後円墳である。主体部は6か所の縄掛突起のある別技法舟形石棺を軽石で覆った礎部で、周辺から管玉・勾玉、鉄剣、短甲の一部、鉄鏃東などが出土している。周溝からは盾持人埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や、愛媛県市場南祖産産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む大量の祭祀土器群が出土している。5世紀前半のものである。まわりには4基の地下式横穴墓が発見されている。6号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長43mの前方後円墳で、後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・仿製獣帯鏡各1面が採集され、石棺内から、鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が出土した。神領古墳群では他に5・6世紀の地下式横穴墓も8基検出されている。1号は、長方形家形の玄室、妻入りの羨道部取り付けで、軽石製箱形石棺内から鉄剣・イモガイ製貝鏡・仿製内行花文鏡・骨製簪などの副葬品が出土した。5号からも、イモガイ製貝鏡が出土した。6号の玄室内では南側に歯が数本、北側に大腿骨が残存しており、副葬品はなかった。

海岸から離れた所にも高塚古墳は広がり、田原川の東に位置する仮宿台地の縁辺部に立地する原田古墳群には、直径40mの円墳が現存する。また、軽石製組合せ石棺をもつ地下式横穴墓は、玄室が家形をなし、羨道部の取り付けが妻入りである。石棺内には、女性の人骨が残っており、刀子が副葬されていた。

町内では他に、飯限台地に飯限古墳群（円墳9基、地下式横穴墓21基）・仮宿台地に田中古墳群（円墳3基）・後迫古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡（地下式横

穴墓7基)が知られている。

集落遺跡として、原田古墳群と同じ台地の北側には長田遺跡があり、堅穴住居跡3軒が検出されている。野方の二子塚A遺跡では、堅穴住居跡3軒、土坑1基が検出され、4～5世紀代の成川式土器や、宮崎平野の影響を受けたと考えられる土師器が出土している。沢目遺跡では、古墳時代初期の堅穴住居跡5軒があり、住居跡内から成川式土器、土師器が意図的に並べられた状態で出土した。遺物には、布留式土器をまねて作られた土師器等が出土している。岡別府の下堀遺跡では、堅穴住居跡7軒・溝状遺構が、仮宿の荒園遺跡では、篋貫式土器とともに堅穴住居跡が検出され、そのうちの1軒は焼失住居跡である。永吉の高久田A遺跡では1軒、永吉天神段遺跡では4軒の堅穴住居跡が見つまっている。これらに続く永吉台地の西端にある鹿原市串良町細山田の小牧遺跡でも花卉状を呈する堅穴住居跡などが検出されている。また、大崎町の二子塚で採集されたと伝わっている朝鮮半島製の鍔造鉄斧もある。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し、その南端にあったと考えられるが郡境は定かでない。西端・南端とも不明である。この周辺の古代の考古学的様相も今のところ出土例が少なく定かでない。

古代の遺跡としては、天神段遺跡で掘立柱建物跡・堅穴建物跡・土坑・炉跡・土師器・墨書土器・刻書土器・鍛造銅片が確認されている。永吉天神段遺跡の第1地点では7棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器・須恵器・埴土器・鉄製刀子・砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野郎城跡・竜相城跡・金丸城跡・楯谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では、溝状遺構・土坑が検出され、青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼罎鉢・天目碗など14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。

近年の発掘調査では村落跡も各地で確認されている。天神段遺跡では、多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され、中でも土坑墓1号からは、阿安窯系青磁6点・青磁1点・青白磁1点・銅鏡1点・滑石製石鍋2点・鉄製品・木製品・土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では、溝状遺構・畝跡とともに、青磁・青花・中国陶器などが発見されている。荒園遺跡では、掘立柱建物跡や土坑・溝などが検出され、土師器・東播系須恵器などとともに華南三彩も出土している。永吉天神段遺跡でも、湖州六角鏡・白磁碗・羽釜のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され、青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や、東播系こね鉢・常滑焼・備前焼などの国内産陶器、桶粟型瓦器壙、滑石製石鍋、茶臼など多くの遺物

が出土している。

近世

井俣の金丸城跡は、中世から近世にかけての遺跡だが、17世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに、掘立柱建物跡7棟や水溜土坑(大型6基・小型2基)、炉跡16基、溝状遺構、墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され、炉周りに炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で梶形鉄斧が出土していることから、この炉については鉄生産に関連する可能性が考えられる。肥前染付・瓦器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。野方の天神段遺跡では、安永ボラ(1779年)を埋土とする畝畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。持留の京の塚遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し、遺跡や寛永通宝を副葬した墓坑5基が検出されている。

(参考・引用文献)

大崎町教育委員会

- 2001「立山B遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 2005「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 2006「美堂A遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 2014「麦田下遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・楯山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(154)
- 2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(173)
- 鹿児島県教育委員会(公財)埋蔵文化財調査センター
- 2015「天神段遺跡1」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)
- 2016「永吉天神段遺跡 第1地点」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(8)
- 2017「永吉天神段遺跡 第2地点(旧石器・縄文時代編)」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(13)
- 2017「荒園遺跡」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)
- 橋本達也
- 2010「古墳築造南限域の前方後円墳—鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第94巻第3号



第1図 周辺遺跡位置図(1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳 番号	遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
1	468-116	佐土原	曾於郡大崎町野佐 佐土原	台地	散布地	縄文、古墳	土器	平成12年：農政分布調査
2	468-115	大久保B	曾於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成12年：農政分布調査
3	468-3	大久保A	曾於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文(後)	指形式・市来式土器、 打製石斧	
4	468-99	赤野原	曾於郡大崎町持留 赤野原	台地	散布地	弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
5	468-2	川上神社	曾於郡大崎町持留 中持留	扇状地	散布地	縄文(後)	指形式・市来式土器	
6	468-67	持留牧	曾於郡大崎町持留牧 東尾ノ花	台地	散布地	縄文、古墳	磨製石斧片、成川式土器	平成9年：農政分布調査
7	468-135	西ノ上	曾於郡大崎町永吉 西ノ上	台地	散布地	弥生		平成18年7月：NTTドコモ九州の 電話基地局建設に伴う分布調査
8	468-100	初木段	曾於郡大崎町永吉 初木段	台地	散布地	弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
9	468-101	永道	曾於郡大崎町永吉 永道	台地	散布地	縄文、 弥生、古墳	土器	平成11年：農政分布調査
10	468-127	高久田B	曾於郡大崎町永吉 高久田	沖積地	散布地	弥生(前・末)、 古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成18年：農政分布調査 平成21年：財官農林事業に伴う発掘 調査
11	468-97	坂本原	曾於郡大崎町岡別府 坂本原	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
12	468-96	五嶋	曾於郡大崎町岡別府 五嶋	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
13	468-98	早馬	曾於郡大崎町岡別府 早馬	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
14	468-128	小柳	曾於郡大崎町岡別府 小柳	沖積地	散布地	弥生、古墳		平成18年：農政分布調査
15	468-137	麦田下	曾於郡大崎町岡別府 麦田下	台地	散布地	弥生(後)、 古墳、古代	土器溜まり、高付式・西南四 国系・瀬戸内系土器、勾玉、 磁石、成川式土器、墨書土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
16	468-129	宮田	曾於郡大崎町岡別府 宮田	沖積地	散布地	弥生、古墳	弥生土器	平成18年：確認調査
17	468-130	高久田A	曾於郡大崎町高久田・ 尾ノ道	台地	集落	縄文(晩)、 弥生(前～終末)、 古墳、古代～ 近世	竪穴住居跡・竪立住居跡跡・ 土坑・溝状遺構、入缶式・担 川式・刷目帯文・山ノ口式・ 中津野式・東原式土器、磨製 石鏃・石鎌・ガラス玉・青銅 古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
18	468-102	船迫	曾於郡大崎町永吉 船迫	台地	散布地	縄文、弥生、 古墳		平成11年：農政分布調査
19	468-103	下原	曾於郡大崎町持留 下原	台地	散布地	縄文(後)、 弥生、古墳	指形式土器、市来式土器、弥 生土器、土師器、磨製石斧	平成11年：農政分布調査
20	468-134	椎木段	曾於郡大崎町永吉 椎木段	台地	散布地	縄文、古墳、 中世	成川式土器、磨製石斧	平成18年：分布調査
21	468-104	永吉天神段 (本報告書)	曾於郡大崎町永吉 天神	河岸 段丘・ 台地	集落 墓域	旧石器、縄文 弥生、古墳、 古代、中世、 近世	竪穴住居跡・竪立住居跡跡・ 土坑墓・集石、ナイフ形石器、 尖頭器・縄文土器、弥生土器、 成川式土器、土師器、銅銭、 古銭	平成24～27年度 発掘調査 平成27年度 第1地点埋文調査セ ンター報告書(8) 平成28年度 第2地点1埋文調査セ ンター報告書(13) 平成29年度 第2地点2埋文調査セ ンター報告書(17)
22	468-53	下瀬	曾於郡大崎町岡別府 下瀬	台地	集落 地下式 横穴墓	縄文(早・後)、 弥生(中)、古 墳、古代、中 世	集石遺構、大型住居跡、土坑 を伴う竪立住居跡跡、地下式 横穴墓等、縄文土器、山ノ口 式土器、成川式土器	平成13～15年 大崎グリーンロード 建設に伴う発掘調査 平成17年度 大崎町埋蔵文化財発掘 調査報告書(5)
23	468-90	干浅	曾於郡大崎町井俣 浅瀬	台地	散布地	弥生、古墳	弥生、古墳	平成11年度：農政分布調査
24	468-30	金丸城跡	曾於郡大崎町井俣 小牧・金丸	台地・ 沖積地	城跡跡	縄文(早)、古 墳、古代、中 世、近世	竪立住居跡跡・土坑・溝、石 板式土器、石鏃、凹石、土師 器、磨製器、青銅、白銅、青 花・黄銅、磁石・瓦、鉄製 品等	段仁郷氏城域と言われているが、調 査でも不明 平成11・12年 大崎グリーンロード 建設に伴う発掘調査 平成17年度 大崎町埋蔵文化財発掘 調査報告書(4)
25	468-86	井俣牧	曾於郡大崎町井俣 井俣牧	台地	散布地	弥生、古墳	弥生、古墳	平成11年：農政分布調査

番号	道路台帳番号	道跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
26	468-122	井俣和田	大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成18年：確認調査
27	468-88	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	旧石器時代・縄文時代早期	集石、加葉山式、下割基式、委ノ丸式、押型文、平格式、寒ノ神式土器、石核・石鏃、磨石	平成27・28年：発掘調査
28	468-89	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査 平成23年：確認調査
29	468-87	坂上	大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
30	468-95	寛園	大崎町仮宿寛園	台地	散布地	旧石器、縄文(早)、弥生(中)、古墳、中世、近世	竪穴住居跡・溝状遺構、礫石刀核、礫石刀・礫石・歯平式、平格式、寒ノ神式土器、山ノ口式土器、成川式土器、東郷系須恵器、備前焼	平成24～26年 東九州自動車道建設に伴う発掘調査
31	468-49	美堂A	曾於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳、中世、近世	古遺・土坑、成川式土器、土師器、滑石、備前焼、常滑焼	平成14年 県営農免農道整備事業に伴う発掘調査 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
32	468-50	美堂B	曾於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成7年：農政分布調査
33	468-34	大崎城跡	曾於郡大崎町仮宿城内はか	台地	城跡跡	中世(室町)、近世		
34	468-33	胡摩ノ崎城跡	曾於郡大崎町仮宿古城	台地	城跡跡	中世(室町)		鎌井氏の城
35	468-51	小園	曾於郡大崎町仮宿小園	沖積地	散布地	古墳		平成14年：確認調査
36	468-29	野卸城跡	曾於郡大崎町水吉前田・深沢	台地	城跡跡	古代、中世		平安時代末築城(1190年)シラス採取で平壊
37	468-106	外園	曾於郡大崎町水吉外園	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
38	468-126	牧谷・白山	曾於郡大崎町水吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野卸城の堀の可能性有り	平成17年：農政分布調査
39	468-105	大迫	曾於郡大崎町水吉大迫	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年：農政分布調査
40	468-17	高井田	曾於郡大崎町井俣高井田(幾地)	台地	散布地	弥生(中)	土器	平成17年：農政分布調査
41	221-449	五色	志布志市有明町野掃字五色、塚穴	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
42	221-450	西ノ瀬	志布志市有明町原田字西ノ瀬、下五敷	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
43	221-407	坂ノ上	志布志市有明町原田字坂ノ上、前田、西原	台地	散布地	弥生、古墳		平成11年度：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221-352	清水	志布志市有明町原田字清水	台地	散布地	弥生(中)	磨製石斧、打製石斧	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：平田、原田、元宮の下、水田
45	221-439	東中原	志布志市有明町原田字東中原、大塚、藤原、中瀬	台地	散布地	古墳		平成10年度 農政分布調査 旧遺跡名：中瀬
46	221-504	大塚	志布志市有明町原田字大塚、出口、有本、竹塚	台地	散布地	縄文、古墳		平成8・10年度：農政分布調査
47	221-386	原田古墳群	志布志市有明町原田字大塚、竹塚	台地	円墳・地下式横穴墓	古墳	原田古墳(円墳直径40m 高さ5.6m 石棺蓋出) 大塚A古墳(円墳直径20m 高さ4.5m 石棺蓋出長さ1.3m 高さ1.2m) 大塚B古墳(円墳直径10m 高さ1.3m) 坂ノ上1・2号古墳(小円墳・地下式横穴墓(妻入型・軽石石棺・胎・人骨(成人女性)・刀子)	昭和58年度 大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：大塚殿、大塚古墳群、大塚A古墳、大塚B古墳、坂ノ上1号古墳、坂ノ上2号古墳、大塚 平成26年 鹿児島国際大学 発掘調査
48	221-366	長田	志布志市有明町原田長田、牧、春日免	台地	散布地	縄文、弥生(中)、古墳、中世	竪穴住居跡(弥生4・古墳3)・土坑墓(中世)、孤立住居跡跡(弥生3・古墳4・中世4)、山ノ口式土器、成川式土器、白磁、竪穴住居跡(弥生3・古墳)	平成11年度 発掘調査 平成15年 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
49	482-9	土市ノ間古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群1～5号	

第3節 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志IC～鹿屋申良JCT間には、第2表に示すとおり23か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第2表 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見廻	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25～30年度 に遺文センタ ー調査(隣接 地)	H30年度 終了	旧石器		ナイフ形石器、細石刃、使用痕跡片、磨石、叩石、ハンマーストーン
					縄文早期	土坑(H25年度遺文センター調査のみ)	石版式、押型文、下割釜式、石皿、磨石、石皿
					縄文前・中期	落とし穴、土坑	-
					縄文後・晩期		磨消縄文、丸尾式、西平式、中岳B式、磨石、磨石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が2基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。							
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m			文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。		
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 作業中	縄文早・後期		小牧3A、納骨式、西平式
					弥生中期		山ノ口式、須玖式
					古墳時代	溝状遺構	成川式土器、須志器
					古代		土師器、須志器
					中世	掘立柱建物跡、土坑、ビッド他	青白磁、滑石製石鍋、土師器、炭化米塊
古墳時代後半期と中世を中心としたの遺跡である。調査区内における両時期の集落構造物掘等に向け整理作業を進めている。							
4	小牧古墳群	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 作業中	旧石器	-	ナイフ形石器、細石刃核、細石刃
					縄文草創期	集石	土器片、黒曜石割片、磨石、敲石、石皿
					縄文早期	集石	吉田式、妙見、天道ヶ尾式、塞ノ神A式、塞ノ神B式、苦酒式、耳栓、石皿、磨石、異形石器
					弥生	-	弥生土器、石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成層の大きさに差が認められる。また、塞ノ神式土器の磁形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。							
5	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了	H29年度 終了	旧石器	-	畦原型細石刃核、細石刃、割片
					縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石、磨石集積	前平式、加葉山式、吉田式、乳ノ元V型、石版式、中厚V式、下割釜式、塞ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神B式、打製・磨製石皿、石鉢、局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前期に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは炭酸塩結晶が多量に出土した点である。							
6	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m			文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。		
7	木森	志布志市 有明町 野井倉 河原段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	H31年度 以降	縄文早期	集石	前平式、加葉山式、吉田式、押型文、下割釜式、石皿、石匙、磨石・敲石
					中世	掘立柱建物跡	須志器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品、鉄斧
縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の集石、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器、石器、石匙、磨石・敲石の他、須志器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品等が出土している。境界カルデラ噴火による液状化現象(噴砂跡)が確認されている。							
8	春日堀	志布志市 有明町 遠原 河原段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式、加葉山式、石版式、下割釜式、塞ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神式、打製石皿、打製・磨製石斧、トトロ口石器、磨石、台石、石皿、砥石、穿孔円筒
					弥生	竪穴住居跡	山ノ口式
					古墳	竪穴住居跡、溝状遺構土坑、棒状遺構	壘(貫貫式、東原式)、壘、塔、高塚、須志器高塚、棒状遺構、磨製石鏡片
					古代～中世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑墓、枕列跡、礎土跡	土師器
					近世	土坑、溝状遺構、古道、遺物集中	陶器、磁器
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑、集石、落とし穴、弥生時代の竪穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、打製石斧、磨石、穿孔石斧、トトロ口石器等をはじめ、弥生時代から中近世の遺物が出土している。また境界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)の痕跡も確認されている。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
9	相馬堀	曾於郡大崎町 栗田 台地上 標高約50m			文化財課の試掘調査により、本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。		
10	平良土上C	曾於郡大崎町 井保 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H29年度 終了	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	古田式、石版式、下割式、押型文、平槽式、石版、石版、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礮石、石杖、フレーク、チップ
11	宮船	曾於郡大崎町 井保 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 作業中	旧石器	礫群2基	ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石器、石杖、スクレイパー、鏃器、使用痕跡片、フレーク、チップ、磨石、卵石
					縄文早期	集石、土坑、土器集中	加葉山式、小牧3A、下割式、壺ノ丸式、押型文、平槽式、壺ノ神式、打製石版、磨石、チップ
					近世	—	摩崖焼、寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では、石器製作に関連すると考えられる石杖、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期では、集石、土坑、土器集中、ビットと土器、石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。							
12	栗園堀	曾於郡大崎町 井保 台地上 標高約45m			文化財課の試掘調査及び理文センターの確認調査により、本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。		
13	荒瀬	曾於郡大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了	H28年度 （第1地点） 終了 H29年度 （第2地点） 作業中	旧石器	—	畦型磨製石杖・細石ノ水品割片
					縄文早期	集石、土坑、割片・チップ集中	前半式、古田式、加葉山式、下割式、押型文、手向山式、平槽式、壺ノ神式、苦浜式、条痕文、壺形土器、石版、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ
					弥生中期	竪穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノ口式、磨製石版無蓋品、砥石
					古墳	竪穴住居跡	成川式土器、須恵器、鉄石
					古代以前	片葉研削溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播磨須恵器、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	摩崖焼
縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片葉研削溝、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。							
14	水吉天神政	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了	H27年度 （第1地点） 終了 H28年度 （第2地点） 作業中	旧石器	礫群、ブロック	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、割片
					縄文早期	集石、土器埋設遺構	前半式、加葉山式、古田式、手向山式、下割式、押型文、平槽式、壺ノ神式、苦浜式、条痕文、石版、石版、石斧、磨石、砥石、石皿、フレーク、チップ
					縄文前期	—	骨器類
					縄文後期	—	岩崎上層式、北久根山式、中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし穴、土坑	入式式、黒川式、剣目尖頭文、管玉、打製石斧
					弥生	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝墓、土坑墓群、土坑	入奉式、山ノ口式、黒契式、鉄鏡、磨製石版、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式火坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播磨須恵器、備前焼、常滑焼、瀬州六花磁、砥石、石塔、古銭
					近世	近世墓	摩崖焼、染付、寛永通宝、石臼
旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏡が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播磨須恵器等が多量に出土した。また、地下式火坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。							
15	京の塚	曾於郡大崎町 西待留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 作業中	縄文早期	集石	石版式、下割式、中原式、押型文、壺ノ神式、打製石版、石杖
					縄文前期～中期初葉	土坑、土器集中	骨器類、深溝式、大蔵山式、磨石式、船元式、打製石版、石版、石皿、スクレイパー、二次加工割片、磨石、砥石、石皿、石杖、フレーク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
縄文時代前期から中期初葉を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170番を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深溝式土器、近畿地方の大蔵山式土器や磨石式土器、瀬戸内地方の船元式土器等が出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要							
					時代・時期	主な遺構	主な遺物					
16	小牧	龍原市 中良町 細山田 台地跡 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 作業中	旧石器	—	細石刃、フレーク、チップ					
					縄文早期	堅穴住居跡、進穴土坑、土坑、集石	前半式、吉田式、石版式、下割式、平槽式、条痕文、石皿、磨石、石皿					
					縄文前期	—	骨器式、深浦式、磨石					
					縄文後期	堅穴住居跡、石皿立石遺構、伏土、石芥集積遺構、集石、土坑	阿高式系、岩崎上層式、指宿式、市来式、石皿、横刃型石器、打製石芥、磨石、石皿、大珠					
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式、剃目突帯文					
					弥生中期	—	入来式、山ノ口式、砥石					
					古墳	堅穴住居跡、礫集積、土器窟、土坑	東原式、辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏡、鉄製品、磁石、勾玉、軽石加工品					
					古代	土坑	土師器、須恵器短頸甕					
					中世以降	堅穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、焼土塊	土師器、白磁、青磁、石皿、輪羽口					
					旧石器時代から中世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他、古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて中良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。							
17	川久保	龍原市 中良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 調査中	H27年度 H29年度 H30年度 作業中 (A区・B区) 作業中 (C区) 本報告書 終了	旧石器	集石、土坑	割片尖頭器、ナイフ形石器、祇原型細石核					
					縄文早期	堅穴住居跡、集石、土坑	前半式、加栗山式、吉田式、倉園B式、石版式、下割式、押型文、壺ノ神式土器、石皿、打製石芥、石皿					
					縄文前期	集石	溝式、骨器式、磨製石芥					
					縄文晩期	集石	黒川式、剃目突帯文					
					弥生中期	堅穴建物跡	高橋式、下城式、山ノ口式					
					古墳	堅穴住居跡、竪穴遺構、溝状遺構、道跡	成川式土器、輪羽口、高杯脚輪輪羽口、鉄鏡、鉄珠、勾玉、管玉					
					古代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器					
					中世	掘立柱建物跡、溝状遺構、道跡	青磁、白磁、瓦器類					
					旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の堅穴建物跡や竪穴遺構を伴う遺構が発見されているほか、専用の輪の割片も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
					18	町田堀	龍原市 中良町 細山田 台地跡北部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 終了 H29年度 (2) 終了	縄文早期	集石	下割式式、平槽式
縄文後期	堅穴住居跡、埋設土器、落とし穴、土坑、石芥集積遺構	中岳Ⅱ式、石刀、石皿、打製・磨製石芥、セスイ製垂土、小玉、勾玉、管玉										
縄文晩期	—	黒川式土器、剃目突帯文										
弥生中期	堅穴住居跡	入佐式、山ノ口式土器、土製勾玉										
古墳	堅穴建物跡、地下式横穴墓、円形周溝墓、溝状遺構	成川式土器、土器、鉄剣、鉄鏡、刀子、ヤリ、異形石器										
古代	焼土跡、古道	土師器、須恵器										
縄文時代早期から古代までの遺跡。古墳時代では地下式横穴墓が88基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野遺跡や下城遺跡等と類似性が想定され、高塚項と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の堅穴建物跡から、榎文を施す完全な石刀が出土している。												
19	牧山	龍原市 中良町 細山田 台地跡北部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点) 終了 H30年度 (A地点2、 B、C、D地点) 作業中						旧石器	—	割片
										縄文早期	堅穴住居跡、進穴土坑、土坑、集石、石器製作跡	吉田式、石版式、下割式、辻タイプ、桑ノ丸式、押型文、石皿、石匙、スクレイパー、磨石、割片、チップ
										縄文前期	埋設土器(溝式)	溝式、条痕文
					縄文後期	土坑、落とし穴状遺構、埋設土器、石器集中部	市来式、丸尾式、西平式、太郎道式、三方田式、中岳Ⅱ式、打製・磨製石芥、磨石、割片、石核、台石、石冠					
					縄文晩期	土坑	入佐式、剃目突帯文					
					弥生中期	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式、打製・磨製石芥、磨製・打製石皿、磨石、磁石、石皿、青銅器					
					中・近世	古道跡	青磁、白磁、産摩焼					
					旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴跡が環状に発見されており注目される。また、同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24 は埋文センター 調査	H26年度 (1) 終了 H27年度 H28年度 (2) 終了 H30年度 (3) 作業中 ※H23～24 は埋文センター 作業	縄文早期	竪穴住居跡、速穴土坑、集石、溝とし穴、土坑、石製製作跡	前平式、吉田式、倉間B式、石版式、下割釜式、辻タイフ、島ノ丸式、中原式、押原文、手向山式、平橋式、邪ノ神式、石版、石版、石版、磨石、磨石、石版、打製石斧
					縄文後期	落とし穴、種集積	指宿式、市来式、石版、磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡、大型建物跡、掘立柱建物跡、円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式、掘凹線文系壺、土製勾玉、鉄器、磨製石版、石版、砥石、磨石、台石
					古墳時代以降	溝状遺構、畝状遺構	土師器碗、摩多焼
					縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形・円形の大形竪穴住居跡、種持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群、柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており、大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか、縄文時代早期の竪穴住居跡、速穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。		
21	立小野塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H27年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター 調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 終了 H30年度 (2) 作業中 ※H24は埋 文センター 作業	縄文前・中期	—	深溝式
					縄文後期	—	指宿式、市来式、西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式、須恵器、鉄器(刀・劍・鉾・刀子・鎌等)、青銅鈴、人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
					縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されたことである。支室内には鉄鍬や鉄剣等の鉄器、青銅製の副葬品や人骨が多数残っているほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製の副葬品をはじめ、多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。		
22	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター 調査	H22年度 終了 ※埋文センター 作業	縄文早期	—	石版式
					縄文後期	—	掘凹文、市来式、三方田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式、土製勾玉、打製・磨製石版、棒状道具、鉄器
					古墳時代	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶(加治木銭)
					弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また、集石が竪穴住居跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から、松木園遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鍬と類似する無蓋の鉄鍬が出土した。		
23	石塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター 調査	H22年度 終了 ※埋文センター 作業	縄文早期	集石、土坑	岩木式、前平式、志風頭式、石版式、平橋式、貝殻系板文、鎌石橋式、轟A式、打製石版、磨石、磨石
					弥生中期	—	山ノ口式、須玖式
					縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器1個体と轟A式土器が2個体出土し、両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。		



第2図 東九州自動車道（志布志1C～鹿屋串良JCT）建設に伴って調査された道跡(1:80,000)
 ※ 本図面調査を実施した道跡のみ記載。地図中の番号は表2の番号と一致する。

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

1 発掘調査の方法

永吉天神段遺跡の発掘調査は、平成23年度に確認調査、平成24～27年度に本調査を実施した。調査対象表面積は37,100㎡、調査対象延面積は87,500㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は、平成23年度の確認調査時において工用基準杭「STA113」と「STA105」の延長線を中心に、10m間隔で西から東に向かって1・2・3…、北から南に向かってA・B・C…と設定した。

このグリッドを基にして、M-1区の下左を原点（0,0）、縦軸をX、横軸をYとし、遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の一次堆積層は、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行い、遺物はトータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第1章に掲載）は、以下のとおりである。

平成23年度

確認調査は荒園遺跡と同時に実施した。その結果、永吉天神段遺跡の調査延面積は87,588㎡となった。

平成23年7月1日から9月28日までの約3か月間、調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを31か所設定し、調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は1×8mの長方形を基本とし、必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後、重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺構・遺物が発見した場合には、重機による掘り下げを即時中止し、山鉾・鋤簾等による人力掘削で遺構・遺物の検出を慎重に行った。検出した遺構については、写真撮影、実測を行った。出土遺物はトータルステーションで取り上げた後、掘り下げを続けた。

旧石器時代包含層の確認については、条件が整ったトレンチがあれば、安全対策を施した上でVI層（シラス）上面までの調査を試みたが、上層の包含層が厚く事前協議のための十分な調査結果を収集することができなかった。そのため、本調査にて改めて確認調査を実施し、発見された場合には調査範囲、期間等について別途協議

することとなった。

平成27年度

平成27年5月11日～平成27年1月28日の期間に、第2地点の町道部分の調査（8月～）と併せて行った。調査延面積は、約7,724㎡（第2地点町道部分：約4,650㎡）であった。調査範囲は安全上の措置として用地境界から約1.0～3.0m程度内側に控えて設定した。

第3地点は確認調査の結果から、中世から縄文時代早期（Ⅱ～Ⅴ層）の調査を中心に計画をたてて調査した。また、旧石器時代（Ⅷ～Ⅹ層）の確認調査は、地形確認用の土層ベルト沿いに設定したⅦ層（サツマ火山灰層）上面での縄文時代早期の遺構調査用トレンチ（幅4m）を利用して実施した。遺構・遺物が検出された箇所については、適宜トレンチを拡張し、遺構・遺物の広がりを確認・調査した。全調査の終了後、埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後、山鉾・鋤簾等による人力掘り下げを基本に行った。中世～古墳時代と縄文時代早期が主体になることから、Ⅲb層上面とⅥ層上面の地形測量を行った。

遺物が発見された場合は、小片はグリッド毎に一括して取り上げ、詳細が観察できる遺物は、必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。一括性が高いと判断した遺物及び遺構に関係すると想定した遺物については、縮尺1/5～1/10で実測を行った。

なお、遺構実測や遺物取り上げは、調査担当者の指揮・監督の下、発掘調査支援業務委託業者様（バスコ）の測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に調査し、調査担当者間で検討したうえで認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

堅穴住居跡は埋土や形状、床面の有無、遺物の出土など総合的に判断し、検出された順にSⅠの略記号と番号を付した。

溝状遺構は底面に硬化面を有するもの、硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつと判断したものに、検出された順にSⅡの略記号と番号を付した。

土坑及びピットについては、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土など総合的に判断し、検出した順に土坑はSK、ピットはPの略記号とそれぞれ番号を付した。大きな時期判断はできたものの埋土の色調の違いや時期の

異なる遺物が混在する遺構については、時期の判定を控えた。

なお、遺構は検出状況の撮影後に埋土の掘り下げ・遺物検出等を順次行い、必要に応じて撮影を追加しつつ調査した。実測作業は遺構の規模等に応じて縮尺1/10～1/20で行った。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては、可能な限り当時の生活面を把握することを目指した。しかしながら、第3地点は宅地や耕作地、雑木林等だった区域が広く、そのため攪乱を受けている地点も多く、遺構検出をはじめ調査は難航した。対策として、ミニトレンチを多用して攪乱部分の排除と情報収集に努めるなど、遺構の個々の状況に応じた調査方法を検討し、可能な限り残存部の記録保存を行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成27年度は、発掘調査と並行して遺物の水洗・注記等の基礎整理作業と、一部接合作業を行った。

水洗作業は、柔らかいブラシを用いて慎重に行なった。さらに、黒曜石や剥片石器など微細かつ破損しやすい遺物については、超音波洗浄機を用いた。

注記は、水洗終了後順次行なった。手作業で、換気等に十分留意しつつ進めた。用いる遺跡記号は、県の南の縄文調査室に重複の有無等の確認をとった上で、「NTJ」とした。

接合作業は、報告書作成作業の進捗状況にあわせて、翌年度以降の本格的な作業に向けての準備的段階の作業を行った。

なお、平成27年度の整理作業は、㈱バスコに業務を委託して実施した。

平成29年度の整理作業及び報告書作成作業は、調査センターの直営により、第1整理作業所にて、遺構図等データの編集加工、遺物実測等の作業を実施し、報告書原稿を完成させた。

第2節 層序

第3地点は住宅地であったことや長年の耕作の影響で攪乱が多く、さらにⅡ～Ⅲ層まで広く削平が及んでおり、調査計画の修正を余儀なくされた。一方、特に西側並びに南側は盛土が厚く、本来の地形は想定よりも傾斜しており土層の堆積も不安定な箇所が散見され、場所によっては薩摩火山灰層を除去したほとんどなくしてⅣ層に達してしまったりもしたところもあった。

なお、包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの1つとなる火山灰層の堆積状況については、薩摩火山灰層は比較的まだ安定して確認されたものの、アカホヤ火山灰層の堆積は不安定であった。

永吉天神段遺跡の基本層序 (第3図, 写真3)

I層：表土（造成土及び耕作土）である。3～5mm程度の白色軽石を多く含み、しまりがあり固い層と白色の軽石粒を含み、軟質である層の2つに分かれる箇所もある。

IIa層：黒色腐植土層で、下層に比べてわずかに暗い。中世の包含層である。

IIb層：黒褐色砂質土で0.5mm程度の褐色粒子を多く含む。上層に比べてわずかに明るい。古墳時代・弥生時代の包含層である。

IIIa層：黒色腐植土層で若干光沢があり、保水性に富み、わずかに粘りがある。縄文時代前期～晩期の包含層である。

IIIb層：褐色土で1～2cm程度の黄色軽石粒（池田火山灰：約6,300年前の池田カルデラ起源の噴出物）を含む。粘りはないが、硬い粒子を多く含みしまりがある。

IVa層：黄橙色土。アカホヤ火山灰（約7,300年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）の堆積層。

IVb層：黄色バミス（3～5mm）。幸屋降下軽石（アカホヤ火山灰一次降下軽石）である。

V層：にぶい黄褐色土で軟質な土である。縄文時代早期の包含層である。

VI層：黒褐色砂質土で、しまりがあり硬い。上層は縄文時代早期の包含層である。

VII層：灰黄褐色土。薩摩火山灰（約12,800年前の桜島起源の噴出物）である。

VIII層：暗褐色粘質土。

IXa層：VIII層に比べてやや明るく、粘性が弱い。旧石器時代の包含層である。

IXb層：灰黄褐色粘質土。旧石器時代の包含層である。

IXc層：褐色粘質土。

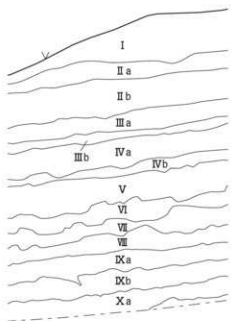
Xa層：にぶい黄褐色粘質土。旧石器時代の包含層である。

Xb層：灰黄色粘質土で、やや暗い暗褐色の硬質土がブロック状に含まれる。粘性は弱い。

Xc層：暗灰黄色ロームで、粘性は弱い。

XI層：二次シラス（約29,000年前の始良カルデラ起源の噴出物・AT）。

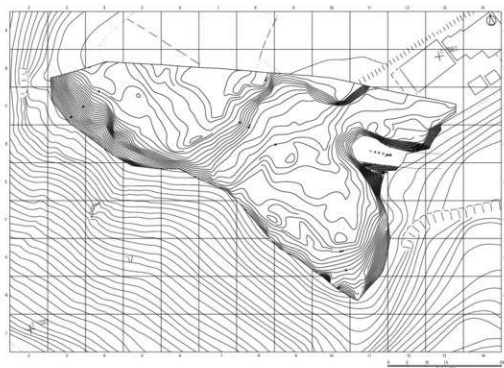
※ 火山灰の年代については、町田洋 新井房夫著東京大学出版会 2003『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』（p108～110）から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年校正した年代である。



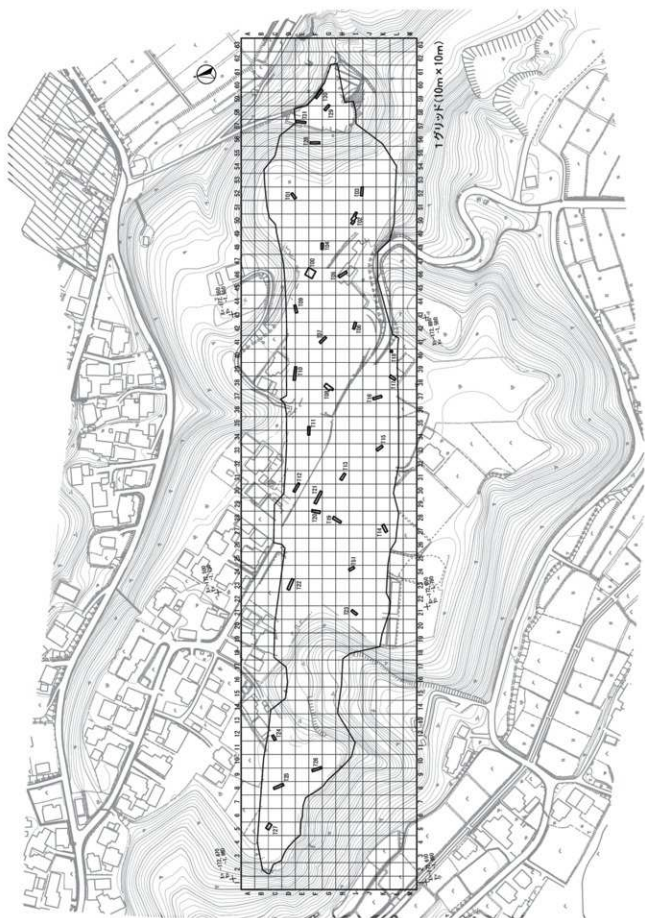
第3図 基本土層図



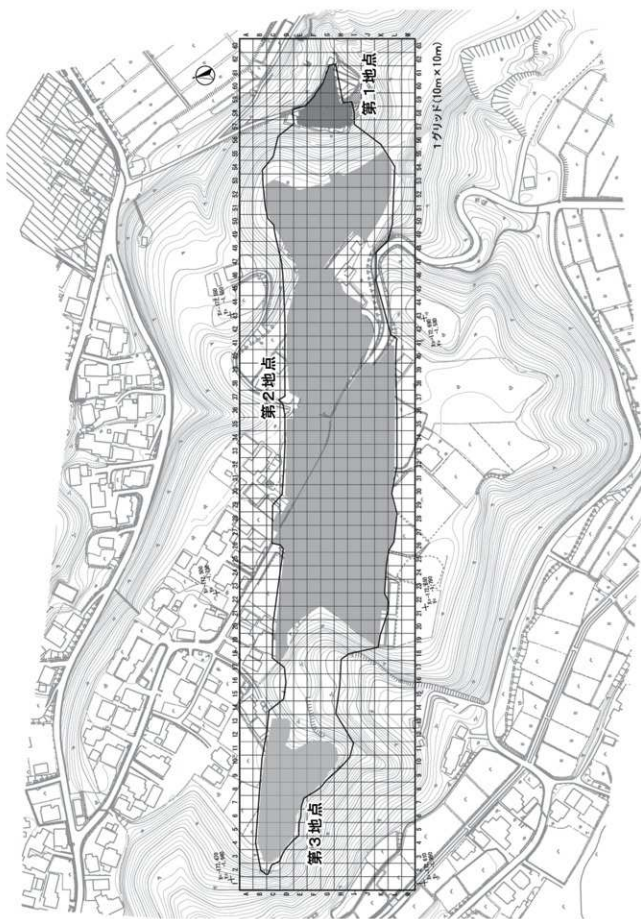
写真3 第1地点の土層



第4図 調査前地形測量図

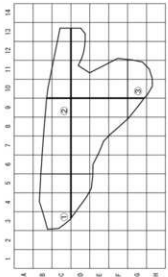
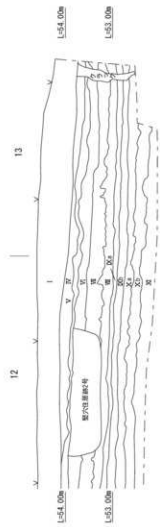
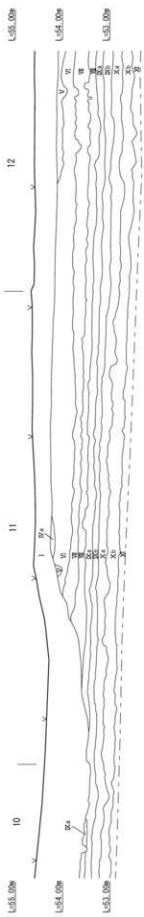
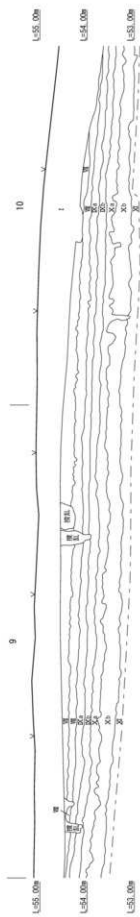


第5図 確認調査トレンチ位置図



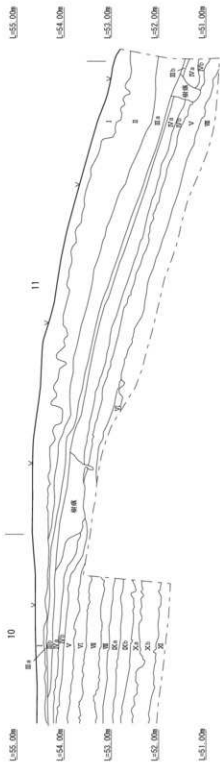
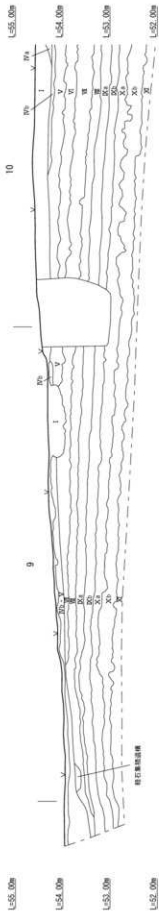
第6図 グリッド配置図及び調査範囲図

② C-010109-13グリッド

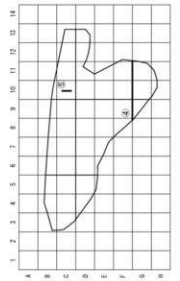
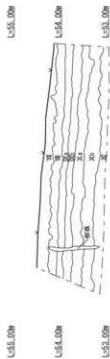


第8図 土層断面図(2)及び作成位置図

④ F~G断面→I-Jグリッド



⑤ C-10グリッド 旧石巻港部トレンチ築造位置図



第10図 土層断面図 (4) 及び作成位置図

第4章 調査の成果

調査対象地である天神の台地は、幅が200mほどの東西に伸びる舌状台地である。東九州自動車道は、台地の東端から中央部を上端約80mの幅で、ほぼ東西に抜けるように計画されている。

第3地点は、建設予定地の西端、台地の縁辺部に位置し、東隣する第2地点とは南西側から入り込む深い谷によって分断されている。

調査区域は、現代までの耕作や整地等によってやや南へ傾斜する平地になっていたが、表土を剥いだ段階で平地部分のほとんど(調査面積の約3分の1程度)がⅢ層(一部はⅥ層)まで削平されていることが判明した。そのため、地形の概要は、Ⅳ層上面での地形測量図に即して説明したい。

調査前には一定程度の平坦面があると想定されていた第3地点であるが、Ⅳ層上面ではB-D-7・8区一带におよそ南西-北東方向に伸びる細い尾根を最高点として西側へ下る傾斜面となり、東側は南東に一段下がったD-F-9・10区一带にわずかな緩斜面が広がるものの周辺谷へ下る傾斜面となる、東西並びに南面に傾斜面がせまる安定した平坦面の少ない地形である。

以上のような近現代の削平の多い条件下であったため、地下式坑など掘り込みの深い一部の遺構を除いて、古代以降の遺構のほとんどは発見できず、発見できた遺構も帰属時期の比定が困難な場合が多かった。また古代以降の遺物については、1層中の出土が多く、包含層中の出土であっても傾斜面での出土であることから、原位置の保持度合については若干慎重を期すべき状況にあると考えられる。

一方で、このようなやや起伏に富んだ地形でありながら多くの地下式坑が掘削され、さらに幅2mを超える遺状遺構が調査区から谷に下がるように構築されている。この点は、本遺跡第1・2地点とはやや様相が異なっている。

Ⅳ層の上では、古墳時代の遺物が一定程度出土した。なお、第1・2地点でも当該時期の遺構及び遺物はあまり多く発見されていない。

縄文時代の調査では、Ⅴ層上面において縄文時代早期の竅穴住居跡を2軒発見したほか、小規模な集石を数基発見した。

なお、調査区西端部は、次第に傾斜が急になったことから、安全確保のため、Ⅳ層より深部の調査を控えた。

旧石器時代の調査は、上層の成果を踏まえ安全の確保と可能な限りの情報収集の両立に努めた。

第1節 旧石器時代の調査

第1章でもふれたように、第3地点では確認調査時点で十分な調査ができなかったことから、平成27年度の本調査において下層確認を実施し、遺構等を発見した場合は適宜調査範囲を広げて様相の把握と遺物の取り上げに努めることとした。

下層確認は、調査範囲全体のX層以下の様相を効率的に把握するため、縄文時代までの調査で判明した旧地形の形状を踏まえて設定した(第12図)。そして、第1、第2地点及び県内の出土事例から、X~Ⅹ層を調査対象とした。

先行トレンチによる調査の結果、旧石器時代の地形は、現地形よりも東側並びに西側への傾斜が強くかつ細かい起伏もある状況であることが判明した。遺物が発見された地点では随時調査範囲を拡張して情報の記録に努めたが、礫群や土坑等といった遺構の発見には至らなかった。

遺物

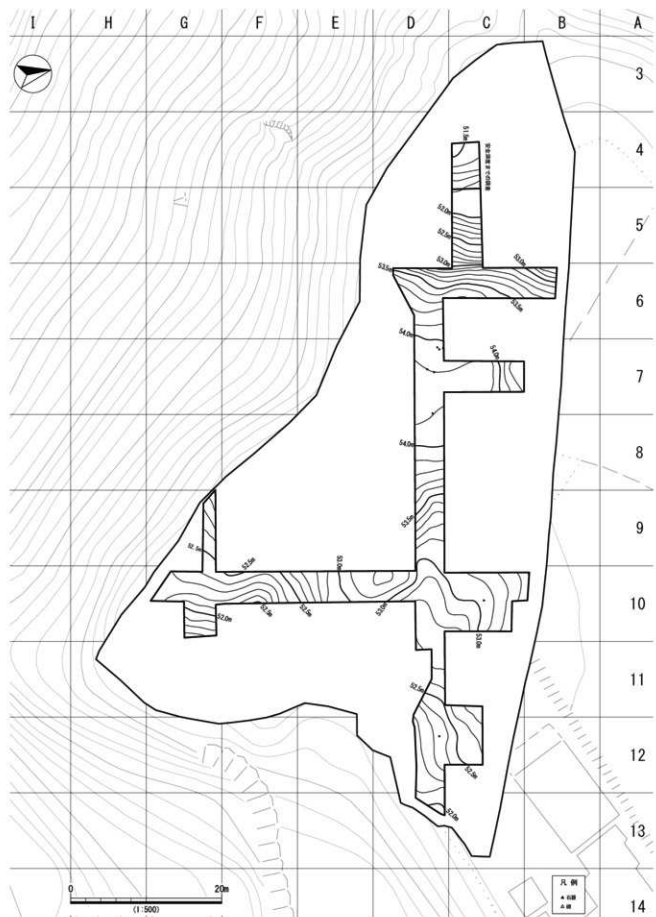
遺物は、製品が2点と剥片が1点、礫が数点出土した。主な出土層位はXa層である。

1は角錐状石器である。第3地点と第2地点を隔てる深い谷の際に位置するD-12区で出土した。厚みのある横長剥片を素材とし、打面側のみ主要剥離面から急傾斜剥離を施したあと、細かい後上調整を加えて整形している。基部側は、後上から加えられた大きな剥離により成形されている。石材は、宮崎平野で採集されるホルンフェルスと考えられる。

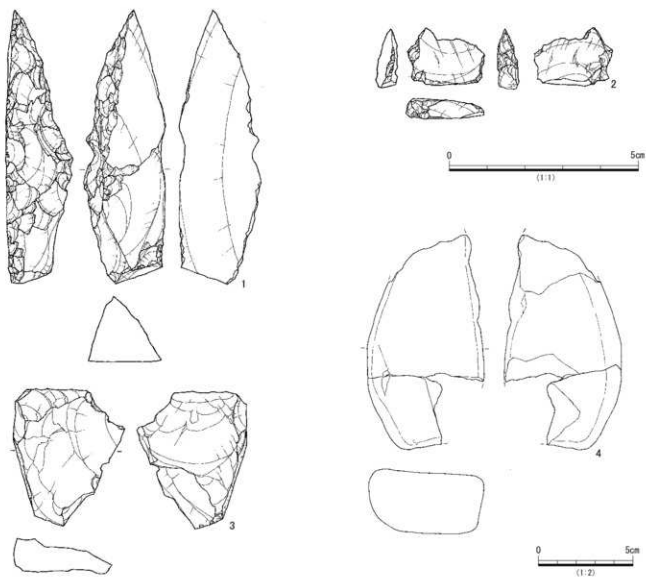
2は台形石器の破片である。C-10区の緩斜面で出土した。台形石器としては比較的大形の資料と考えられ、両側縁に微細な調整剥離が入る。不純物から破損したと考えられる。石材はガラス質で無色透明な部分が細かい縞状に連続し、大きさが不揃いの不純物がわずかに混じるといった特徴から、三船産の黒曜石と想定される。周辺を拡張したが、他に遺構、遺物は発見されなかった。

3は頁岩製の剥片である。調査区のほぼ中央にあたるD-7区で出土した。節理面を多く含むため複雑な割れ方をしている。剥片剥離の工程などで、はじき出されたものであろうか。宮崎平野の石材と想定される。周辺に遺物の広がりには確認されなかった。

4は砂岩の礫である。D-7区から出土しているが、3の剥片とは離れている。正面はきわめて平滑でやや凹むもの擦痕は観察されず、他の面にも使用痕など確認できない。接合資料ではあるが破断によるものである。資料下側がⅩ層から、上側がXa層から出土している。どちらの層も基本的に礫を含む層ではないから人為的に持ち込まれたものと想定されるが、用途等不明である。



第12図 旧石器遺物出土状況図及び地形測量図



第13図 旧石器時代の遺物

第3表 旧石器観察表

採掘 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド 遺構	層	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
13	1	36278	D12	Xa	角錐状石器	7.1	2.1	1.8	22.2	ホルンフェルス	
	2	36261	C10	Ⅱ	台形石器	(1.6)	2.0	0.6	(1.31)	黒曜石	
	3	36102	D7	Xa	刮片	3.6	2.9	0.9	9.72	頁岩	
	4	36103	D7	Ⅱ	礫	(11.3)	(6.1)	3.4	(300)	砂岩	
	36104	D7	Xa								

第2節 縄文時代の調査

1 早期の調査

早期の地形は、調査区はほぼ中央のB～D-7～8区に北東―南西方向の緩やかな尾根が走り、尾根より西側には南西方向の急な谷がせまり、東側は一段下にせまい平地があるものの、すぐに南東側と南側の谷に下る斜面となるという、現地地形より起伏が激しい地形であった。調査区南西隅は、安全確保のため一部調査を断念したほどである。

また、このような地形のためか、調査区内の土層堆積状況は全体的に不安定で、特に調査区南側のE～G-6～9区にかけては、VI層の堆積を確認できない区域が広がっていた。

遺構及び遺物は、VII層上面及びV層中で検出された。検出面については、上記した不安定な堆積状況のなかで、可能な限り土層との対比に努めた。こうした条件下、後述するように堅穴住居跡2号については、下層確認トレンチの壁面に遺構の一部がかかっていたことから、掘り込みレベルの検討を行うことができたのは望外の成果だった。

他方、発見された遺物については、ほとんどが集石から離脱したと想定される礫であり、土器並びに石器はごくわずかで、分析に耐えるものも掲載した点数程度しかなかった。

(1) 遺構 (第14～21図)

先に述べたように調査対象地が台地縁辺部で土層堆積も不安定な状況にも関わらず、VII層上面で、堅穴住居跡と想定できる遺構が2軒、土坑が1基検出されたほか、V～VI層にかけて集石が4基検出された。

ア 堅穴住居跡

堅穴住居跡1号(第15図)は、E・F-11区で検出した。半分程度が地下式坑5号の掘削並びに崩壊時に破壊されているため、正確な規模は不明であるが、残存部分から想定すると、平面形は長軸約290cm×短軸180cm超の隅丸長方形で、床面積は約48㎡となる。検出面からの深さは21cmである。

床面はVII層を掘り抜いてVII層上面に形成しているが、やや凹凸が認められるほか、地形にあわせてもか東側に向けてやや傾斜している。焼土範囲など炬を想定させるような痕跡は、残存範囲内には確認できなかった。壁面は、垂直ではなくやや緩やかに立ち上がり、意図的に変化をもたせた部分などは認められない。

柱穴と想定できるピットは、掘り込みの西隣に1か所(SI54-P01)確認したが、これ以外には検出できなかった。

埋土は3枚確認した。基本的にVI層に由来すると考えられる締まりの強い土が、おおよそレンズ状に堆積して

いる。また、各層に橙色のバミス粒が微量混じる(テフラ分析の結果P12の可能性が示唆された)。炭化物については、各層とも確認できなかった。

遺物は、埋土中から土器の胴部片が出土したが、小片のため型式等の判別には至らなかった。

堅穴住居跡2号(第16図)は、C・D-12区に設定した旧石器時代包含層の確認トレンチでVII層掘削中に検出した。そのため検出面は、遺構の南側ではVII層上面だが、トレンチの壁面で遺構の掘り込みレベル等を調査してから遺構の範囲確認を実施することができた北側では、VI層中で掘り込み開始面を確認することができた。

平面形は、長軸約280cm×短軸約175cmの隅丸長方形で、床面積は約39㎡である。検出面からの深さは北側で約50cmを測る。

床面は1号と同様にVII層を掘り抜いてVII層に形成しているが、傾斜等はなくほぼ水平に整えている。焼土等は、1号と同様確認されなかった。壁面は1号よりも鋭角的に立ち上がる。

遺構に伴う柱穴と想定できるようなピットは、掘り込み内並びに周辺ともに発見できなかった。

埋土は4枚確認した。基本的にVI層に由来すると考えられる締まりの強い土がほぼ水平に堆積している。また、1号と同様、各層に橙色のバミス粒が微量混じる(テフラ分析の結果P12の可能性が示唆された)。

埋土内から遺物は出土しなかったものの、炭化物の小片を複数採取できたため、フローテーションを実施した(分析結果は第5章を参照)。

なお東隣では、集石2号(第20図)が検出されている。

イ 土坑

土坑1号(第17図)は、D-7区で検出した。

平面形は157cm×70cmの不整形円形で、検出面からの深さは7cmである。埋土は1枚で、VI層に由来すると考えられる土に黄色バミスの小粒が混っていた。

遺物は出土しなかった。

ウ 集石

VI層上面では、集石が2基検出された。各集石の周辺には特に礫が集中して散乱する状況が認められたため、散乱域の中心部を集石として範囲を設定して調査し、その範囲以外の礫は地点のみ測量した(第18図)。

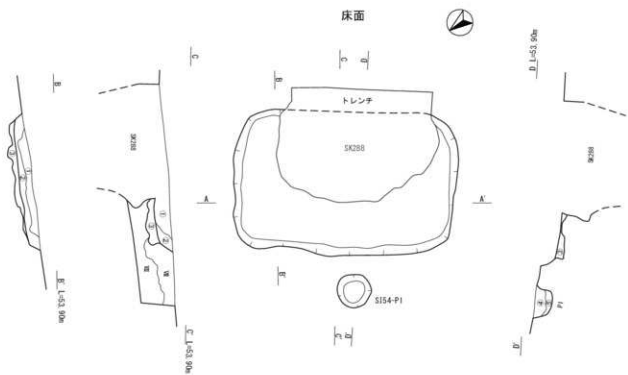
集石1号(第20図)はG-10区で検出した。約140cm×60cmの範囲に、大人の拳程度の礫が14個集中していた。すべて角礫で、被熱破砕している。石材はいずれも安山岩である。掘り込みは確認できなかった。

なお、近くから下利式土器の小片が出土している。

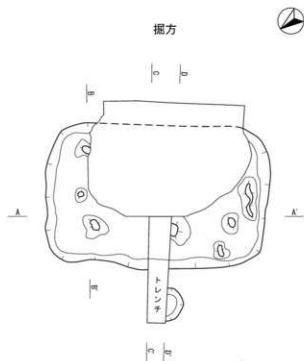
集石2号(第20図)はD-13区で検出した。160cm×90cmほどの範囲に、14個の礫が集中している。大人の拳大の礫も見られるが、5cm程度の小さなものが多くを占める。角礫がほとんどであるが、破砕しておらず被



第14図 VII層上面地形測量図及び竪穴住居跡、土坑配置図



- ① 黒褐色土 7.5YR2/2
- ② 黒褐色土 7.5YR3/2
- ③ 暗褐色土 10YR3/3
- ④ 黒褐色土 7.5YR2/2
- ⑤ 褐色土 10YR4/4



第15図 竪穴住居跡1号

熱の痕跡も確認できないものが多い。掘り込みは確認できなかった。

なお、西隣には竪穴住居跡2号がある。

集石3号(第21図)はB・C-6区で検出した。200cm×90cmの範囲に、大人の拳程の礫が25個散在している。構成礫のほとんどは安山岩の角礫で、被熱破砕しているものが多い。このほか、砂岩の角礫が2点と赤色を呈し軟質の礫が1点含まれていた。掘り込みは確認できなかった。

このほか、V層中から、C-7・8区で集石4号(第21図)を検出した。140cm×80cmの範囲に、大人の拳程の礫が24個散在している。構成礫のほとんどは安山岩の角礫で、被熱破砕していた。掘り込みは確認できなかった。

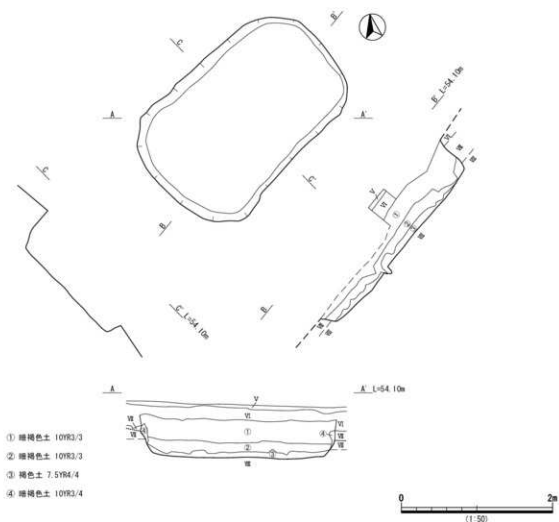
(2) 遺物

地形や土層堆積状況の割に、少ないながらも遺構が発見されたのに対し、包含層から発見された遺物は少なく、図化できたものはさらに少ないという状況だった。

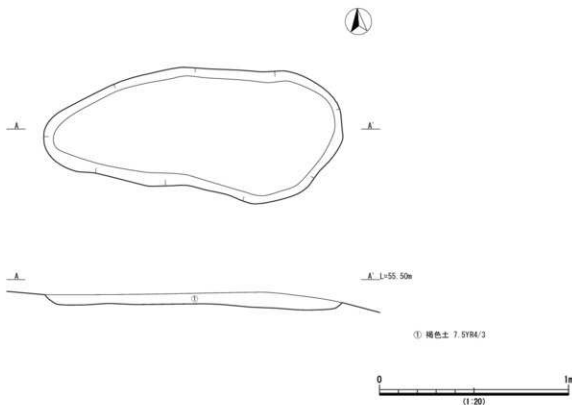
そのため、ここでは、早期に該当するV層及びVI層から出土した遺物をまとめて説明することとした。

ア 土器

5はB-7区のVI層から出土した前平式土器である。復元口径は18cm。土管状の直線的な器形で、口縁部は胴部よりわずかに広い。外面に施された、器面調整を兼ねたやや右下がりの貝殻条痕文は、向かって左から右に施文具を動かしている。上下どちらから施文していったかについては、この資料では判断できない。内面のケズリ調整は、下位から行っている。また、胴部ではほぼ垂直方向に長く工具を動かしているが、口縁直下では、より



第16図 竪穴住居跡2号



第17図 土坑1号

角度が斜位に変化し短く動かしている。口唇部には、胴部と同じと考えられる施文具で、横位の2条短沈線による列点文が廻る。口唇部内面のみナデ仕上げとなっているが、ケズリ調整で消されている部分もある。

6はC-7区のV層から出土した下剥峯式土器の胴部片である。器壁は比較的薄く、胎土には特徴的な金ウンモの細片を含む。内面調整は、その方向を確認できるほどであり、この型式にしては粗い仕上げである。

イ 石器

7はD-11区のVI層から出土した。先端部を欠損しているが、姫島産黒曜石製の打製石鏃である。大きめの調整剥離で浅い抉りを形成している。両側辺はわずかに外へ湾曲する形状となるようである。

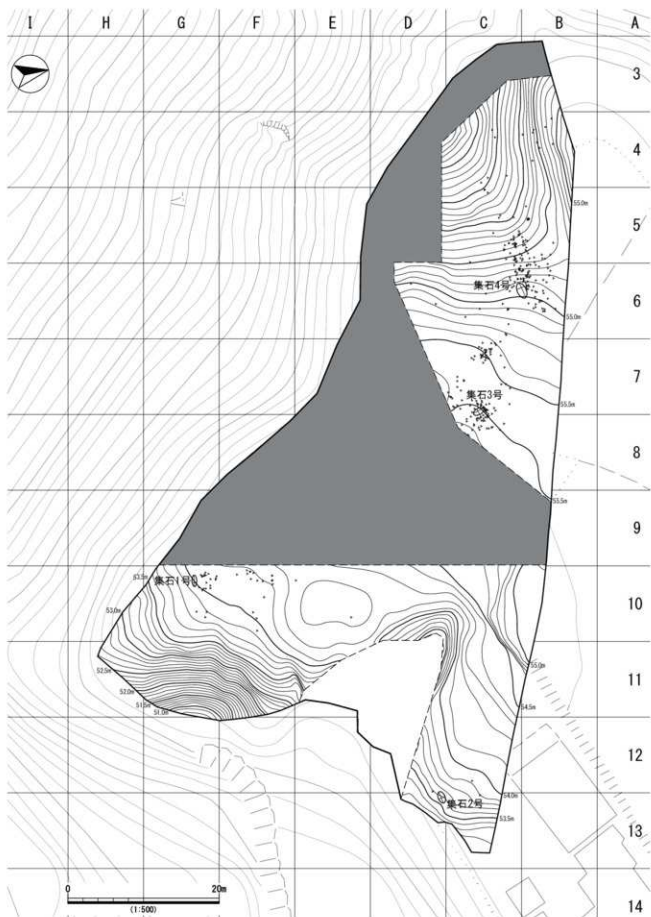
8はC-10区のVI層から出土した粘板岩製の磨製石鏃である。刃部や基部を含めて全面研磨して整形している。

基部はまったく抉りを作らず、まるで断ち切ったかのようにより正・背面に対し直角に面を整えている。

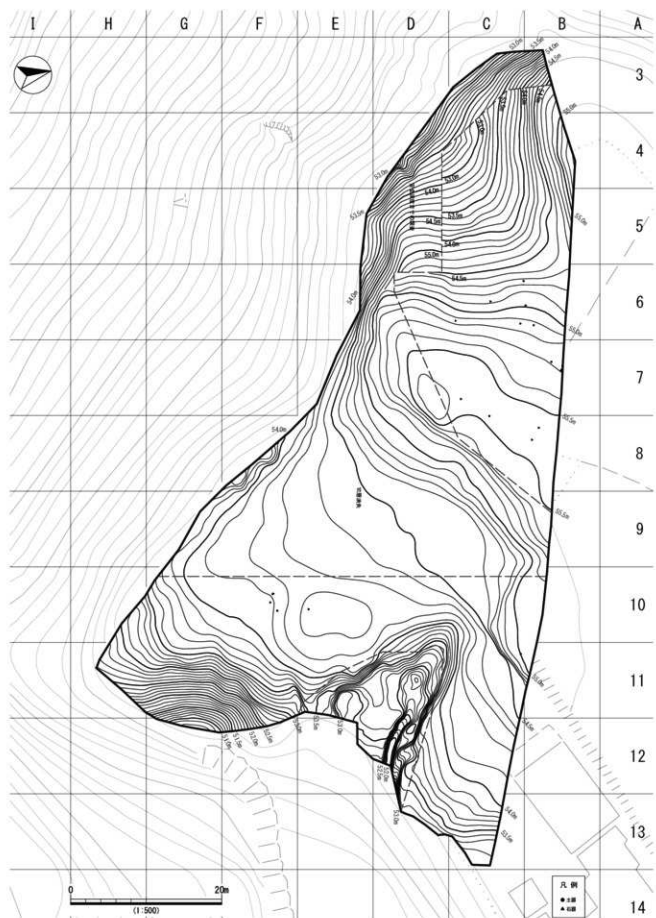
9はC-7区のV層から出土した磨・敲石の欠損品である。安山岩製で、図頂部並びに正面平坦部等に、若干の敲き部を観察できる。被熱のためか、色調がわずかに淡紅色を帯びている。破損部の稜もやや丸みを帯びているが、破損後も磨・敲石として利用し続けたかどうか判然としない。

10はF-10区のV層から出土した安山岩製磨石の欠損品である。側面に平坦部があるが、表面は滑らかで打痕等を観察できない。他の面も滑らかである。

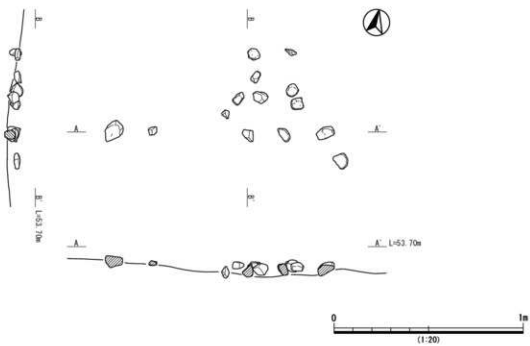
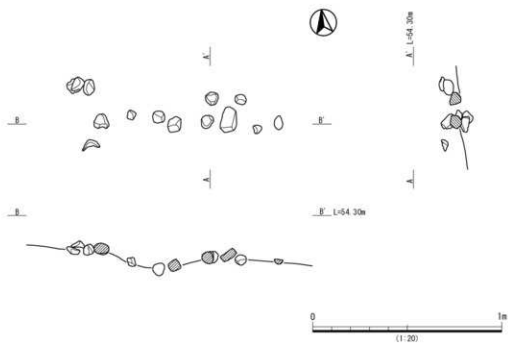
11はB-6区のV層から出土した礫器である。安山岩製で、平盤な板状礫の下端部に、ごく簡便な剥離を観察できる。



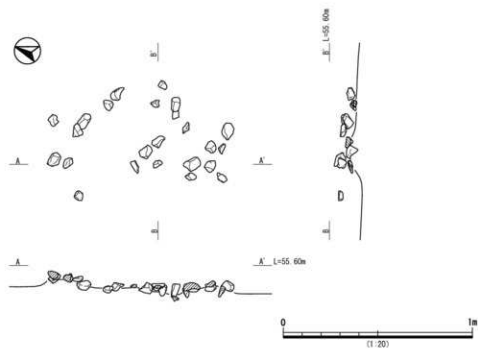
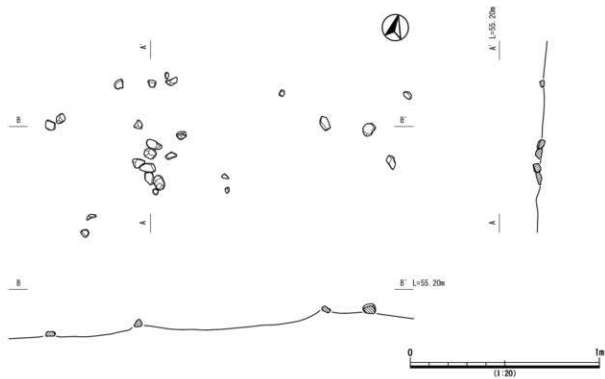
第18图 VI層上面地形測量図及び集石配置図



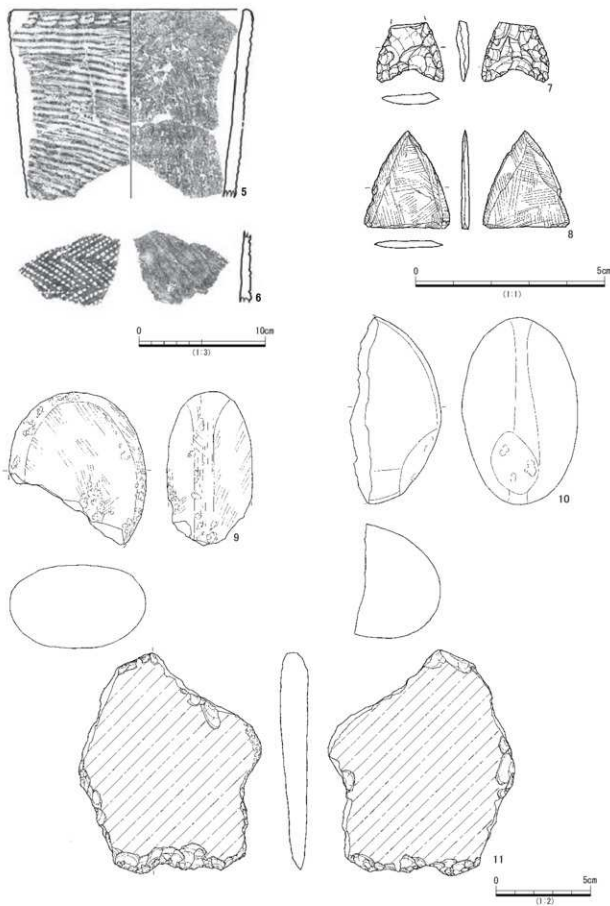
第19圖 V・VI層遺物出土狀況圖



第20图 集石1号・2号



第21図 集石3号・4号



第22図 縄文時代早期の遺物

第4表 縄文時代早期土器観察表

採回 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド 遺構	層	器種	部位	分類	径		調整		文様	色顔		胎土							焼成	備考																					
								口	底	器高	外面		内面	外面	内面	石英	緑泥	長石	矽石	礫石	砂粒			小片	粘土	焼成																		
																											口	底	外面	内面	外面	内面	石英	緑泥	長石	矽石	礫石	砂粒	小片	粘土				
22	5	33974	B7	V	深鉢	口縁部 -胴部	前半	18.0	—	(148)	—	ナデ (ナデ)	貝殻糸痕文	20YR5/8	20YR5/6	○												○	良好															
		36226	B7	VI																																								
		36227	B7	VI																																								
		36229	B7	VI																																								
		36234	B7	VI																																								
		36247	B7	VI																																								
6		33951	C7	V	深鉢	胴部	下淵部	—	—	—	ナデ	ナデ	断面状文	25Y5/3	25Y5/3	○	○																良好	表層										

第5表 縄文時代早期石器観察表

採回 番号	掲載 番号	取上 番号	グリッド 遺構	層	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
22	7	36271	D11	VI	打製石礫	1.6	1.8	0.3	0.88	黒曜石	
	8	36108	C10	VI	磨製石礫	3.1	2.3	0.2	1.43	粘板岩	
	9	33859	C7	V	磨・敲石	(8.1)	7.3	4.4	(209)	安山岩	
	10	33708	F10	V	磨石	9.6	(4.7)	5.9	(316)	安山岩	
	11	33977	B6	V	礫器	11.7	9.7	1.5	205	安山岩	

2 後～晩期の調査

縄文時代後～晩期の地形は、基本的には縄文時代早期と同様で台地縁辺部の起伏に富んだ状況であったが、層の堆積は早期と異なり全体的に安定していた。しかし、当該期に帰属すると判断できた遺構は発見されず、遺物も弥生～中世の遺構や遺物のなかに混在してわずかに出土する程度であった。

ア 土器

12～17は中岳Ⅱ式の深鉢と考えられる資料である。12～16はB・C-4～6区のⅡa・Ⅱb層から出土した。17のみC-13区のⅡ層から出土している。

12～14は、断面形状が異なるがいずれも2条の浅い横位沈線文が施文されている。12は、器面調整も含めて特に丁寧な仕上げである。

15、16は小片のため詳細は不明だが、比較的小形の深鉢の資料と想定される。15は器面調整、施文ともに丁寧である。

17は、底部接地面をこわすかながら上げ底状に整形している。

18～21は縄文時代晩期の刻目突帯土器の口縁部である。18は、F-11区のⅡ層から出土した。表面の剥落が著しく器面調整等は観察できない。わずかに内湾させた口縁部の外面上下端に、突帯を1条横位に巡らせて広く文様帯を設けた上で、それらを繋ぐように弧状に2条の突帯をつけている。文様の詳細は不明だが、突帯を用いて幾何学文を施文していると想定される。19はF-11区

のⅡ層から、20及び21はB-6区のⅡa、Ⅱb層から出土した。19と20は突帯の太さや刻目の形状が異なるものの、口縁部からわずかに下がった位置に施文されているのに対し、21の突帯は口唇部外面に施文されている。いずれも器面が剥落しており詳細な観察が困難だが、内外面ともに粗くミガキ調整が施されているようである。

22はB-6区のⅡb層から出土した。口縁部の小片で型式・器種ともに不明である。口縁部を断面略菱形に肥厚させ、口唇部も断面略方形に整形している。器面調整は内外面ともにやや粗いヨコナデである。胎土中には石英及び白色礫の細粒を多く含む。

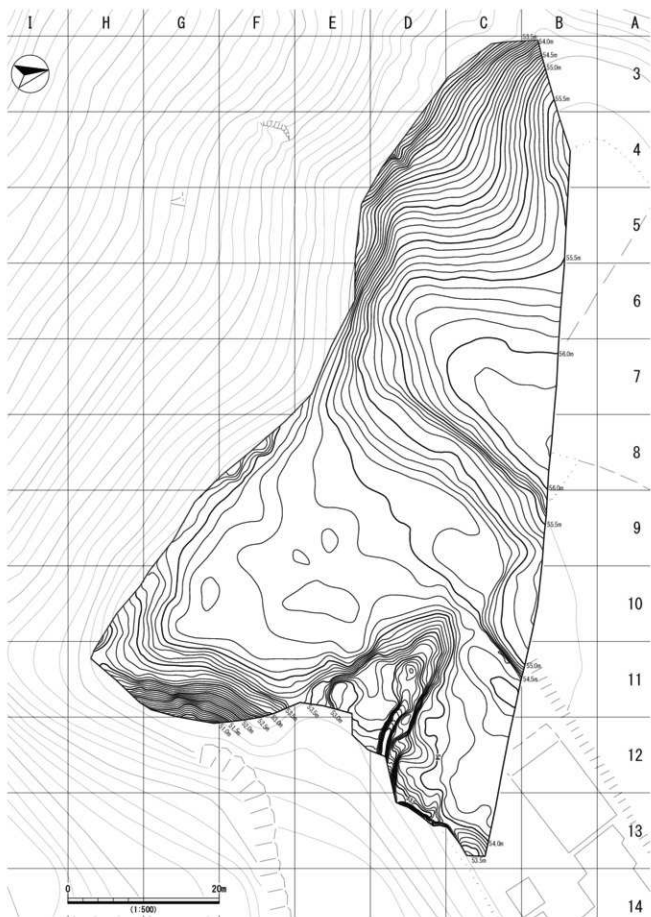
23、24は晩期の鉢または浅鉢の底部と考えられる資料である。

23はB-4区のⅡb層から出土した。小形の鉢の底部と考えられる。接地面はやや丸みを帯びて高台状に成形されている。器面は内外面ともにやや粗いミガキ調整が施されている。胎土中には小礫が目立つ。

24は浅鉢の底部と考えられ、上げ底に整形し浅く広く立ち上がる器形である。内面はほとんど剥落しており詳細を観察できないが、外面は底部から一体的に丁寧なナデ調整が施されている。胎土には白色粒が目立つ。

イ 石器

25は打製石斧の基部の欠損品と想定される。残存部で観察する限りだが、背面からの調整が少ない。ホルンフェルス製である。



第23图 IV層上面地形測量図

第3節 弥生時代から古墳時代の調査

第3地点における弥生時代は、第2地点の状況と比較して、遺構、遺物の数量ともに著しく少ない。古墳時代については、遺構については弥生時代と同様に少ないが、遺物については甕を中心にある程度が出土した。ただし、調査中及び整理報告書作成作業中に、双方の時代を明確に分別できる指標は見いだせなかったため、やむを得ず両時代をまとめて報告する。

こうした様相の原因としては、縄文時代と同じく、調査対象区が台地縁辺部であったことが要因と思われる。また、当該時期の主な包含層であるⅡ～Ⅲ層が台地中央部に近い平坦な区域で削平されていたことも、上記の結果に影響している可能性もある。

1 遺構 (第26図)

弥生時代から古墳時代のもの想定された遺構としては、焼土域が1か所と土坑が2基。調査区西端の傾斜面が始まるあたりから検出されている。

残念ながら、いずれの遺構も帰属時期を具体的に特定できる情報は得られなかった。検出時の状況や埋土の相対的な特徴など、周辺状況の総合的な検討を踏まえて当該時期と想定している。

(1) 焼土域

焼土1号はC-6区のⅢb層で検出した。

被熱の範囲は長軸128cm、短軸88cmで、検出面からの深さは約10cmである。意図的な掘り込みというよりもⅢb層中に残存していた被熱の痕跡を追った結果の状況である。

また、埋土①には焼土や炭化物が確認されたことなどから、埋土①の範囲を中心に金属探知器による調査も実施したが、金属反応はみられなかった。

この遺構に伴う遺物は発見されなかったが、上位で成川式土器が集中して発見されている。

なお、この焼土域の南側約1mの地点に土坑2号がある。発見時の状況等に類似点もあることから、双方に何らかの関連性があった可能性がある。

(2) 土坑

土坑2号はC-6区のⅢb層で検出した。

平面形は長軸79cm、短軸75cmでほぼ円形である。検出面からの深さは約20cmで、断面形状は床面は緩やかに立ち上がる皿状を呈し、途中で角度が変化して壁面を形成している。

埋土は、アコホヤ火山灰土を含む黒褐色土と明褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物は出土しなかった。

土坑3号はB-4区のⅢb層で検出した。調査区西端に近く傾斜面が始まっているあたりである。

平面形は径約120cmでほぼ円形である。検出面からの

深さは約44cmで、床面はごく緩やかなレンズ状でやや凹凸があり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。全体的に略円筒形を呈する土坑である。

埋土はほとんどが池田降軽石を含む黒色土であるが、床の角から壁際に沿って黒褐色土が偏在して堆積している。また、いずれの埋土にもアコホヤ火山灰が微量混ざっていた。遺物は出土しなかった。

2 遺物

(1) 弥生時代

第3地点での出土数はわずかだった。

26～28は弥生時代後期の甕である。26は口縁部で下面をかなり平坦に仕上げている。風化のため器面調整などは観察できなかった。27は明瞭な屈曲部のある胴部で、2条の横位沈線文はヘラ状工具で施される。28は底部で外面にタールのような付着物がみられる。

(2) 古墳時代

遺構は少なかつたが、包含層からはある程度まとまった数が出土した。なお、第28図の出土状況は、包含層の残存状況に起因する。

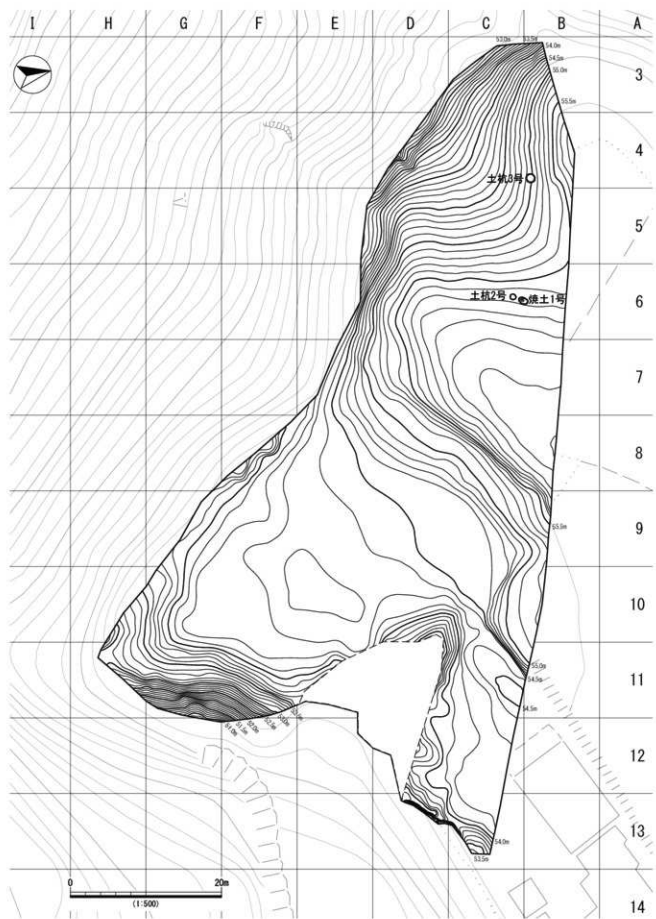
本遺跡の第3地点で出土する成川式土器は、摩耗が多いが「調整が丁寧」、「法量が小と大で極端」、「突帯に刻みがない」などの特徴がある。

29～92は甕である。口縁部の外反が明瞭な29～47と、外反するものの比較的弱く直口に近いものもある。48～61は突帯の有無で二分し、62～92は前述したもの以外で図化できた資料を部位ごとにまとめた。

29～39は口縁部が外反し突帯のある甕である。

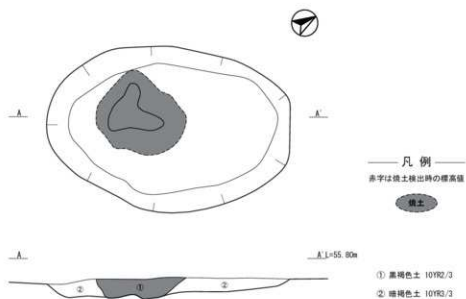
29は口縁部が曲線的に立ち上がる。口唇部は劣化しているが、断面の整形はやや丸みがあるようにみられる。

突帯には、突出を強調するような調整が丁寧に施してあるが刻目はない。外面には全体的にスガが付着している。30は胴部屈曲部から口縁部にかけて広範囲にスガが付着している。内外面とも丁寧なヘラナデが施されていると考えられるが、調整等により詳細は観察できない。突帯は、細かいつまみ出しで仕上げられている。突帯直上の器面につまみ出し作業に伴うツメ痕がみられるが、摩耗等が激しく図化できなかった。胴部はあまり張らず、直線的に成形される。口縁部はラッパ状を呈する。31は口縁部が曲線的に外反する。器壁は薄く丁寧な作りである。突帯は明瞭だが刻目はない。胴部最大径周辺及び口縁部外端にスガが付着している。32は口縁部がラッパ状に外反する。器壁は薄く丁寧な作りである。突帯に刻目はない。口縁部外面には、ナデ調整を施したあとにハケ目調整を等間隔に下から上へはね上げるように施した状況が観察できる。文様効果を意識している可能性がある。外面の突帯下にスガが付着しているほか、口縁部内面にもスガの痕跡が認められる。33は口唇部が内外面と

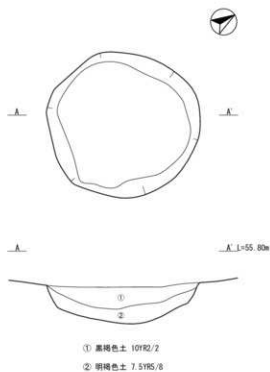


第25図 IV層上面地形測量図及び遺構配置図

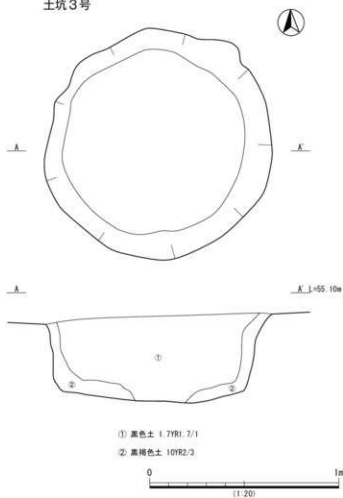
焼土1号



土坑2号



土坑3号



第26図 焼土1号・土坑2号・土坑3号

もに特に強いヨコナデで仕上げられている。その他は、表面が摩耗しているため詳細な観察ができなかった。34は外面に右上方向の規則的なハケ目調整を施しているのが特徴である。突帯は断面が明瞭な三角形に整形されているが、刻目はない。小片だが、成形・整形ともに丁寧な作りである。突帯部から口縁部にかけてススが散在している。35は器壁は薄く調整も丁寧だが、口縁部外面の仕上げが乱れている。突帯の刻目は主に下半のみ軽く施されているが、これが意図的なかどうか判別が難しい。胴部最大径付近にかすかにススが附着している。36は口唇部が断面方形を意識した仕上げになっている。突帯には工具による刻目のような浅い調整痕がある。想定される法量に対して器壁が薄い。37は突帯が細く刻目はない。外面のハケ目は基本的に丁寧だが、胴部最大径付近は上から粗くナデ調整が追加されている。胴部最大径付近の内面に、上から縦方向や斜め方向のハケ目調整が入る部分があるのが特徴的である。内面は口縁の調整が丁寧で器壁が薄い。38は外面が全体的に薄くススが附着しており、突帯の上下で器面調整の技法を変えている。内面は全体的に左上がり方向のヘラナデを施した後、丁寧なナデで痕を消している。突帯に刻目はないが、貼りつけた際のつまみの痕跡を残している。39は小振りで薄手の甕である。突帯の貼り付けはやや雑にみえる。内面には調整の際に消し損ねたと考えられる成形痕が残っている。

40~47は口縁部が外反し突帯のない甕である。なかには、胴部の突帯が施されるべき位置に器面調整で変化をつけている資料もある。

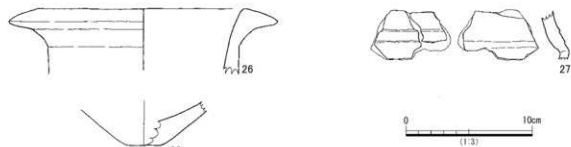
40は突帯はないが器面調整で変化をつけている。胴部はあまり丸みをもたず、胴部下位も直線的に立ち上がる。外面にハケ目調整があまり見られず、上面観がやや歪で不整形形になっていることから、製作時から丁寧なハケ目調整を施していないと考えられる。口唇部と脚端部に手づくね成形の痕跡が残っている。外面の上半分がやや黒ずんでおり、胴部最大径と口縁部外端にススが散見される。41は突帯が施されていないが、本来突帯があるべき部位が口縁部の器面調整の開始点となっ

ていて、器面に僅かな段差ができていることから、この部分に対して何らかの意識はしていたものと考えられる。口唇部は調整により断面を略方形に仕上げている。口縁部は全体的にやや波打っているが、整形の粗さによると考えられる。外面は広範囲にススが附着している。42は口唇部に指頭押圧による成形痕が残っており、そのため口縁部が全体的に小波状を呈している。43は胴部から口縁部までの曲線的な器形と口縁端部の整形が特徴的な資料である。口徑に対して器壁は薄く、器面調整に棒状工具を用いている状況を観察できる。外面は胴部から口縁部下にかけてススが附着している。44はやや粗い成形だが、突帯のあるべき部位付近で器面調整具のあて方を変えている。焼成がやや甘いため、口縁部断面の形状等は詳しく観察できない。45は突帯がなく頸部下の張り出しが強いなど、器形に特徴がある。外面は全体的にススが附着している。46は直線的な胴部から外反する口縁部にいたる器形と想定される。器面は内外面ともにハケ目調整が施される。外面にはわずかにススが附着している。この資料については、土師甕の可能性も検討したが器面調整の特徴などから成川式土器に含めた。

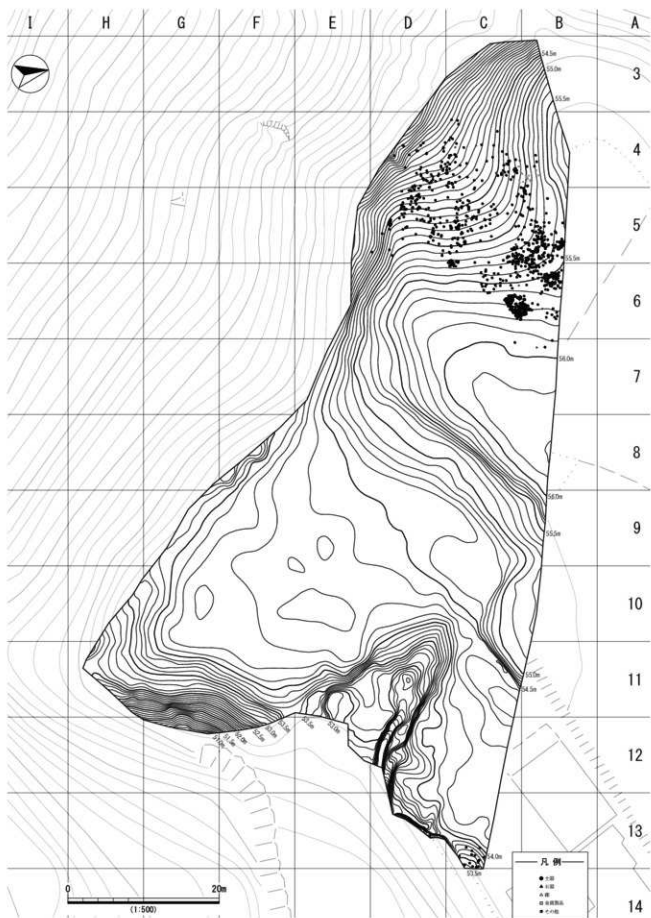
47は器壁がやや厚い。胴部はあまり張らないが下半部のすばまりが丸みを帯びており、胴長の器形にはならぬと考えられる。ス・コグの付着はみられない。

48~54は口縁部の外反が比較的弱く突帯をもつ甕である。

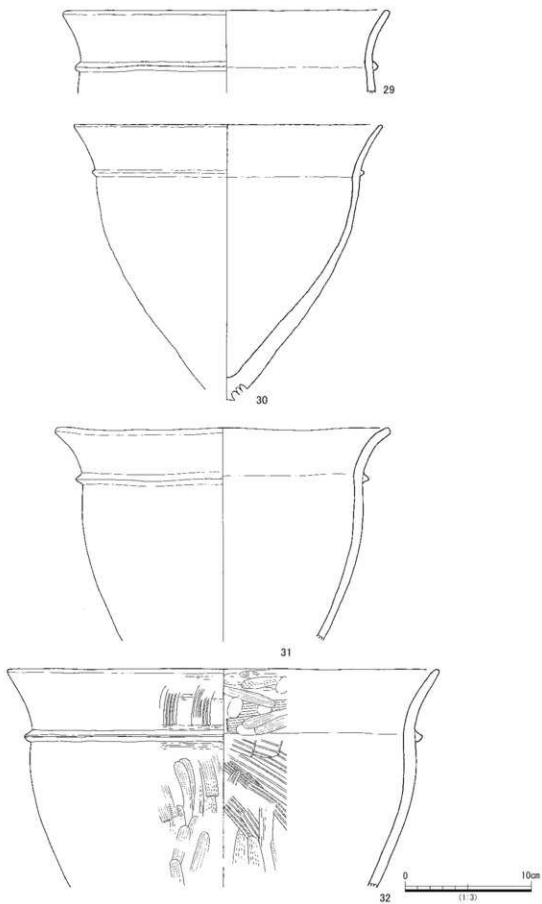
48は外傾する口縁部径が胴部最大径よりわずかに小さい。また、長胴形であり器壁は比較的薄い。調整は丁寧で痕跡をあまり残していないが、口唇部にはナデ調整を観察できる。突帯は工具による刻目で、つまみで整形していないのが特徴的である。49は想定される法量のわりに器壁が薄く、突帯に刻目はない。突帯より上位にススが附着している。50は想定される法量に比して器壁が薄く、胎土は小礫を多く含んでいる。突帯に明瞭な刻目はないが、貼り付ける際の指圧痕を意図的に残しているものと考えられる。全体的に摩耗が著しく、器面調整を含めて詳細を観察することができなかった。外面は、胴部から口縁部にかけて広範囲にススが附着している。51は



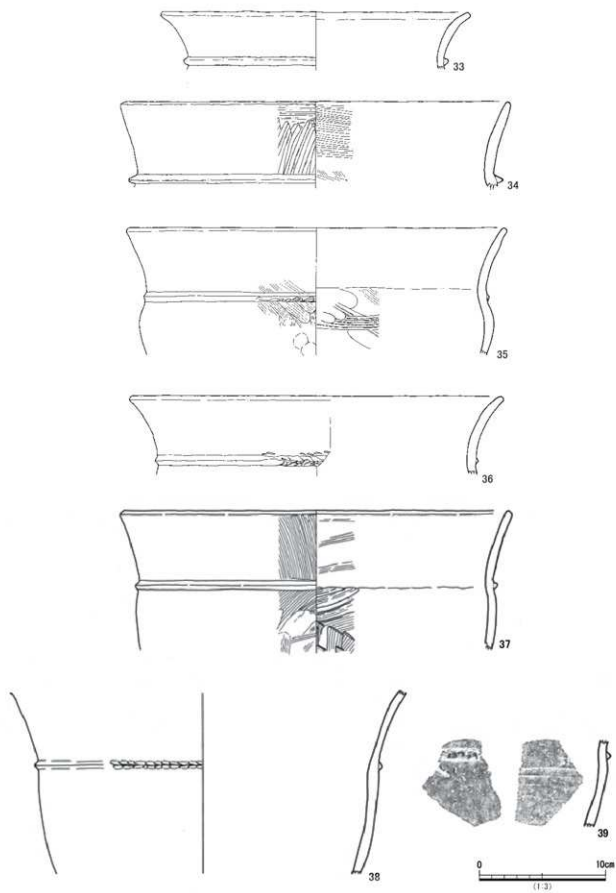
第27図 弥生時代の遺物



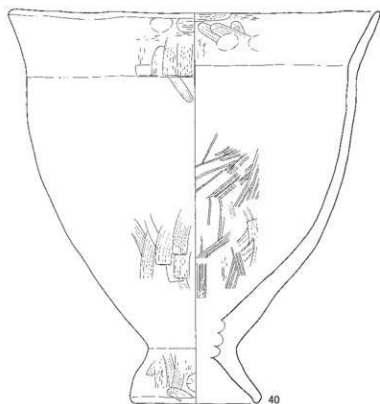
第28图 II·III层出土遗物分布图



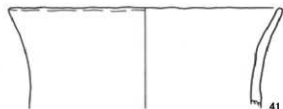
第29図 古墳時代の遺物(1)



第30図 古墳時代の遺物(2)



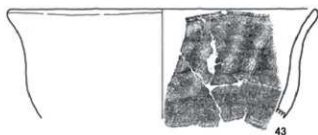
40



41



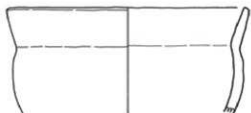
42



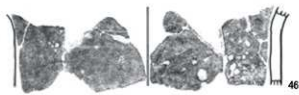
43



44



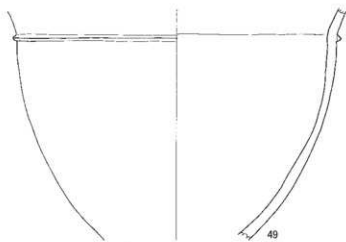
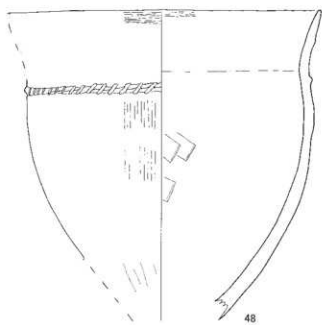
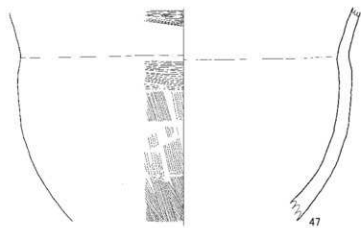
45



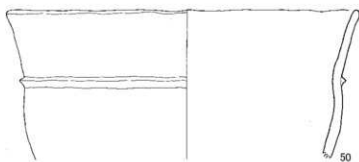
46



第31図 古墳時代の遺物(3)



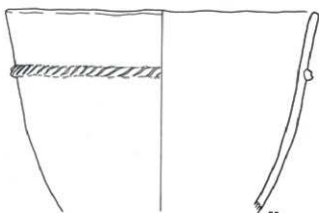
第32図 古墳時代の遺物(4)



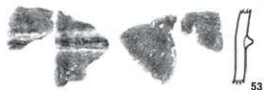
50



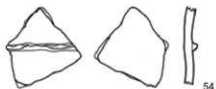
51



52



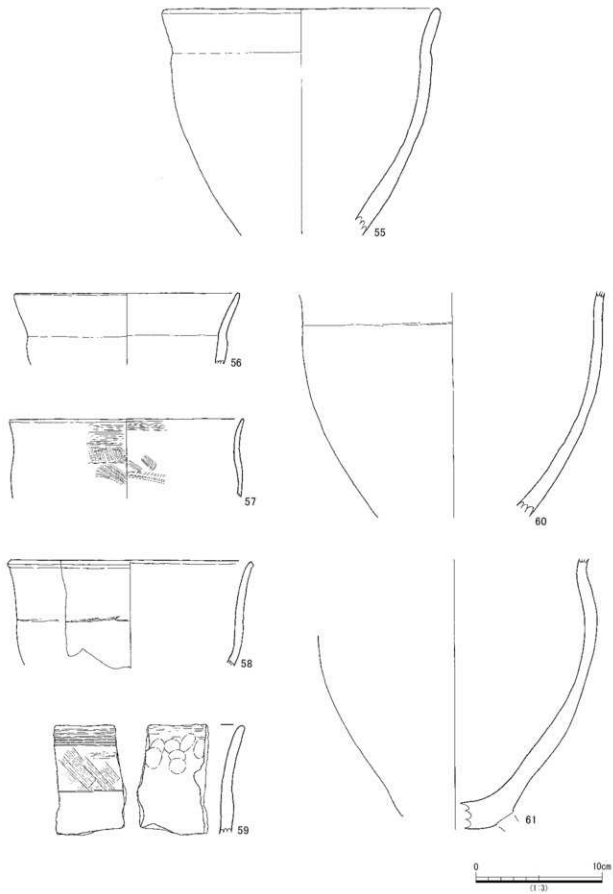
53



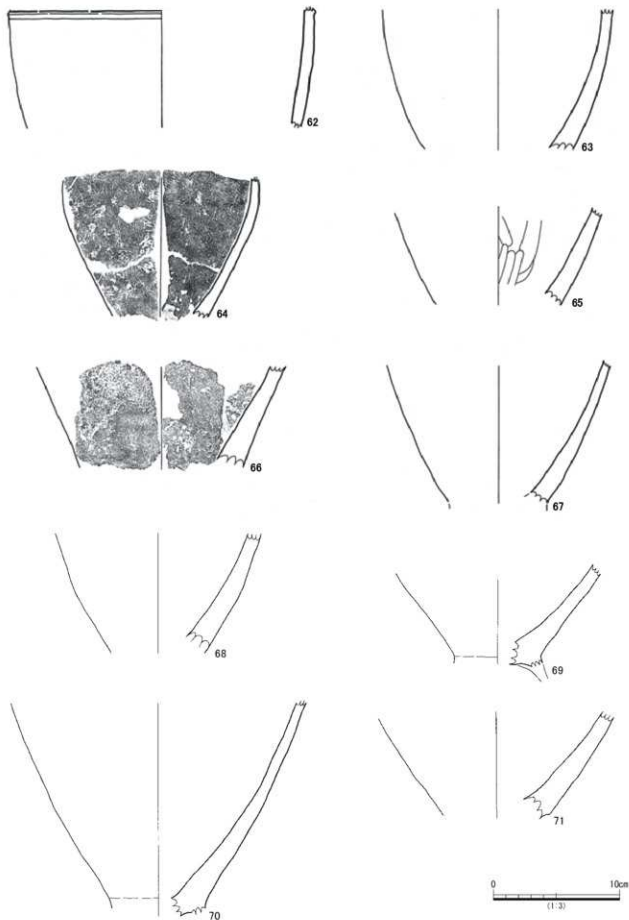
54



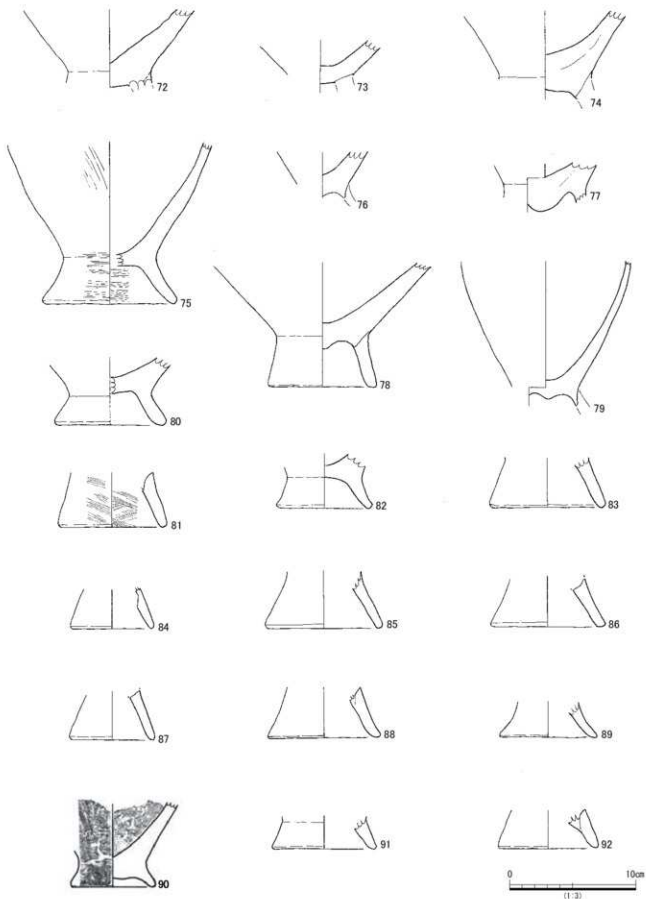
第33図 古墳時代の遺物(5)



第34図 古墳時代の遺物(6)



第35図 古墳時代の遺物(7)



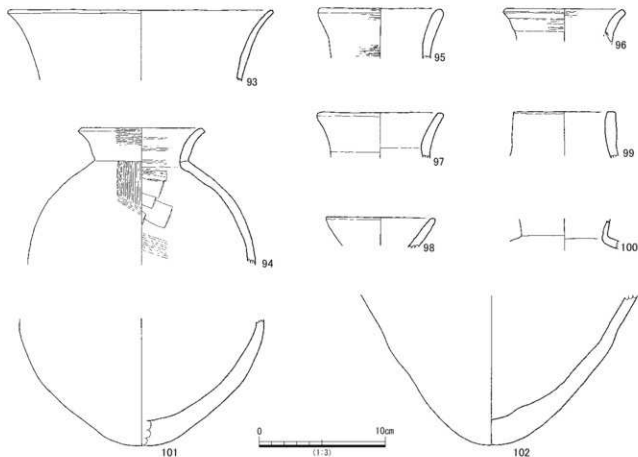
第36図 古墳時代の遺物(B)

口縁部がほぼ直線的な形状に仕上げられている。口唇部は断面が略方形を呈する。突帯はわずかに残っているが、刻目は確認できない。突帯の頂部がやや下に垂れる整形になっているのが特徴的である。内面に見受けられる凹凸は、調整段階に結果的に形成されたもので、成形時からの造作ではないと考えられる。外面の広範囲にススが付着している。52は器形全体がゆるく外に開き、口縁部は直線的に整形される。器面調整は丁寧である。突帯は断面が略漏斗形で、刻目は斜め上から施されている。突帯下には広範囲にススが付着しているほか、口縁部にも若干付着している。53は甕の胴部と考えられる。突帯は丁寧な整形で、刻目はない。突帯より上位にススが付着している。54は小振りの甕の胴部と考えられる。突帯に刻目はなく、整形もあまり丁寧ではない。外面にススが付着している。

55~61は口縁部の外反が比較的弱く、突帯のない甕である。

55は突帯を器面調整の変化で表現している。口縁部は直線的でやや短くわずかに外傾している。胴部はさほど張らない。胴部外面はススが広範囲に付着している。56

は法的には鉢程度であるが、器形から小形の甕に分類した。口縁部は直線的で外傾し、胴部より薄く仕上げられる。口縁部と胴部は、口縁部の調整を兼ねて境界を表現している。基本的に手づくね成形で、口唇部のみ軽いヨコナデで仕上げている。外面にススがわずかに付着している。57は器形に対してかなり薄手のつくりである。調整は浅いが丁寧である。外面には広範囲にススが付着している。58は丁寧な整形である。外面は口縁下までナデ上げるハケ目調整を施したあと、通常突帯がある位置に板状工具を押しあてて沈線状の凹みを巡らせている。わずかにススの付着がみられる。59も口縁部と胴部との境界をハケ目調整を兼ねた段差を形成することで表現しており、意識して区画していたことがわかる。段差より下位の胴部外面に、ススが付着している。60は突帯がつく位置に工具を連続して押しあてて形成した沈線文が1条巡る。工具は器面に押しあてるだけでかき上げ動作がみられないため、器面調整の意識はないと判断した。外面にススが付着しており、脚部付近には被熱の痕跡もある。内面には底部付近にコゲが固着したかのような黒ずみがみられる。61はややいびつな成形に比べて、丁寧な器面



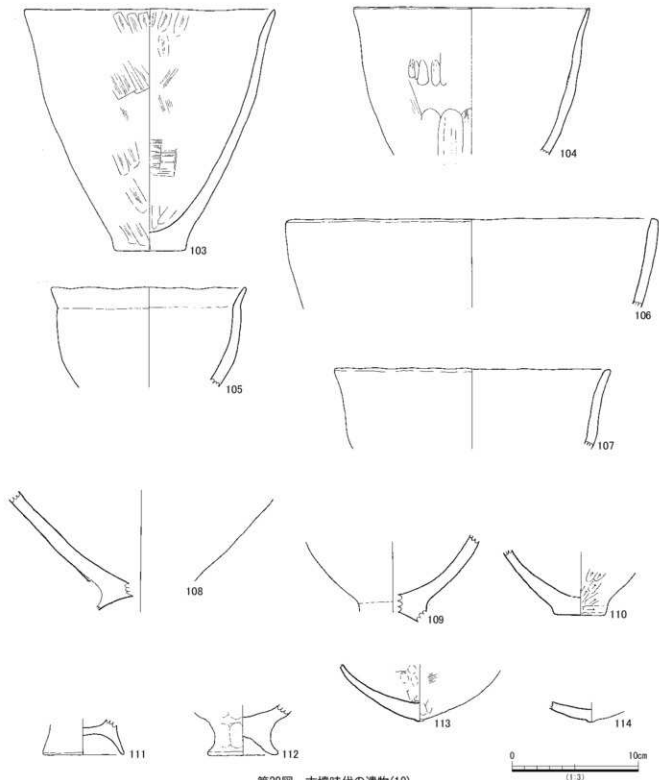
第37図 古墳時代の遺物(9)

調整がなされているのが特徴的である。外面には胴部最大径の上位側にススが付着しており、内面にも胴部最大径付近にわずかにコゲが付着している。

62～74は胴部から底部にかけての資料で図化できたものをまとめた。

62は上端にごく小さい突帯が残っている。貼付はしつ

かりしているが、刻目はない。内面は突帯が付されている部分付近の調整がやや粗い。63は外面が丁寧なナデ調整で仕上げられ、ハケ目はみられない。内面は色調がやや黒ずんでいるが、コゲは観察されなかった。型式や傾きは不詳である。64は内外面ともに小動物による引っ掻き傷と考えられる痕が観察される。外面には凹点が1か



第38図 古墳時代の遺物(10)

所あるが、文様ではなく製作時の偶然の結果と考えられる。内面には上部がハケ目、下部がナデによる調整が施されている。65はわずかに膨らみながら胴部へ立ち上がる。66は丸みがあまりなく、直線的に胴部へ立ち上がる。67は器面調整が丁寧でハケ目を消している。68は細身の器形だが比較的大形の甕である可能性がある。内面にコゲの痕跡のような黒ずみが観察される。69は外面には概ね縦方向のハケ目調整が施されている。内面はナデ調整で、全面にコゲが付着している。

70は、外面の広範囲にわたって被熱による剥落がみられる。胎土には小礫が多く含まれている。71は内外面ともに丁寧な調整が施されている。72は内外面の調整が剥落により観察できない。内底は略円錐形に整形してある。被熱の痕跡は明瞭。73と74は脚部が削れている。どちらも内面はナデによる調整が施されている。73は外面にヨコナデによる調整がみられるが、74は剥落により観察できない。75は表面の剥落や摩耗が激しいが、外面はハケ目、内面はナデ調整が観察できる。

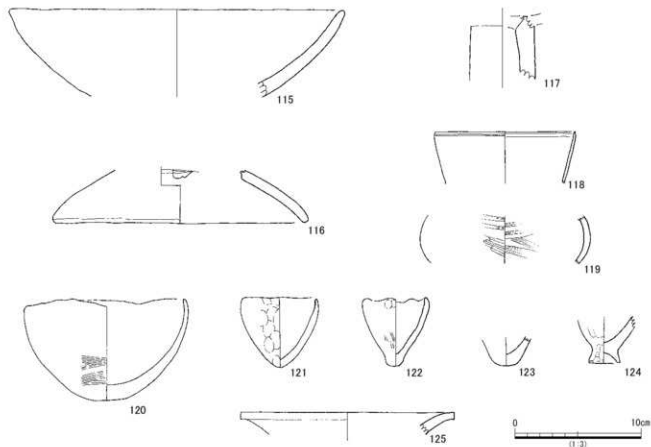
76~79はいわゆる「出べそ」が特徴的な資料である。

特に79は器面調整、成形・整形ともに丁寧な作りである。

80~92は脚部資料をまとめた。なかには、大きさから鉢の脚部である可能性のある資料もあると考えられるが、明確に分別できなかったため一括して取り扱った。

80は全体的に丁寧な作りで、脚端部は断面方形を意識していると考えられる。成形は手づくねで行い、整形はナデ調整で行っている。被熱によると想定される色調の赤化が観察される。81は径に対して立ち上がりが強く、ナデ調整で整形されている。小形甕または鉢の脚部の可能性がある。82は成形を手づくねで行った後にナデで仕上げているが、成形痕が残っている。平面観が楕円で接地面の凹凸も目立つため、やや雑な作りという印象を受ける。84は他の資料と比べて華奢な作りであることから、小形の鉢の脚部である可能性がある。

85は器厚が薄い成形で、全体的に丁寧な整形である。端部には、より丁寧な調整が施されている。86は成形・整形ともに丁寧で、端部もしっかりと断面方形に面取りされている。87は薄手の成形で、接地面を含めた端部は



第39図 古墳時代の遺物(11)

丸く丁寧に仕上げられている。比較的細身で高い形状をしており、直線的で間かない。90は小形の壺と想定してここに掲載したが、蓋の可能性も考えられる資料である。胴部の外面調整は粗く、縦位のハケ目がみられる。脚部は手づくねで、底径に比して長さが短く安定した形態である。

93～102は壺と考えられる。

93は広口の壺と考えられる。口径に比して器壁は薄く、丁寧なナデ調整で仕上げている。94は頸部の屈曲が明瞭で、わずかに張るなどで肩から胴部へと至る。外面を丁寧なナデ調整で仕上げている。また、外面にはスヌヤタールが付着している。95は口唇部と頸部外面の器面調整がやや雑である。96は口唇部に工具によるナデ調整が観察され、平坦に仕上げの意識を看取できる。97は小形の壺と考えられる。内外面ともナデによる調整が施されており、さらに内面下部にはハケ目のような痕跡もある。胎土には、ごくわずかに小礫を含んでいる。98は外面と口唇部の調整は丁寧だが、口縁部内面のみやや粗い。99は頸部から口唇部がほぼ直立する小壺と考えられる。100は肩帯が強く張る小形壺の頸部と考えられる。頸部はほぼ直行するが、口縁部形状は不明である。101は壺だが胴部の広範囲にスヌヤタールが付着しているほか、底部付近にも明瞭な被熱の痕跡がみられることから、状況や傾度は不明だが火にかけられたものと考えられる。102は底部資料で、全体的に摩耗しており、内面は円形の浅い刻線が全体に及んでいる。資料端部の外面にスヌヤタールが付着がみられる。

103～112は鉢と想定している。

103は全体的に薄手で口縁部がやや外反している。端部は鋭角に仕上げているが、手づくねによる成形痕が残っている。スヌヤタールの付着は視認できない。資料下位に色調の黒変部がみられるが、焼成時の黒斑的変色と思われる。104は103と類似した器形と想定されるが、胴部が103よりも丸みを帯びると考えられる。外面調整が粗く、口唇部は略方形に仕上げている。105は口縁部から胴部にかけての資料で、粗いナデ調整が施されている。外面には、わずかにスヌヤタールが付着している。106は器壁がやや厚いが、成形及び整形は丁寧に行われている。口縁部は剥落が多いが、略方形に仕上げているのを確認することができる。焼成は良好で、口唇部外端にわずかにスヌヤタールが残存している。107は口縁部がわずかにラップ状に外反し、胴部は最大径部分でわずかに稜を形成する。稜は器面調整の加減により形成されているが、全体的な調整はやや雑な仕上げとなっている。口唇部は断面略方形に仕上げている。外面全体にスヌヤタールが付着している。

108～112は鉢の底部付近と考えられる資料である。

108は器壁はやや厚手で直線的にかなり開く器形であ

る。器面調整は丁寧である。109は内外面ともに比較的丁寧なナデ調整が施されている。器壁は、器形に対してやや厚みがある。残存部にスヌヤタールは認められない。110は器壁が薄い。また胎土に小礫がほとんど認められないのが特徴的である。111は分厚い基部から手づくねで短く細い脚部をつまみ出して成形して器面調整は行わないという、特徴的な資料である。112は手づくね痕を残しているが、薄くて丁寧な仕上げである。脚は短く安定した形状で、わずかに「出べそ」を形成している。接地面は調整していないが、ほぼ水平である。

113、114は小型丸底壺の底部と想定している。どちらも底部に直径5mm程度の極小円盤が確認される。113は調整が丁寧で、胴部にかけて器壁が著しく薄くなる器形である。

115～117は高坏である。115は内面の丁寧なナデ調整や器形の全体の形状から高坏の坏部と考えられる。ただし、外面と口縁部は摩耗が顕著で詳細を観察することはできなかった。116と117は高坏の脚部と考えられる。116には透かしと想定できる部分がある。脚端部の調整は特に丁寧である。117は坏部との接合部分で、脚部全体はかろうじてエンタシス状になると想定される。丹塗りは確認できていない。

118、119は埴と考えられる。118は口縁部で、口唇部のみ工具を換えてヨコナデで仕上げている。119は全体的に薄く丁寧な仕上げである。外面はミガキ調整とみられるが、資料上部は摩耗していて詳細を観察できない。

120～124は手づくね土器である。120は鉢で、口縁部にかけて次第に薄くなる。内面には丁寧なナデ調整のみみられるが、口縁部が水平に仕上げられていないなど全体的な整形はやや雑である。底部下面にスヌヤタールが付着している。121は小形土器で、上面観はやや楕円形を呈する。122は手づくねで成形した後に、外面下位にハケ目調整を施している。内面は、器内面の平滑さや内底部の尖り具合から工具で整形していると考えられる。123は坏を模した土器の胴部から底部にかけての資料と考えられる。底部に繊維状の圧痕を観察できることから、焼成前にゴザのような敷物の上に置かれていた可能性がある。124は壺と考えられる。内外面から脚部まで全体的に整形は丁寧であるが、接地面は凹凸があり、手づくねらしさを残す。

125は須恵器の口縁部と想定しているが、小片のため器種等の詳細は不明。口唇部は断面方形で、端部中央がわずかに凹んでいる。

第4節 中世の調査

地形的な状況は、前節冒頭で述べた内容とはほぼ変わらない。しかし、第2地点で発見された地下式坑が調査区のはほぼ全域から検出されたほか、階段状の施設を伴う遺跡など、第3地点の調査では、当該時期が最も多く遺構を検出した。しかし、遺構に伴う遺物については、良好な出土状況を示す事例が少なかった。

遺物については、ある程度まとまった量が出土しているものの、番号を付して取り上げた資料については、前節同様遺物包含層の残存状況に左右される分布状況を示していることから、調査区の様相を少しでも説明するため、掲載遺物には、一括取り上げ資料も含めている。

1 遺構 (第40～64図)

上記並びに第40図にあるように、遺構数としては、土坑墓1基、地下式坑7基、土坑5基、道状遺構1条、溝状遺構1条、柱穴複数、第3地点の調査成果中最も多く発見されている。しかし、各遺構の同時期性や性格などの詳細を検討できるような遺物の出土状況には、残念ながら恵まれなかった。

以下、遺構の種類ごとに概要を述べる。

(1) 土坑墓

土坑墓1号 (第41図及び第42図)

B-7区のⅢb層上面で検出した。一部が調査区外に続いたため全形は不明だが、検出範囲での計測値は、長軸約180cm、幅約79cmで、平面形は隅丸長方形になると想定できる。検出面からの深さは約20cmで、床面はやや凹凸がある。壁面については、床面の角度が大きく変化する部分から検出面までを想定しているが、残存部が少ないためこれ以上評価できない。長軸はおおむね南東-北西方向を向いている。埋土はアカホヤ腐植土をわずかに含む黒色土の単層である。

遺物は埋土中から赤色の土師器小片が1点出土したのみであった。

副葬品と想定できる遺物は出土しなかったが、遺構近隣で青磁片や土師器片が散見されたことと、土坑の形状や埋土などから、この遺構の性格を土坑墓と判断した。

(2) 地下式坑 (第43図及び第44～51図)

地下式坑1号 (第44図)

E-7区のⅦ層で検出した。Ⅶ層検出となっているのは、当該区がⅡ～Ⅵ層まで削平されていたことによる。

1号の構造は地下室と考えられる長軸がおおむね東西方向の平面楕円形 (床面の形状による)。以下同じ)の土坑と、その南壁から延びる、竪坑と考えられる平面台形の土坑からなる。竪坑と地下室は、床面に50cm弱の段差があることから区別した (地下式坑分類ではI-3-C-b)。地下室は単室で床はほぼ平坦、壁の傾斜から断面はドーム状であったと想定される。坑の大部分が調査区

外に広がるため、竪坑以外の付属施設等の存在を確認できなかった。

規模は地下室が幅224cm、奥行204cm、(高さ不明)、竪坑が幅120cm、奥行120cm、深さ200cmである。

なお、周辺には土坑4、5号があるが、関連の有無については不明である。

埋土は第2地点で発見、認定した地下式坑ほど複雑ではないものの、細かく分層できる。

土師器片、成川式土器が出土しているが、流れ込みで遺構に伴うものではないと考える。

遺物は埋土中から土師器片などが3点出土した。埋土中の遺物であることから、厳密には1号との関連性は低いと考えられるが、2点同化した (126、127)。どちらも土師皿であるが、摩耗が著しく詳細を観察することができなかった。底部の切り離し技法も不詳である。

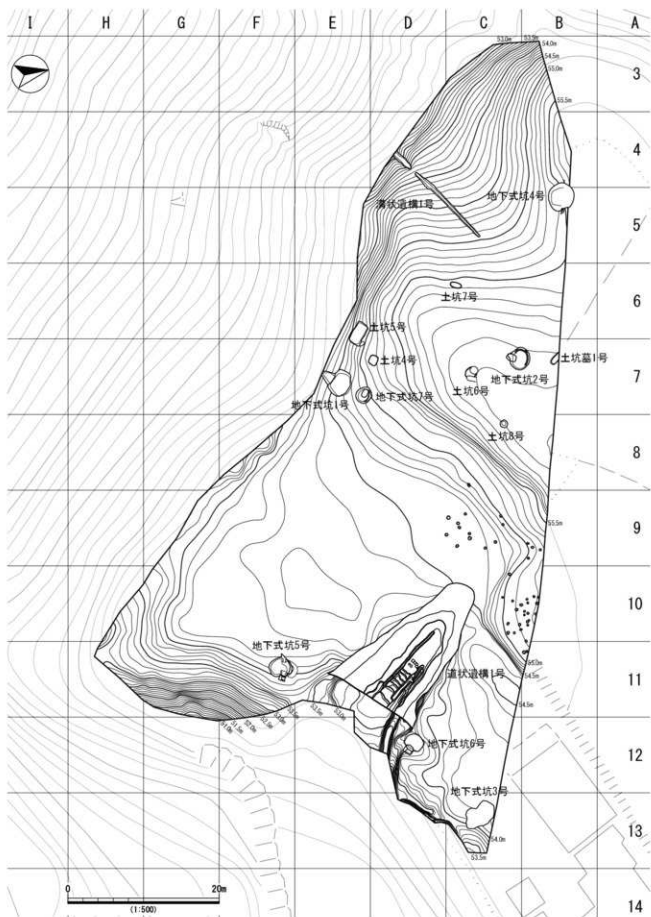
地下式坑2号 (第45図)

C-7区のⅢb層で検出した。当初検出した落ち込み (S X 15) の範囲について調査を実施していたが、一部で「床面」が現れずに埋土がさらに深く続いていく部分があったので、土坑 (S K 278) に認定した。しかし、検出面からの深度がさらに深く、かつ広がることが予想されたことから、調査の継続と安全確保のため、土坑を最小限の範囲で開削する位置にサブトレンチを設定して調査することとした。サブトレンチの掘り下げは、下層の遺構と遺物の状況を把握しながら重機で行った。その結果、当初検出した落ち込みは竪坑部分であり、その下に地下室がある地下式坑であることが判明した。

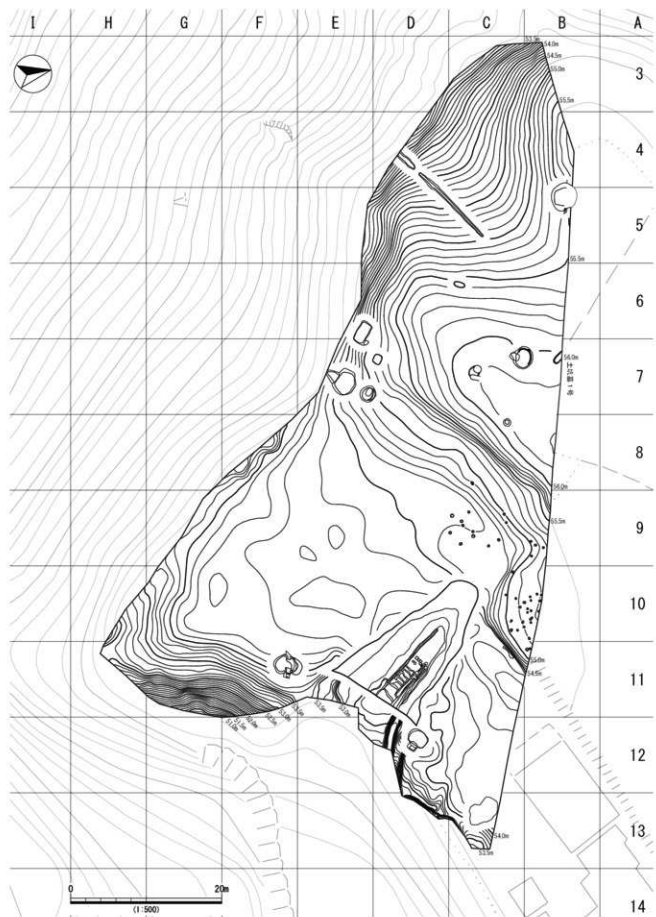
構造は、長軸がおおむね東西方向である平面楕円形の地下室と、地下室南壁に一部重複する平面隅丸長方形の竪坑からなる。竪坑と地下室の間に段差等は確認されなかったが、調査経過と埋土の堆積状況や両者の位置関係等から区別した。地下室は1号と同じく単室で床面はほぼ平坦だが、北西隅には壁帯溝のような施設が設けられていた。壁の傾斜から断面は略方形だったと想定される。また、竪坑は南壁に凹みが数か所発見された。

規模は地下室が幅232cm、奥行240cm、高さ132cm (推定)、竪坑は幅72cm、奥行80cm、深さ236cmである。埋土はほとんどが黒色土で自然堆積と考えられ、1号と同じく細かく分層できた。床面には地下室天井の剥落によると想定される埋土 (Ⅶ、Ⅸ層主体) が堆積していた。また、堆積状況から、地下室に黒色土が堆積していた途中で、地下室天井が崩落し、(その時の) 地表が大きく陥没したと考えられる。

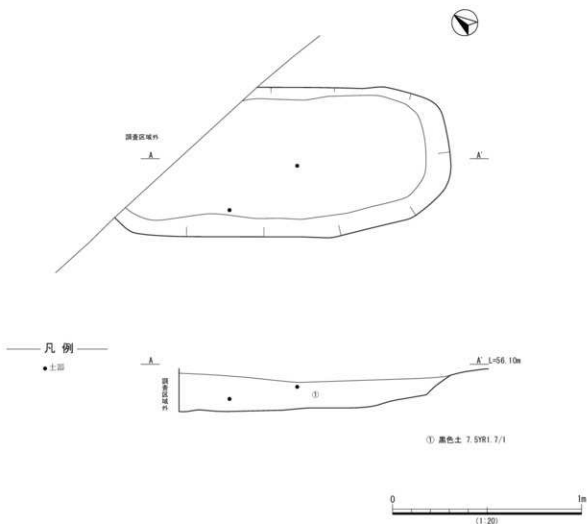
遺物は地下室や竪坑の床面近くの埋土中から総数29点出土している。1号と同様、これらの遺物は厳密には2号との関連性は低いものの、それらのうち接合資料の青磁皿について同化した (128)。口縁部を平坦に広げ、端部を強く短く立上げている。体部と平坦な口縁との端



第40図 中世の遺構配置図(全体)



第41图 土坑墓配置图



第42図 土坑墓1号

に稜を形成することで、釉色の濃淡を演出し圈線のような効果を持たせている。体部内面には放射状の波線文を施している。被熱の痕跡はみられない。接合した破片の中には端部の破損が進行しているものもあり、興味深い。

地下式坑3号(第46図)

C-13区のIVa層で検出した。3号は発見場所が第3地点と第2地点を隔てる谷際で、また隣接する民家にも近かったことから、調査については、完全実施よりも安全確保を優先して実施することとした。

構造は上記の理由から詳細は不明である。記録できた範囲では、地下室は平面不整形円形で、堅坑は存在を含めて不明である。

規模は記録から推定して、地下室は幅244cm、奥行は440cm。高さは不明。壁面は外側にえぐられている部分があるが、2号堅坑で発見したものより大きい。

埋土は細かく分層できたが、それぞれにアカホヤブロックが多量に含まれているのが特徴的である。なお、埋

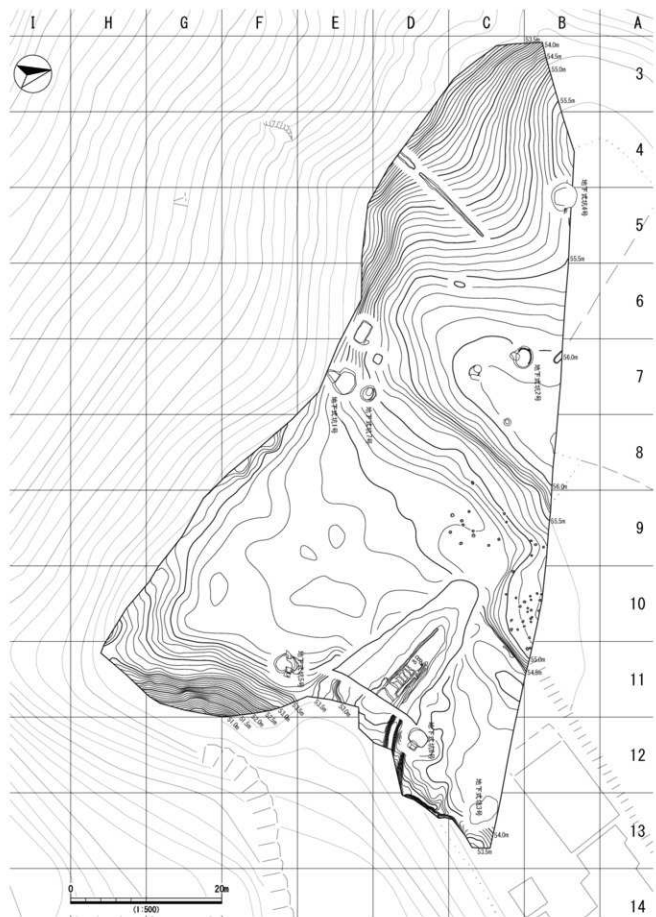
土の下方まで堆積していたシラス軽石混じり土について、旧表土と判断して除去してしまったため、その部分について記録できなかった(当該部分は、2号同様、地下室天井の陥没に伴う当時の表土の流れ込みと考えられる)。

遺物は埋土中から総数24点出土したが、図化できたのは1点である(129)。備前系の播鉢で、注ぎ口の低位付近の資料と考えられる。方向、長さともに不揃いのカキ目が間隔をあけて施されている。

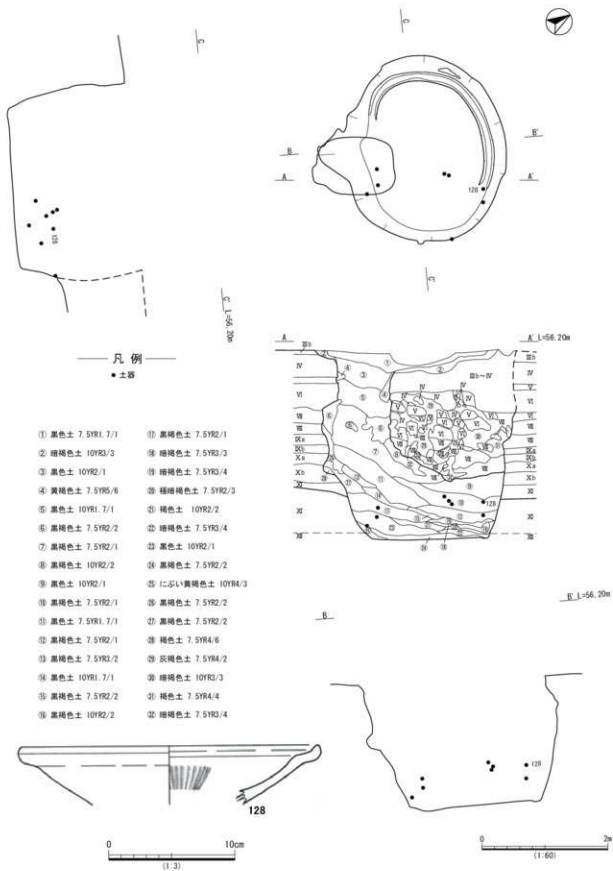
地下式坑4号(第47図)

B-4、5区のIIIb層で検出した。遺構上部の埋土がシラス軽石混じりだったため、当初は現代の攪乱と判断していたが、包含層を掘り下げていくにつれて軽石の混入が無くなり、黒色土が出てきたため、土坑と認定して調査を開始した(冒頭の埋土は、天井部分の陥没に伴う表土層の堆積と想定される)。

構造は遺構の約半分が調査区外に広がるため、詳細は不明である。記録できた範囲で推定すると、地下室は平



第43图 地下式坑配置图



第45図 地下式坑2号と出土遺物

面略方形で、堅坑と想定できるような土坑は確認できなかったことから、調査区外に構築されているものと考えられる。地下室の構造も不明である。壁や埋土の状況から、断面は略方形と推定される。

規模についても、記録できた範囲で深さ335cm、地下室が推定で幅240cm、奥行は不明、高さ120cmである。ちなみに、深さは本遺跡で発見した地下式坑の中では最も深い。

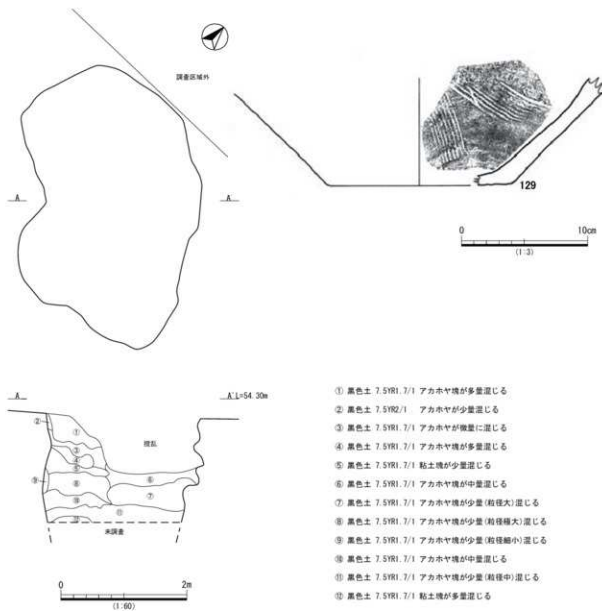
埋土は細かく分層できたが、おおむね2段階で埋没したようである。まず、床面直上付近にはⅦ～Ⅸ層を主体にした埋土が見られることから、2号などと同様に地下室の天井の剥落などから埋没が始まり、その後天井全体の崩落に伴い流れ込んだと想定される黒色土やアカホヤが確認される（さらにその上部に、冒頭で述べたシラス混じりの表層土が堆積）。

遺物は埋土中から15点出土したが、そのうち土師皿を図化できた(130)。底部の脇をやや強く削っており、そのため、体部中央が相対的に厚くなっている。口唇部は外へ直線的に伸び、鋭く仕上げている。ヘラ切り底である。

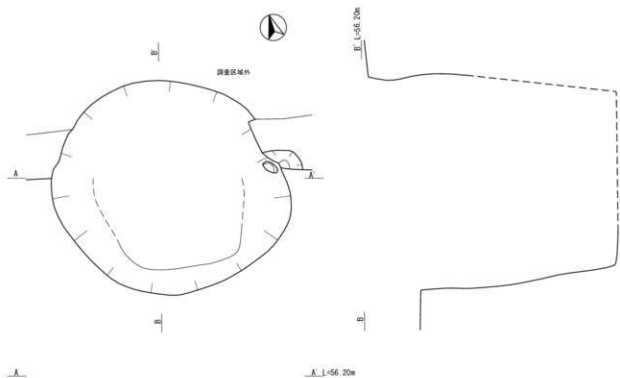
地下式坑5号(第48図)

F-11区のⅦ層で検出した。付近で先に検出していた縄文早期の堅穴住居跡1号の一部に、不自然な埋土の堆積状況と床面の陥没が確認されたことから、地下式坑の存在を想定し、堅穴住居跡の調査後に掘り下げ等を開始した。ほどなく、想定どおり埋土が地下に深く広く堆積していることが判明したので、安全確保のため重機による掘り下げに切り替えた。その際、5号については遺構を半載する位置にサブトレンチを設定することとした。

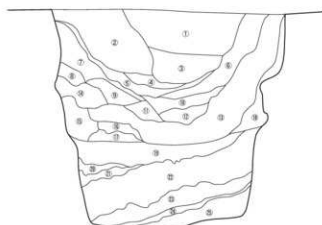
構造は長軸がおよそ南北方向となる鉄アレイのような



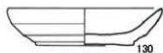
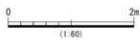
第46図 地下式坑3号と出土遺物



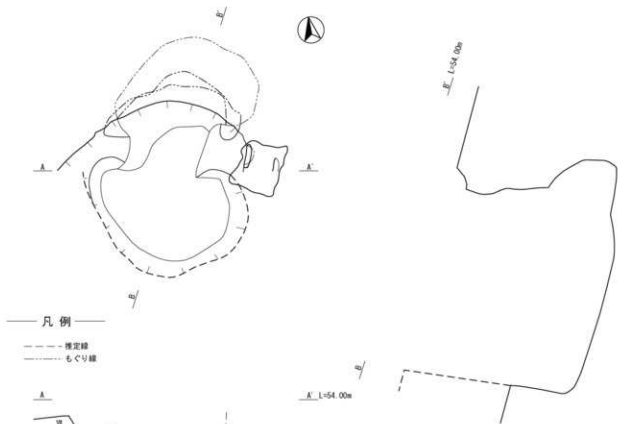
A A 1-56, 20m



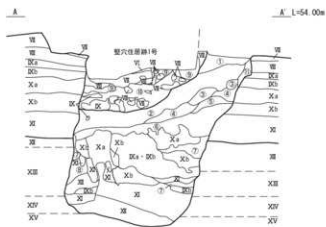
- | | |
|-----------------|-----------------|
| ① 黑褐色土 7.5YR3/2 | ⑭ 明褐色土 7.5YR5/6 |
| ② 黑褐色土 7.5YR3/2 | ⑮ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ③ 黑褐色土 7.5YR3/2 | ⑯ 暗褐色土 10YR4/3 |
| ④ 黑褐色土 10YR3/2 | ⑰ 明褐色土 7.5YR5/8 |
| ⑤ 暗褐色土 10YR3/3 | ⑱ 黑褐色土 7.5YR3/1 |
| ⑥ 黑褐色土 10YR2/3 | ⑲ 褐色土 7.5YR4/6 |
| ⑦ 褐色土 7.5YR4/4 | ⑳ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑧ 褐色土 10R4/4 | ㉑ 黑褐色土 10YR2/3 |
| ⑨ 褐色土 7.5YR4/6 | ㉒ 明褐色土 7.5YR5/8 |
| ⑩ 黑褐色土 10YR2/3 | ㉓ 暗褐色土 7.5YR3/4 |
| ⑪ 黑褐色土 7.5YR2/2 | ㉔ 褐色土 7.5YR4/6 |
| ⑫ 黑褐色土 7.5YR2/3 | ㉕ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑬ 黑褐色土 10YR2/3 | |



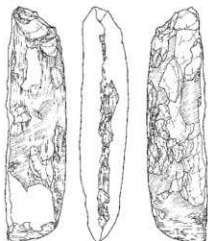
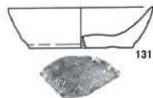
第47图 地下式坑4号出土遺物



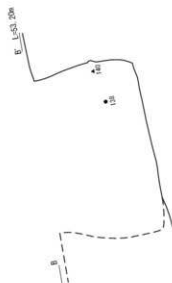
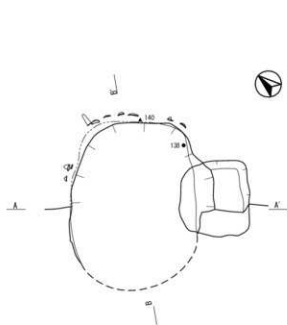
— 凡例 —
 - - - 推定線
 もぐり線



- | | |
|-------------------|------------------|
| ① 暗褐色土 10YR2/3 | ⑦ 黒色土 7.5YR1.7/1 |
| ② 黒褐色土 7.5YR2/2 | ⑧ 暗褐色土 10YR3/4 |
| ③ にぶい黄褐色土 10YR4.6 | ⑨ 褐色土 7.5YR4.6 |
| ④ 黒褐色土 10YR2/3 | ⑩ 黒褐色土 10YR2/3 |
| ⑤ 黒褐色土 10YR2/3 | ⑪ 暗褐色土 10YR2/3 |
| ⑥ 黒色土 7.5YR1.7/1 | |

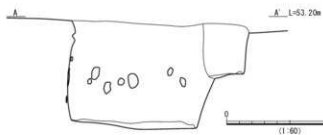
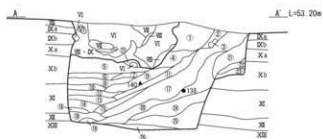


第48図 地下式坑5号と出土遺物



— 凡例 —

- 推定線
- - - - - 土盛り線
- 土器
- ▲ 石器



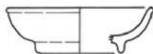
- | | |
|-------------------|-----------------|
| ① 黒色土 7.5YR2/1 | ⑩ 緑褐色土 7.5YR2/3 |
| ② 暗褐色土 10YR3/4 | ⑪ 緑褐色土 7.5YR2/3 |
| ③ にぶい黄褐色土 10YR5/4 | ⑫ 黒褐色土 7.5YR3/2 |
| ④ 暗褐色土 10YR3/4 | ⑬ 黒色土 10YR1.7/1 |
| ⑤ 暗褐色土 10YR3/4 | ⑭ 黄褐色土 10YR5/6 |
| ⑥ 黒褐色土 7.5YR2/2 | ⑮ 褐色土 10YR4/6 |
| ⑦ 黒褐色土 7.5YR2/2 | ⑯ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑧ 黒色土 7.5YR1.7/1 | ⑰ 明黄褐色土 10YR7/6 |
| ⑨ 黒褐色土 10YR2/2 | ⑱ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑩ 黒褐色土 10YR2/1 | ⑲ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑪ 黒褐色土 10YR2/2 | ⑳ 褐色土 7.5YR4/4 |
| ⑫ 黒色土 7.5YR2/1 | ㉑ 黄褐色土 10YR5/8 |
| ⑬ 褐色土 7.5YR4/4 | ㉒ 黒色土 7.5YR2/1 |
| ⑭ 暗褐色土 10YR3/4 | |



133



135



137



134



136



(1:3)

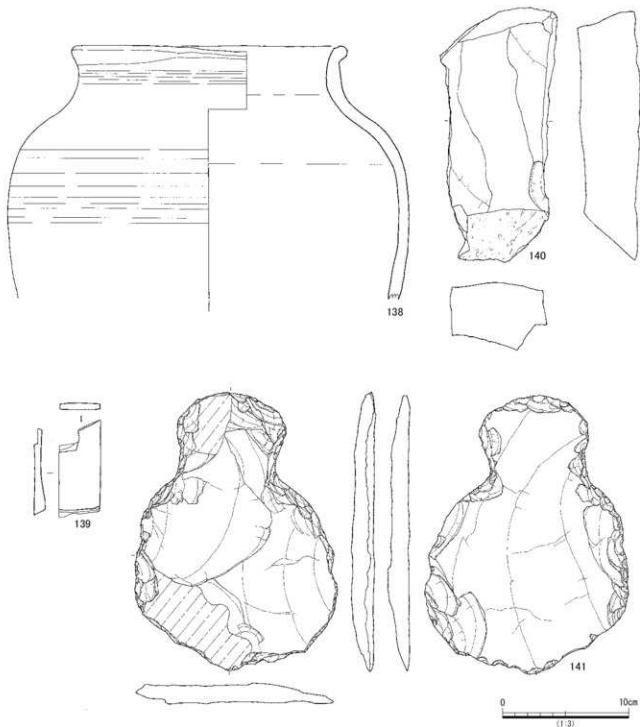
第49図 地下式坑6号と出土遺物

平面形をした地下室と、地下室中央東側にある平面方形の堅坑からなる。堅坑と地下室は、堅坑が地下室の壁面とつながっていることが断面から看取できるので、区別は容易である。地下室は平面形から複室だった可能性がある。床面は全体が東に緩く傾斜しているほか、北側のスペースは壁際が一段高くなっている。断面は壁の傾斜から想定すると、北側が略円錐状で南側は略方形もしくはドーム状となり、異なる形状だった可能性がある

る。堅坑は垂直ではなく斜めに掘られているのが他の地下式坑と異なる特徴である。また、壁面には掘削時の工具痕を数か所で確認できた。

規模は地下室が幅237cm、奥行219cm、高さ120cm(推定)で、堅坑が幅78cm、奥行72cm、深さ276cmである。

埋土は、Ⅸ～ⅩⅡ層相当の土やⅥ～Ⅷ層相当の土が厚く塊状に堆積している部分と、その隙間に黒色土が薄く層状に堆積している部分が看取できた。おそらく、地下



第50図 地下式坑6号の出土遺物

室天井などの崩落と、堅坑などからの自然堆積の繰り返して埋没していったものと想定される。

遺物は埋土中から成川式土器片、土師皿片、古銭 など総数21点出土したが、2点のみ図化した(131, 132)。131は土師皿である。体部がわずかにふくらむが、ほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は鋭角的に仕上げている。糸切り底である。132はホルンフェルス製の磨製石斧片である。地下式坑との関連は不明だが、縦位に破断しているのが特徴的である。古銭は錯の進行が著しく、残念ながら文字の判読や図化等はできなかった。

地下式坑6号(第49, 50図)

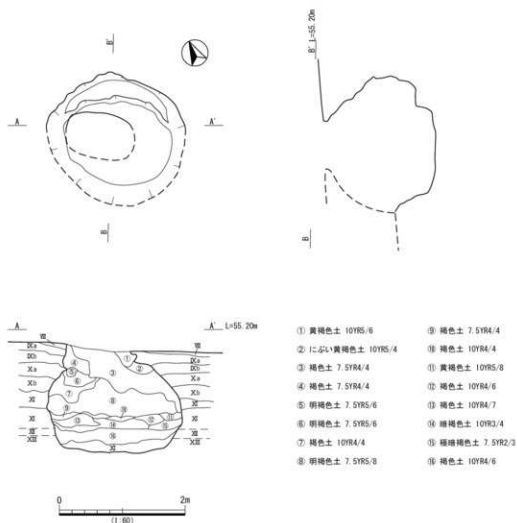
D-12区のV層(堅坑部分)及びVII層(地下室部分)で検出した。最初に堅坑部分を検出し、土坑(S K 285)と認めて調査に着手したが、シラス混じりの埋土だったことから、取り敢えず欠番扱いとしていた。ところが、付近に設定した旧石器確認トレンチの調査中に、

その土坑の周囲のV層が円形にひび割れているのを見つけたため、土坑の扱いについて再度検討し、改めて地下式坑(S K 289)と認定した。

構造は長軸がおよそ北東-南西方向となる平面形が円形に近い楕円形の地下室と、地下室南西壁面に一部重複するように掘られた平面略方形の堅坑からなる。堅坑は垂直ではなく、西側に向かってわずかに傾斜して掘られている。また、堅坑と地下室の間には明確な段差が見られるため区別は容易である。地下室は単室で、床面は平坦であり整形した可能性がある。地下室の断面形状は不明だが、埋土の状況から想定すると略方形か。

規模は地下室が幅280cm、奥行213cm、高さ推定170cmで、堅坑は幅推定50cm、奥行55cm、深170cmである。

埋土は堅坑部分から、はじめはシラスやシラス二次堆積土が流れ込んで徐々に堆積し、後に黒色土が流れ込ん



第51図 地下式坑7号

で埋没していった過程が想定される。地下室天井部の崩落を想定させるⅦ層のブロック状堆積も観察できるが、その程度は、他の地下式坑よりも激しくないようにみえる。全体的に、埋土の上位まで安定した堆積状況が観察されることから、堅坑部分がある程度の期間開口していたことがわかる。

遺物は堅坑の階段部分に近いところから出土した大形の瓦質土器甕が特筆される。この他、成川式土器、土師皿片、青磁片、瓦質土器片、備前焼、古銭、砥石などが出土したが、これらは流れ込んだ埋土に伴うもので、他の地下式坑と同様、厳密な意味で地下式坑に伴う可能性は低い。

本報告では、これらのうち9点を図化した(133～141)。

133, 134は土師器皿である。133は、直線的に底部から口縁部にいたる成形で、口縁部も細く仕上げている。体部外面の中央付近に指でこく浅い凹みを巡らせている。糸切り底である。134は、体部から底部にかけての資料である。外面の凹凸は剥落によるもので、ろくろ痕ではない。口唇部はわずかに摩耗がみられ、底部の切り離し技法は判別できなかった。

135～137は青磁の碗である。135は口縁部で、比較的大型の資料である。口唇部は小さく玉縁状に仕上げている。大振りの貫入が入る。釉の発色がやや鈍く部分的にススの付着も認められることから被熱の可能性がある。136は口縁部から胴部にかけての資料で、釉は比較的厚い。口唇部はごく小さく玉縁状に仕上げられており、体部の成形はわずかに多角形状に立ち上がる。全面に細かい貫入が入っている。胎土が赤変し、釉の発色もわずかに鈍いことから被熱の可能性がある。137は、口縁部から底部にかけての資料である。口唇部は小さい玉縁状の整形でわずかに貫入を認める。見込と体部の境にわずかな凸部を削り出し、釉の厚みの変化による色調の濃淡を演出し、圏線状の効果を持たせている。釉は全体的に厚く施されている。壺付も鋭角的な整形だが、釉が厚いため丸味がある。

138は冒頭で述べた瓦質土器の大形甕である。短い口縁部は端部で粗い玉縁状を呈する。肩部がやや強く張り出し、そのまま径をすばめながら胴部に至る器形である。15世紀頃のものと考えられるが、あまり類例のない器形をしている特徴的な資料である。

139は砥石である。シルト岩製で上端は欠損している。傾度の違いがみられるが、正面並びに背面ともに使用されている。形状等から中世のものと考えられるため、掲載することとした。

140は凝灰岩製の礫である。被熱し破断しているが、大形で、例えば縄文時代の集石に用いられる礫などとは明らかに異なるため、掲載した。

141はホルンフェルス製の打製石斧で、大型の完形品である。地下式坑に伴うものとは考えにくい。遺物単体の情報提供という点から掲載することとした。

地下式坑7号 (第51図)

D、E-6区のⅦ層で検出した。隣接する地下式坑1号が予想以上に深くなったことから、作業の安全確保のためにサブトレンチを設定して掘削したところ、トレンチの断面に袋状の遺構を新たに発見した。そのため、その新規遺構の上部を精査した結果、堅坑部分を検出した。

構造は長軸が北西-南東方向となる円形に近い楕円形の地下室の上部に、円形と想定される堅坑が付属するような形状をしている。状況からは、堅坑部分と地下室部分を明確に分けることができない。地下室は単室であるが、床面は平坦になっていない。また、ほかの地下式坑と比べて小型である。

規模は地下室が幅推定160cm、奥行160cm、高さ推定70cmで、堅坑が幅80cm、奥行推定80cm、深さ163cmである。構造、規模ともに、ほかの地下式坑と比較して小型である。

埋土はまず、床面には天井部分だったと考えられるⅨ層～Ⅺ層由来の埋土が堆積していた。崩落したものと想定される。その後黒色土が流れ込み、再度天井部分が崩落したものと考えられる。なお、規模が小さいことと埋土の状況を考えてみると、この7号については、掘削途中で中断・埋め戻したことも想定される。

遺物は見られなかった。

(3) 土坑 (第52図及び第53～55図)

土坑4号 (第53図)

D-7区のⅦ層で検出した。遺構周辺はⅡ～Ⅵ層が残存していなかった。

プランは長軸130cm、短軸120cmの東西に少し長い隅丸方形である。検出面からの深さは17cmである。底面は東側がやや深くなっている。

埋土は暗褐色土の単層で、池田降下軽石・アカホヤ火山灰・サツマ火山灰が微量混じっている。

遺物は埋土中から出土した土師器片2点のうち1点(142)を図化できた。小皿で口縁部を丸く仕上げている。底部の切り離し技法は確認できなかった。

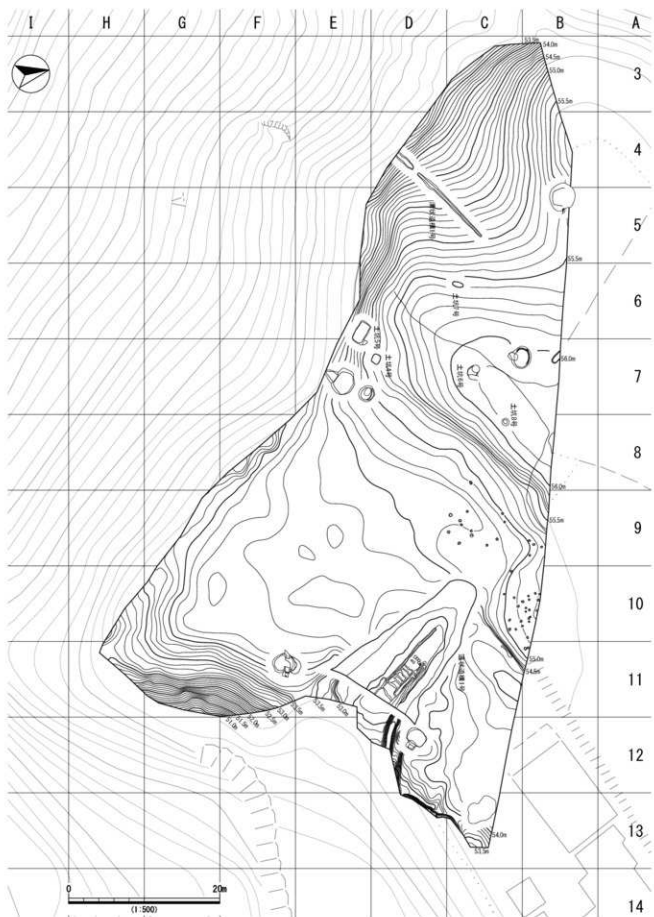
土坑5号 (第54図)

E-6・7区のⅦ層で検出した。

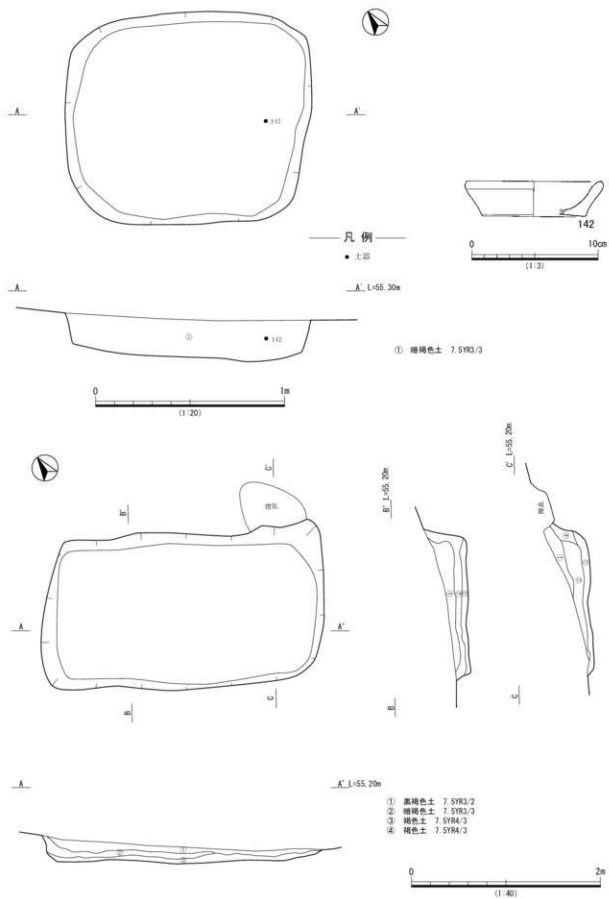
プランは長軸300cm、短軸168cmの東西に長い隅丸長方形である。検出面からの深さは北側で40cm、南側で15cmである。斜面に掘り込んでいて、北側が深くなっている。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

埋土は黒褐色土から褐色土で、サツマ火山灰起源と考えられる明褐色土の比率が下層ほど増加している。

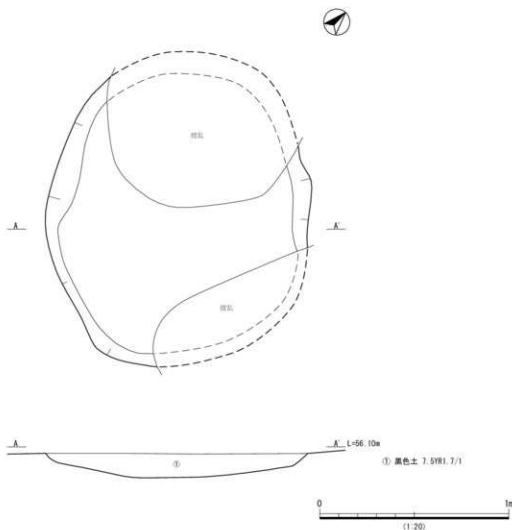
遺物は土師器片が出土したが、残念ながら図化できるものはなかった。



第52図 その他の遺構配置図



第53図 土坑4号(出土遺物)・5号



第54図 土坑6号

土坑6号 (第54図)

D-8区のIV a層で検出した。遺構の東西並びに上面は、現代の攪乱により削平されている。

プランは長軸方向推定160cm、短軸140cmの楕円形と想定される。検出面からの深さは12cmである。底面は皿状で、壁面は床面から緩やかに立ち上がる。

埋土は黒色土にアカホヤが微量混じる。

遺物は検出されなかった。

土坑7号 (第55図)

C-6区のII b層で検出した。

プランは長軸160cm、短軸75cmの楕円形で、検出面からの深さは12cmで、遺構上面は削平されていると想定される。底面は平坦である。

埋土は黒色土で微量の軽石が混じる。

遺物は炭化物が多数出土した。

土坑8号 (第55図)

C-8区のIV a層で検出した。

プランは径100cmの円形で、検出面からの深さは55cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。埋土は黒色土でアカホヤブロックを少量含む。

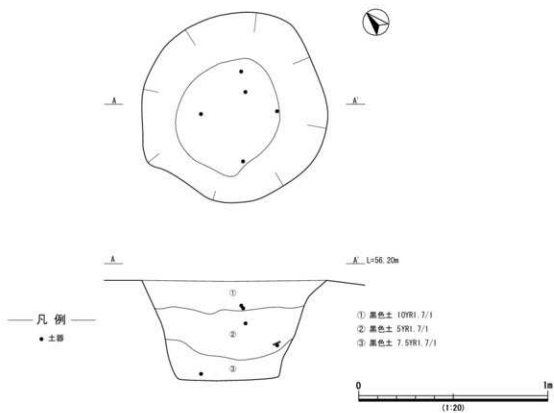
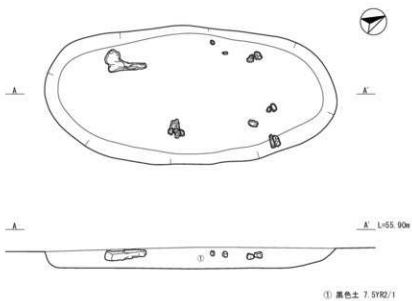
遺物は土師器片が5点出土したが、いずれも小片で残念ながら図化できるものはなかった。

(4) 道状遺構、溝状遺構 (第52図及び第56~63図)

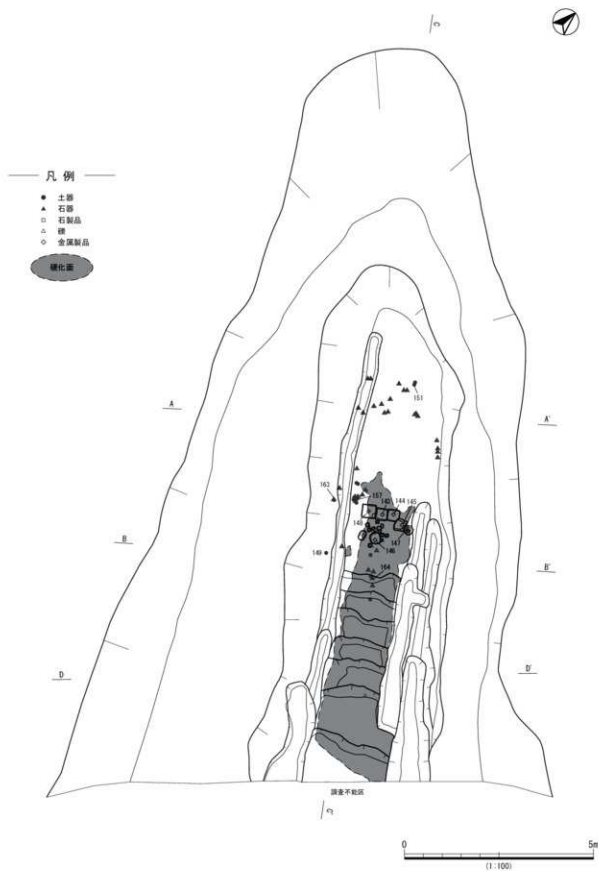
道状遺構 1号 (第56~62図)

表土直下の旧耕作土中で検出した。

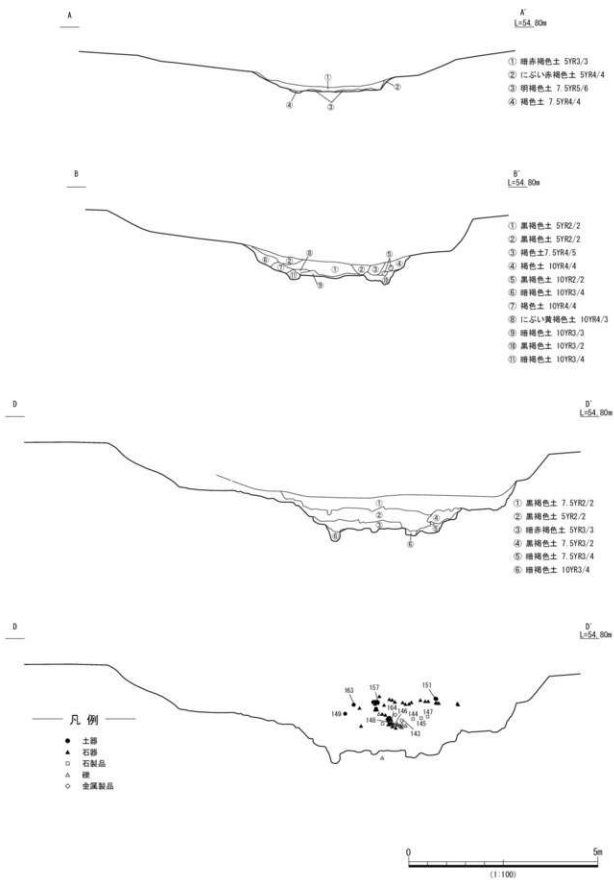
規模は検出範囲で長さ約20m、幅は上端で最大約13.5m、下端で平均2.5mあり、検出面からの深さは、最深部で約2mである。最深部はシラス層まで達している。



第55园 土坑7号·8号



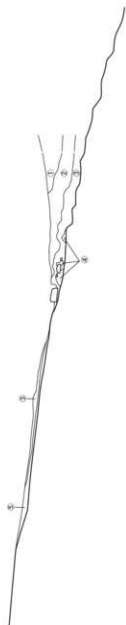
第56図 道状遺構 1号 (平面図)



第57図 道状遺構1号(横断面図)

—C. 1:54.80m

—C.



- ① 黑褐色土 7.5YR5/2
- ② 黑褐色土 5YR2/2
- ③ 暗紫褐色土 5YR3/2
- ④ 暗褐色土 7.5YR3/2
- ⑤ 暗褐色土 7.5YR5/4

—C. 1:54.80m

—C.

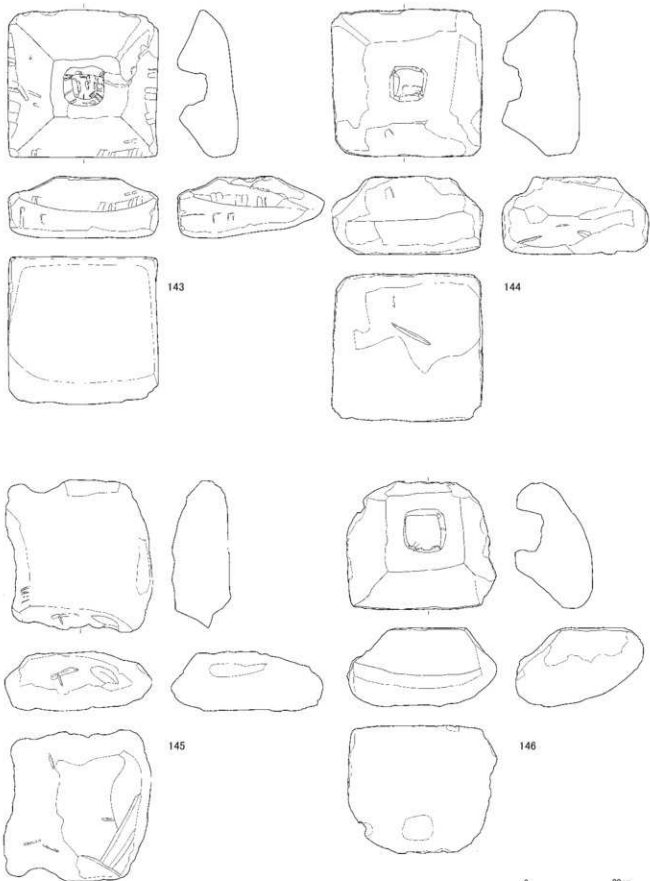


— 凡例 —

- 土樣
- ▲ 石器
- 石製品
- △ 磚
- 金屬製品



第58圖 遺址遺構1号(縱断面圖)



第59図 道状遺構1号の出土遺物(1)

遺構は第3地点と第2地点を隔てる谷から伸びてきている。横断面はおおむね逆台形をしており、下端は浅い側では幅2.5mの斜面だが、南東方向に深くなるにつれて階段状の造作がみられるようになり、さらに下端の両側に2条の掘り込みまで確認される。また、下端の一部が赤褐色に変色し硬化している。

埋土は大部分がシラス由来の軽石が混ざる旧耕作土からなるが、下端の階段状構造物が始まるあたりからは、VI層由来と考えられる固いブロックが混入しているなど、旧耕作土とは異なる埋土の堆積を確認できる。また、それらの各埋土の横断面には、下端最下面に観察できた2条の溝と同じような落ち込みの存在が認められる。

遺物は五輪塔の部材が横一列に並べられた状態で検出されたのを中心に、その周囲に青磁片、備前焼片等が集中して出土した。

五輪塔は傾斜方向に対して直行して（階段状の構造物に沿うように）置かれており、また石の配列や個数、向きなどは塔としての配列と無関係だった。こうした状況から、五輪塔は階段の敷石として転用するために周辺か

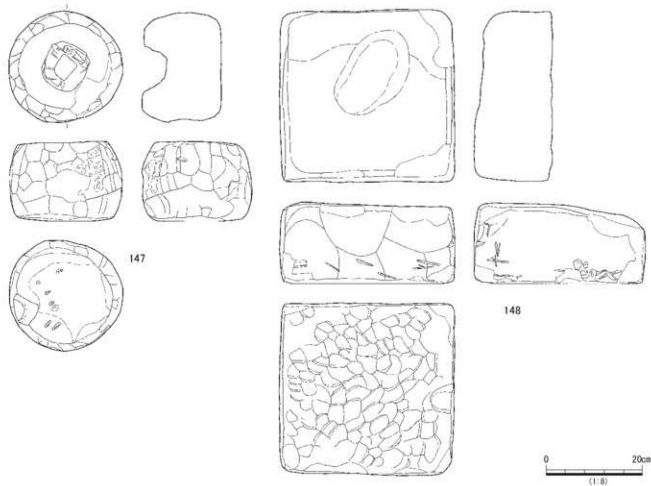
ら無作為に収集されたものではないかと考える。

周辺には、地下式坑3号、5号及び6号が発見されている。

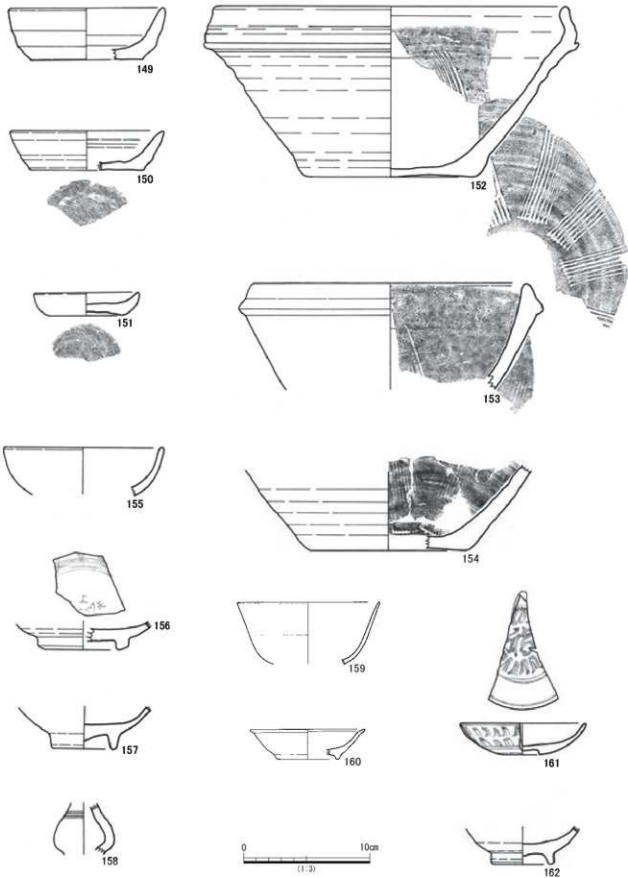
遺物は埋土中を含め153点出土した。そのうち、五輪塔をはじめ旧耕作土ではない埋土から出土したもののうち、図化できた23点について紹介する。

143～148は五輪塔で、143～146はいずれも火輪である。遺構では143、144、146が並んで発見され、145はやや下ったところで発見された。図では、本来の目的にあわせた上下関係で掲載したが、すべて上下を逆さまにして置かれており、実際、個々の火輪も「下面」側の風化が著しい。ただし、風化度合いの差の原因については、素材の強度の問題の可能性もあり、不明である。147は水輪である。遺構では146の東隣で上下逆の状態で見られた。火輪と比べて風化が進んでいない。148は地輪である。遺構では143の西隣で発見された。図の上面側の風化が著しい。水輪、地輪に梵字などは確認できなかった。

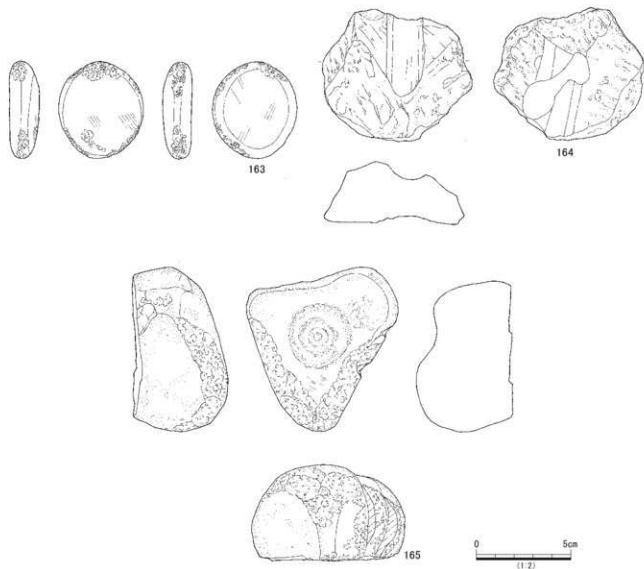
149～151は土師器である。149、151は風化が進んでおり詳細に観察できない。151は、本来もう少し器高があ



第60図 道状遺構1号の出土遺物(2)



第61図 道状遺構1号の出土遺物(3)



第62図 道状遺構1号の出土遺物(4)

った可能性もある。150は、口縁部がわずかにゆがんでいる。

152～154はいずれも備前焼の擂鉢と考えられ、内面は平滑になりカキ目が薄くなっているものもあるなど、よく使い込まれている。152は体部外面には焼成前についた指跡があるほか、底部には白色粘土が全面に付着している。153の口縁部は、沈線が痕跡的に観察できる。胎土の色調は、全体的に赤色系を帯びる。

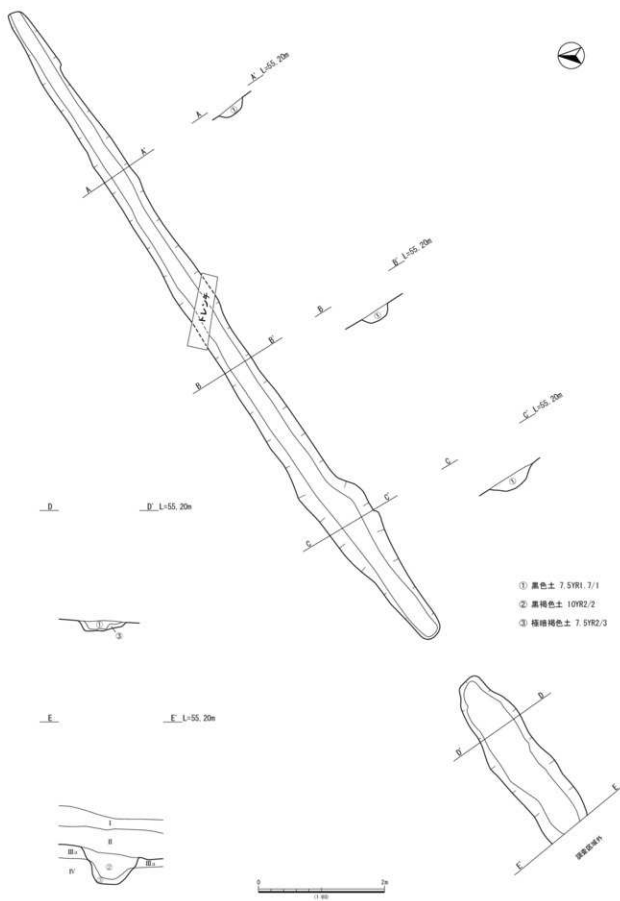
155～157は青磁碗と考えられる。155は軸が厚く、口縁部外端のみ薄茶色に変色している。156は軸は薄い、畳付まで施軸されている。見込みの文様は、双魚文のようにも見える。157は軸の発色がやや鈍く胎土も肌色系に変色している部分があることなどから、被熱している可能性がある。

158は青磁の小瓶と考えられる。床面近くで出土した。やや下ぶくれの器形で肩部と頸部の境に沈線を3条線彫している。施軸は外面のみで薄く、かかっていない部分もある。軸の色調は瀬戸美濃系とも見えるが、胎土は非常に細かい。器壁は器形に比して厚く、内面には成形によるしわや割れを確認できる。仏具とも想定される。

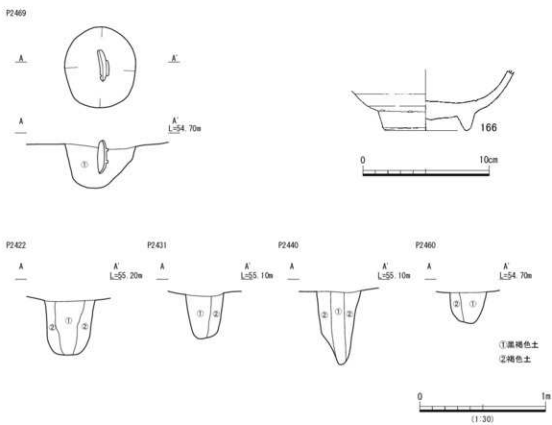
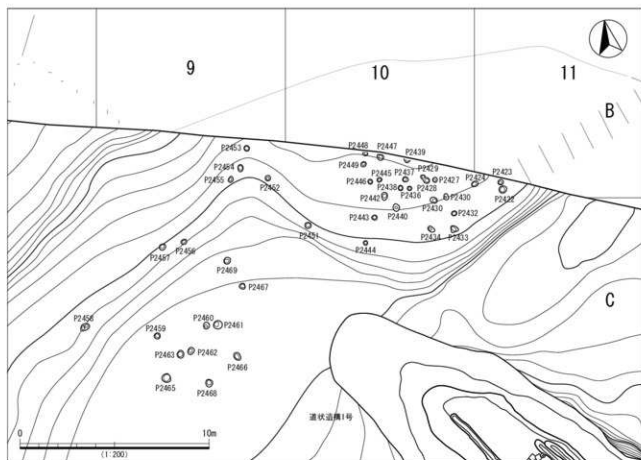
159、160は白磁である。159は碗で、体部外面に線彫による横位沈線が1条巡っている。貫入は細かい。160は端反の皿である。軸葉は全体的に薄いが均等で、高台裏まで施軸されている。砂目はない。

161は碁筒底の青花皿である。見込み中央は「福」を意匠化したものとも見える。畳付は、軸を掻き取って形成している。

162は黒薩摩の小鉢と考えられる。見込みに蛇の



第63図 溝状遺構1号



第64図 柱穴分布図及び個別断面図・出土遺物

目軸割ぎがあり、砂目もある。

163～165は石器である。遺構との関連性は低いと考えられるが、遺物単体として掲載している。163は砂岩製の敲石である。164は軽石加工品の破片で、正面と背面に断面半円形の溝が観察できる。他の面も面取りしている可能性がある。165は砂岩製の敲石・凹石である。

溝状遺構 1号 (第63図)

C、D-5区のIIb層で検出した。

規模は検出範囲で長さ12m、幅0.55mで、検出面からの深さは20cmである。傾斜面を南西-北東方向に走り、調査区外に下っている。横断面は略レンズ状を呈し、底面は若干のカーブを描く。硬化面を確認できなかったため溝状遺構と呼称しているが、用途としては足跡を想定する。

埋土はIIa層とみられる黒色土が堆積していた。

遺物は埋土中から成川式土器が発見されたが、小片のため図化できなかった。

(5) 柱穴 (第64図)

B、C-8～11区にかけて、IIb層上面で柱穴を複数検出した。しかし、建物に復元できるものは確認できず、状況を個別に記録した。本報告では、遺物(166)を伴う柱穴と、埋土に柱痕跡らしき色調等の変化を確認できたものについて掲載している。166は、陶器碗と考えられる。見込みには1条の圏線が巡る。軸は粘りが強く淡い青白色である。砂目などは観察されない。

2 遺物

(1) 土師器 (第66図)

167～180は、便宜上皿とした。

167は口縁部から底部にかけての資料で、糸切底である。底部に比して体部の器壁が厚い。器面の摩耗が著しい。168も口縁部から底部にかけての資料で糸切底である。体部はやや厚みがあり、直線的な整形だが口縁部はやや丸みを持たせている。焼成は特に良好である。169は糸切底で器面全体の摩耗が著しい。体部はやや丸みのある立ち上がりで、口縁部は鋭角に仕上げている。底部は薄い。170は体部が直線的に開き、やや長い。底部は摩耗が著しく観察できなかった。口唇は鋭く仕上げられており、第3地点では比較的大形である。171は体部が直線的に立ち上がり、口唇部は鋭角的である。焼成はきわめて良好。172は体部がわずかに丸みを帯びる。体部に比して底部が薄い。173は底部からの立ち上がり強く外面のみやや丸みを帯びる。口唇部は丸く仕上げているが、外端には稜が形成されている。174は比較的大形で全体的に厚みがあるが、摩耗が著しい。糸切底である。175は糸切底で、体部は直線的に外へ開く。整形後の運搬時のものと考えられる圧痕が、底部外側に1か所あり、そのため上面観が正円を呈していない。

176は体部が直線的に立ち上がり短い。177、178はどちらも糸切底である。177は直線的に立ち上がり口唇部がわずかに外反する。178は底部が薄く体部下位が厚い。口唇部は鋭く仕上げている。外面は指頭状の工具で強くなでられて軽くへこんでいる。179は糸切底で、口縁部がわずかに外反する。厚みのある底部から口縁部へ急に薄くなる。体部の内外面には部分的にススが付着する。180は糸切底である。

181～195は便宜上小皿とした。ほとんどが糸切底である。

181は成形時に空気が混入したのか空隙がある。182はやや焼きひずみが目立つ。底部には混和剤による貫通孔が1か所ある。183は表面の摩耗が著しい。184は底部が厚く体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。185は底部内面中央にわずかにススが付着する。186は糸切底と想定されるが、表面の劣化が著しく不明瞭。187は器形の割に底部が厚く、口縁にかけて細くなる。焼成前の穿孔が1か所確認される。188は底部円盤が明瞭な器形である。189は底面の摩耗が著しい。体部は比較的厚く、ほぼ垂直に立ち上がる。190は口縁部の厚みが不均等なまま焼成されている。191～194は底部内面の中央付近に指頭圧痕がある。体部が厚く、ほぼ直線的に外へ開く。192は口唇部内面に粘土を追加した可能性がある。193は焼成時の変形が著しい。胎土に特徴があり、白色と淡紅色の粘土がマーブル状のままである。194は全体的に薄くシャープな成形だが底部には礫が混じっている。この資料のみヘラ切底と考えられる。195は器厚がほぼ均等で丸みを帯びた器形である。

(2) 国産陶器 (第67図)

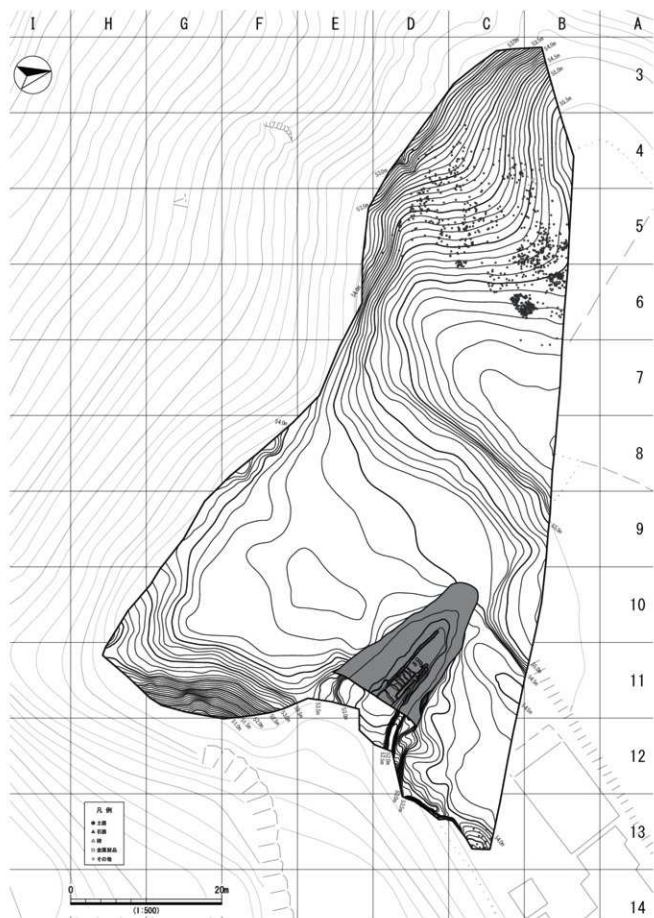
196～199は挿鉢である。いずれも備前焼と考えられる。

196は、焼きが甘かったためか、口縁部及び破片の外面上端の色調が肌色を呈している。そのため使用頻度が少なかったのか、内面のカキ目の残りが比較的よい。また、体部の外面中位に斜め上方向へのハケ目が観察される。197は注口部である。内面には成形時の工具痕のような痕跡を観察できる。口唇部などに灰軸が認められる。198はカキ目の入れ方が粗いが、全体的には丁寧な造形である。口縁部の折り返しは形骸化しつつある。199は内面のカキ目がつぶれて軽く光沢が出ている。使用頻度を想像させる。表面のみ色調が小豆色を呈する。

200～202は壺である。

200は常滑焼と考えられる。口縁部外面には暗文様の縦位調整が観察される。下端は接合面で割れている可能性がある。

201、202は備前焼と考えられる。201は口縁部で、無釉だが口唇部周辺には灰軸が付着している。また、口唇部には一条の浅い沈線が彫られているが、その上からゴザのような繊維状のものが当てられており、沈線がカキ



第65图 II·III层遗物出土遗物分布图

消されている。断面に折り返し成形の痕跡を観察できる。202は蓋または瓶の底部で、器壁の薄さが特徴的である。内面には叩き目痕があるほか、底部外面には、砂目のような跡を確認できる。

(3) 輸入陶磁器 (第68, 69図)

203～215は青磁碗である。

203の筋連弁は、半円形で表現される。貫入がわずかに入っている。204は体部に細連弁文のような線刻が施されている。口縁下には雲文または渦文の省略がみられる。貫入がわずかに入っている。205は櫛目状の施文具によると想定される線刻がある。内面に文様はみられない。貫入がわずかに入る。206は緑釉がかかっており、細かい貫入が入っている。207は口唇部より下位の釉色が変化しており、貫入は口唇部にしかみられない。被熱した可能性もあるが、胎土には被熱を想定させるような変異を確認できない。208は端反碗で、口唇部外端が口禿になっている。貫入はやや少ない。青白磁の可能性もある。210は細連弁文が施されている。211は見込に画花文がみられ、高台裏には軸割の痕跡がある。212は見込に草花文が施されている。213は外面に細連弁文がみられる。見込の軸はやや劣化しており、文様は彫りではなく押押しと考えられる。214は外面に線刻による連弁文が確認できる。見込には双魚文のような文様がみられるが、部分的に剥落しているため詳細を確認できない。全体的に軸のかりが薄く、高台裏から豊付にかけて軸割がみられる。215は見込部に渦文が施され、高台裏に軸割がみられる。貫入はわずかである。

216, 217は青磁の棧花皿である。

216は内面に簡素な草花文が施されている。見込の軸は全体的に擦れている。卍文とその周りの円文は陽刻によるもので、素地への彫り込みではない。高台裏に軸割がみられる。

218は小鉢で、口唇部下に浅い凹線がある。貫入がわずかに入る。

219～223は青磁の皿である。

219は豊付まで施軸しており、比較的厚めである。貫入はわずかに入る。220は見込に明瞭な棧をつくりだして、平坦面を強調している。貫入は全面に入っている。221は比較的軸が厚い。底部側の胎土が赤く変色している。222は体部内面に連弁文がみられる。見込の成形は体部から一段へこませてあり、中央には陽刻か半円形の文様があったと想定される。見込の軸は胎土とともに変色しており、被熱痕跡と考えられる。223は高台裏の軸掻き取り部分が黒色化しているほか、その周辺の軸もやや劣化している。高台に入っているヒビもスズのようなもので黒色化していることから、灯明皿等に使用された可能性がある。そのほか、断面にも胎土が赤く変色している部分を確認できる。

224～235は白磁及び染付の皿である。

224は高台を削り出しているのが特徴的である。225は外面に軸垂れがある。貫入は比較的細かい。226は口縁部外側の軸端が劣化している。227は全体的にやや変形しているが、切り込みを5か所入れた切高台である。見込には目跡も5か所残る。見込と高台裏は無軸である。

228は染付の端反皿である。外面にろうろ成形痕を残すほか、外面下端には無軸部がある。口縁部下と見込付近に軸下彩の圏線がそれぞれ1条走る。

229は胎土ではなく施軸によって口縁部の玉縁を形成しているが、ほぼ均等に仕上がっている。230は高台と豊付の軸を掻き取っている。231はやや端反気味の整形である。豊付は、外側のみ軸を掻き取る。232～234は端反で、233は黒色の小点が器面全体に散在している。234は豊付が無軸となっている。

235は小形の坏で豊付に砂目がみられる。

236～242は染付である。

236は皿で口縁部を比較的平坦に仕上げられており、豊付に砂目がみられる。

237～240は萐萐底をまとめた。237は底部に軸割げがみられる。238は全体的に施軸されているが、高台裏は砂目及び砂目材の結晶化が顕著である。240は見込と体部外面に、漢字を意匠化したような文様が描かれている。わずかに貫入が入っている。

241, 242は近世の可能性もある資料である。

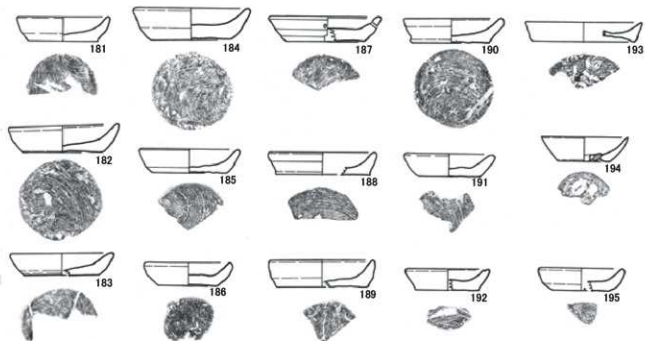
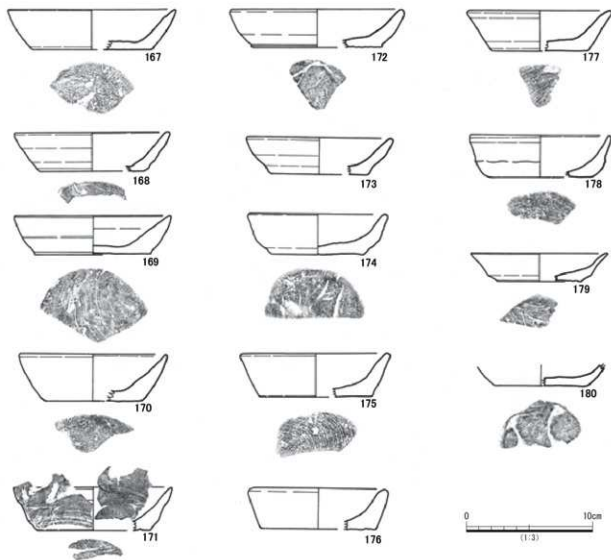
241は白磁碗である。高台は削り出しと思われるが、やや雑なつくりである。内面には見込からの立ち上がり付近に線刻が一条みられる。

242は白磁皿で割高台である。体部外面の中段に重ね焼きの痕跡がある。

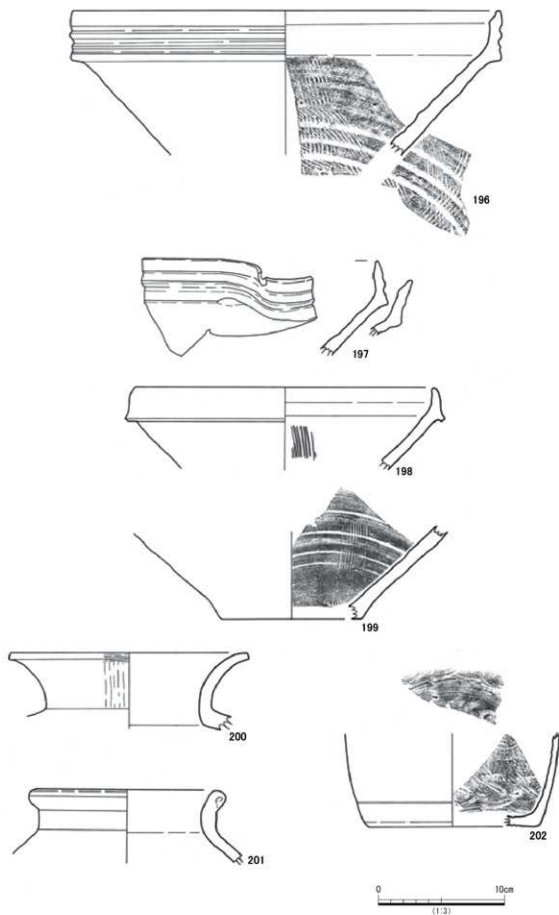
(4) その他 (第70図)

243～247はその他の資料である。中世に帰属しない可能性が高いものも含まれているが、発掘調査での出土層位を尊重し本項で紹介している。

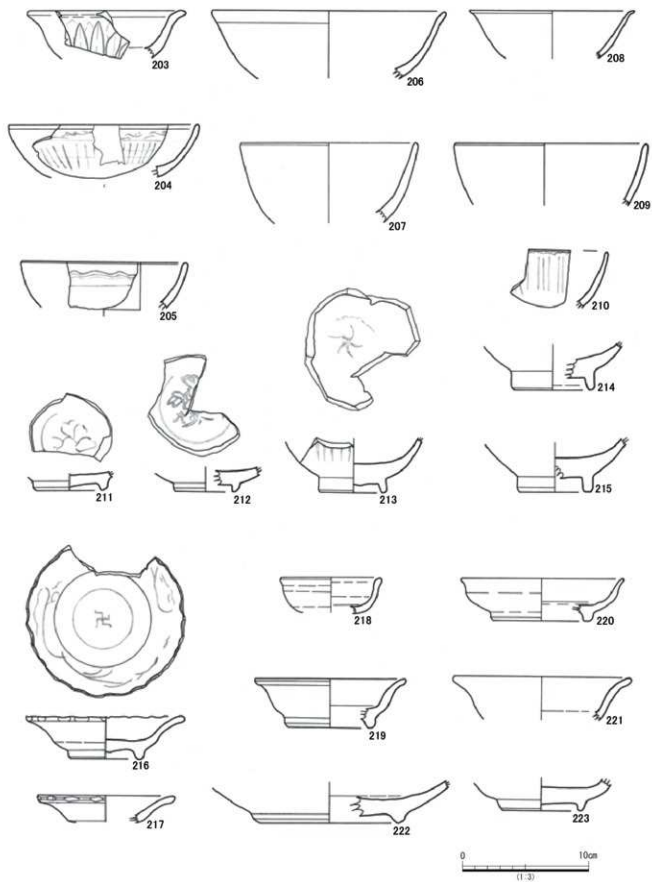
243は砥石である。背面は素材剥片の摺面を利用している。244は磨製石斧で、断面は乳棒状を呈している。刃部には敲打痕のような潰れも観察される。245は打製石斧の刃部付近と想定している。246は磨石で、表裏に磨面が確認できる。247は軽石の加工品である。素材の軽石は不純物が多く観察されず気泡も少ない。ほぼ全面にわたって磨って整形されているほか、上部も平坦に面取り加工していると考えられる。



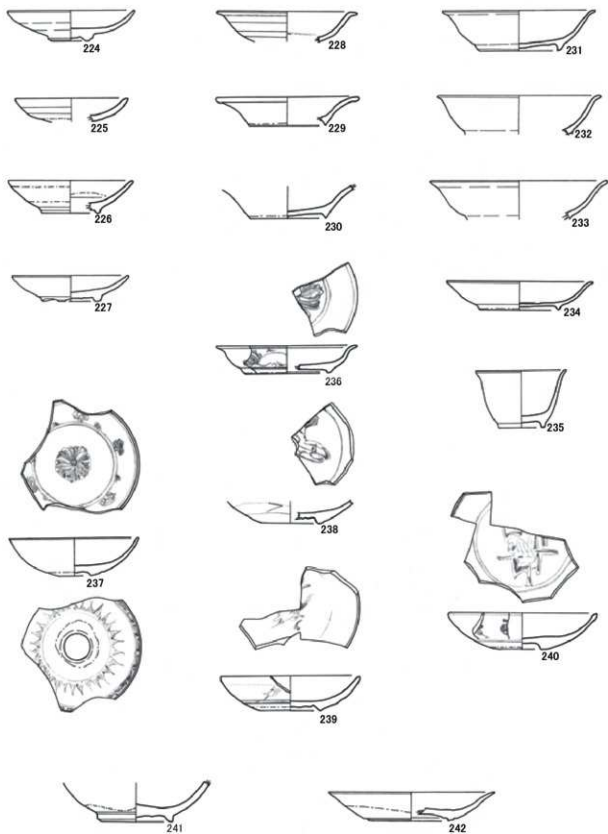
第66図 土師器



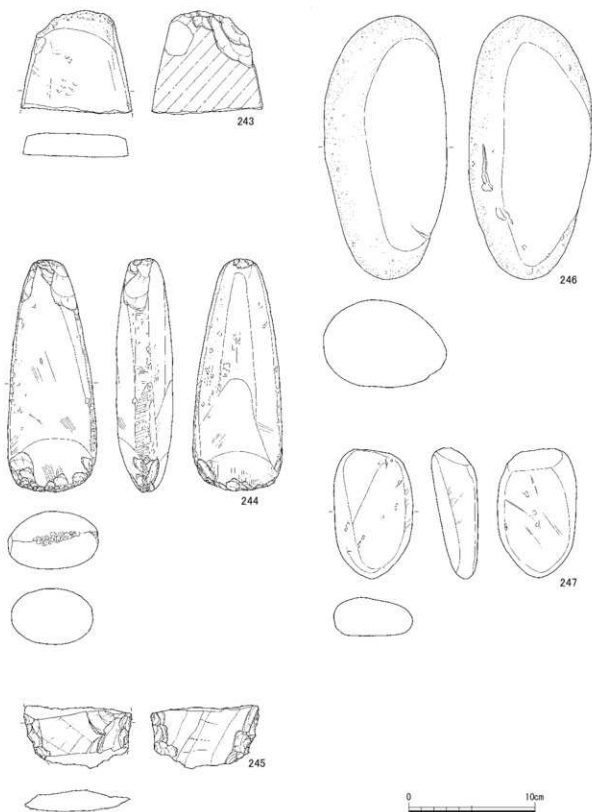
第67図 国産陶器



第68图 青磁



第69図 白磁・染付



第70图 石器

第5節 近世他の調査

本節では、表土直下で見発された遺構、遺物や表土中の遺物で図化できた資料について概説する。

1 近世の遺構 (第71, 72図)

土坑9号 (第72図)

D-7区のIV a層で検出した。平面形は円形で、径は84cm、検出面からの深さは37cmである。

埋土は黒褐色土から褐色土で構成され、しまりが弱く、下層にはアカホヤが多量に混じる。

遺物は床面直上で石臼(248)並びに石臼片が発見された。石臼の石材は、薄い緑色を呈する色調から、緑色凝灰岩製と考えられる。溝やもの入れのほか、挽き手を差し込んだと考えられる加工を確認できる。

2 時期不明の遺構 (第73~77図)

(1) 軽石集積遺構 (第74~76図)

F・G-9区の表土とⅡ層の境界付近で検出した。台地縁辺部であり、周囲のⅡ~Ⅵ層は削平されて残存していなかった。

100×100cmの範囲に、20cm大の軽石を含め計64個の軽石礫が集中していた。一部の礫には、平坦面を削り出した痕跡が窺えるものもある。部分的に被熱したものが多く、接合資料は確認できなかった。記録後、軽石礫を除去したところ、下部に190×120cmの掘り込みを確認できた。軽石礫の隙間を充填していた埋土の特徴は表土と類似していた。

(2) 焼土跡2号 (第77図)

D-10区のV層で検出した。周辺は削平を受けておりⅡ~Ⅳ層は残存していなかった。プランはやや形の崩れた隅四方形で、長軸265cm、短軸100cm、検出面からの深さは深さ10cmである。底面はやや凹凸がみられる。

埋土の特徴は表土に類似しており、調査時は若干有機物臭が残っていた。

遺物は被熱痕のある軽石が出土した。

埋土や検出時の状況から、近現代の焼土跡である可能性が高い。

3 近世ほかの遺物 (第78, 79図)

(1) 近世

255~263は薩摩焼をまとめた。

255は黒薩摩小碗と考えられる。褐釉が畳付以外全面に施されている。見込は蛇の目に軸を掻き取ってあり、重ねた高台の跡がついている。

256と257は急須である。256は鮫肌釉が外面全体に施されており、器壁も薄く上品な造形である。

258は小壺と考えられる。口唇部上端には、軸の掻き取りがみられる。体部に残るクロ目が美しい。

259は黒薩摩の鉢である。無軸の口唇部平坦面には、重ね焼きした際の鉢の跡が残る。

260は黒薩摩の描鉢である。口唇部平坦面を除き、褐釉と緑釉が施されているほか、密に入れられたカキ目部分にも施軸されている。全体的に丁寧な作りである。

261は黒薩摩の徳利である。口唇部と口縁部外面の一部に軸がかかっている。

262は黒薩摩の急須の底部を想定している。263は黒薩摩の碗を想定している。削高台で、軸は見込にのみ施される。

264~272は染付をまとめた。

264~267は碗である。264は透明釉が全体にかけられているが、気泡ぬけが散見できる。265は透明釉を全体にかけたうえで口唇部は削っている。266は見込に蛇の目軸割ぎがあり、畳付には軸の掻き取り跡を確認できる。267は型押しによる絵付けがみられる。内底に窯道具の痕跡がある。

268は染付の小碗である。高台は口縁径の中心からややずれているが、施軸や手描きの文様などは丁寧である。見込に砂目のようなものが観察される。

269, 270は碗と考えられる。どちらも軸下彩で文様を描くが、270は発色が薄い。

271, 272は皿である。271は口唇部のみ褐釉をかける。272は見込部・裏ともに露胎である。

273は黒薩摩の碗である。軸色は黒色で、軸下に白化粧土のようなものが1層観察される。露胎部及び断面に変色部分がみられる。

(2) その他の遺物

ここでは、Ⅱ層~表土中から出土した遺物のうち、個別の資料として耐えうるものについて掲載した。

274は洪武通宝である。Ⅱ層から出土した。古銭は第3地点でも包含層から複数出土したが、どれも劣化が著しく、図化・拓本が可能だったのはこの1点のみだった。

275は形状等から焼成粘土塊の破片と考えられる。Ⅱa層から出土した。

276は打製石鎌で、先端部は欠損しているが、側縁部には鋸歯状の加工を施している。

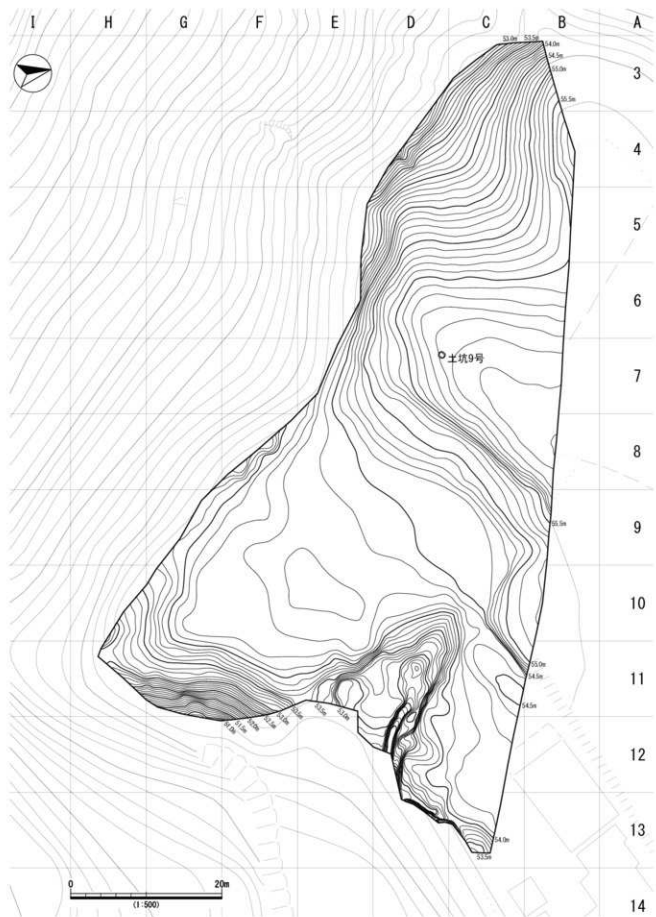
277は打製石斧で、基部から胴部にかけての両側縁に抉り部を作出しており、丸みを帯びた刃部をもつ。

278は磨製石斧の刃部である。表裏の敲打痕は、破損後に敲石に転用してついたものと考えられる。

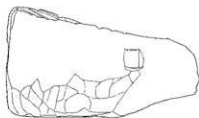
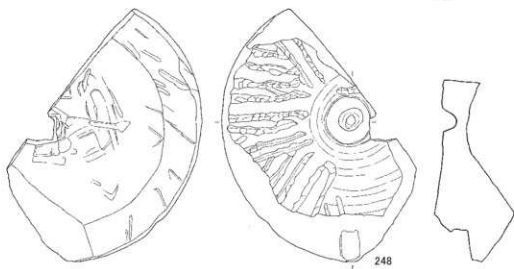
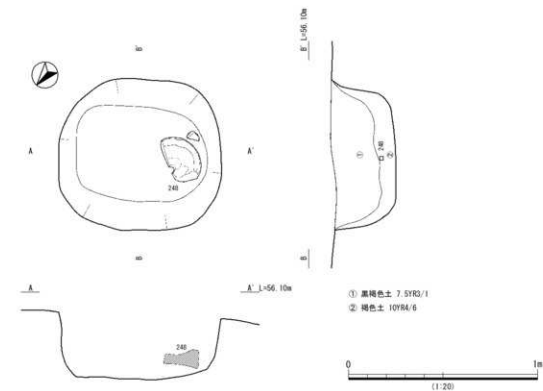
279は石器で頁岩製と考えられる。横長剥片の両側面に刃部を形成している。

280は頁岩製の磨製石器片である。半円形に研磨整形した剥片の直線部に片刃の刃部を研ぎ出している。なお、確認調査時点では、石包丁と考えられていた資料である。

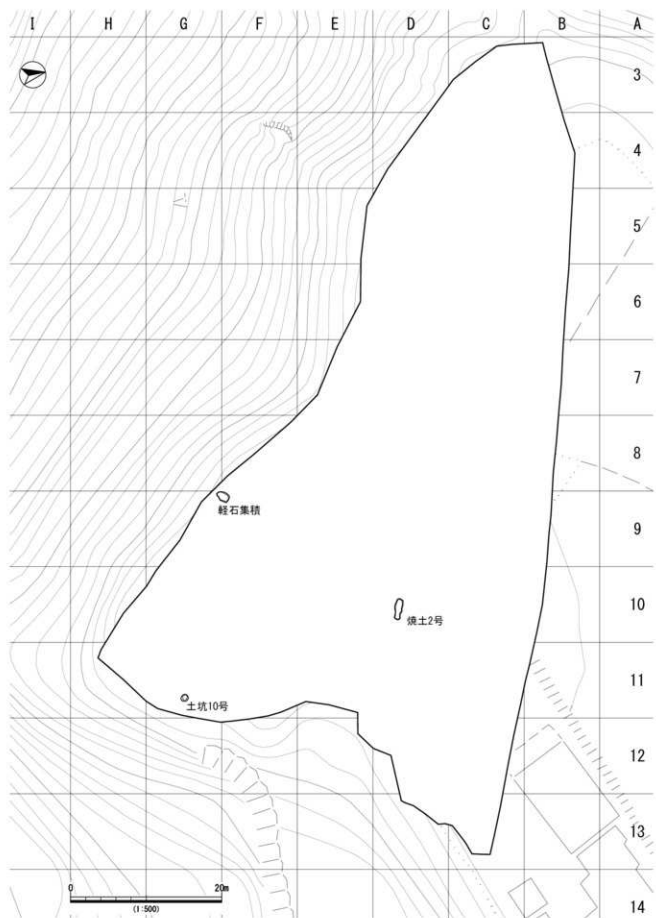
281は規格から太平洋戦争時の戦闘機の機銃用葉菜と想定される。



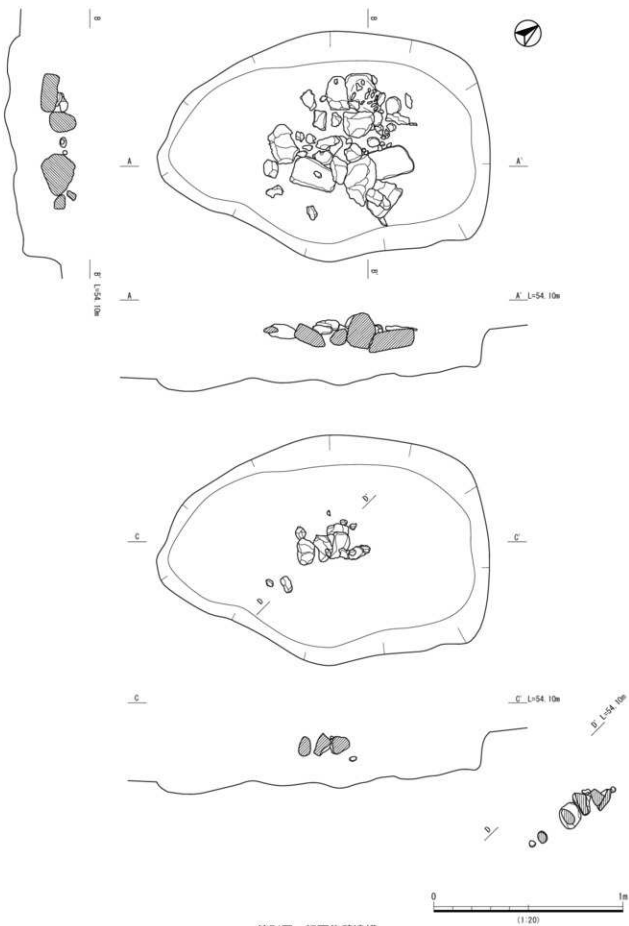
第71图 近世遺構配置図



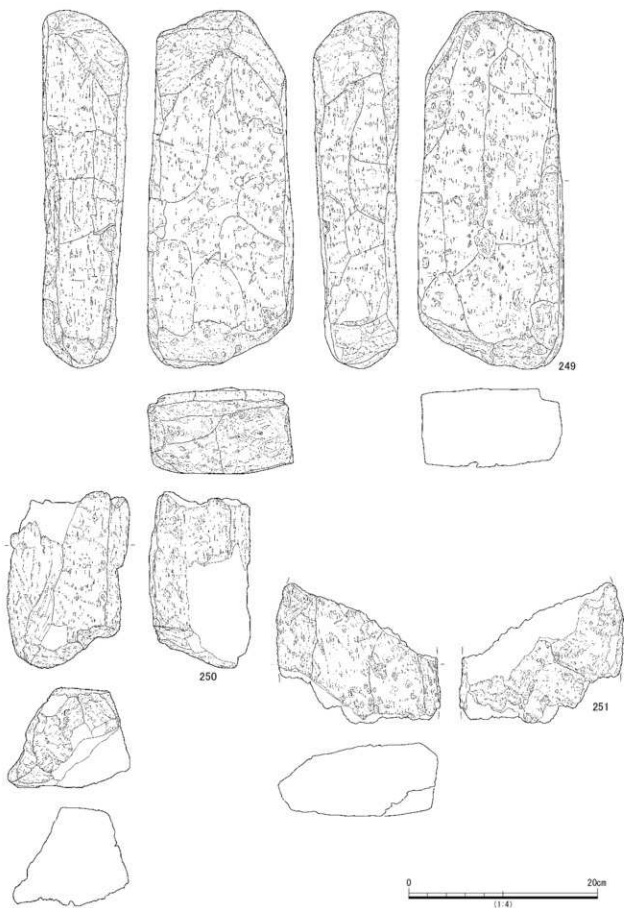
第72図 土坑9号と出土遺物



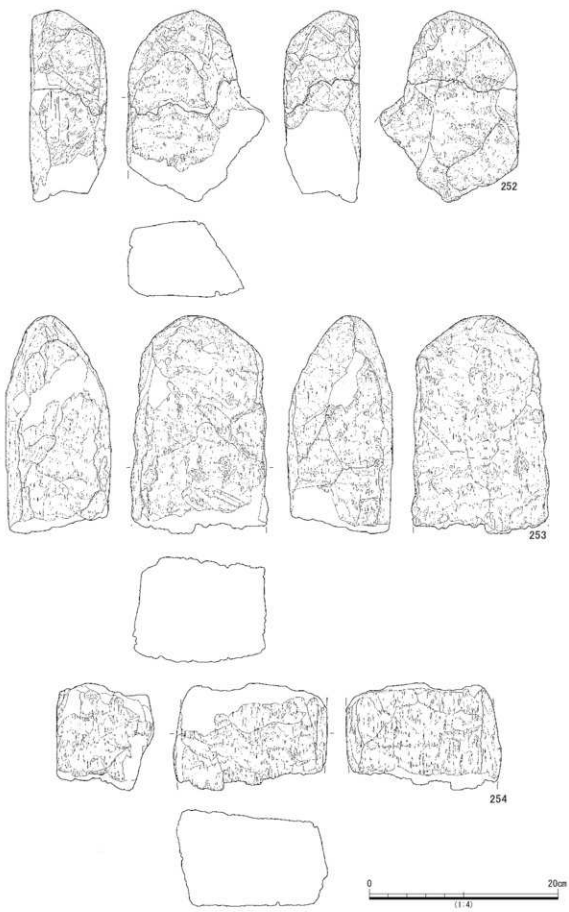
第73図 時代不明遺構配置図



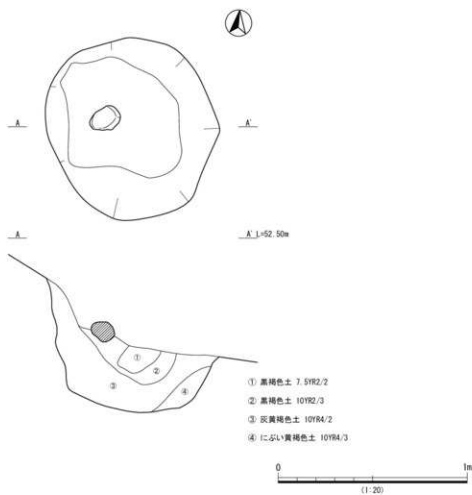
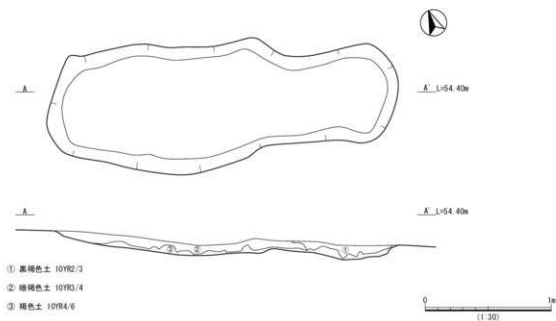
第74図 軽石集積遺構



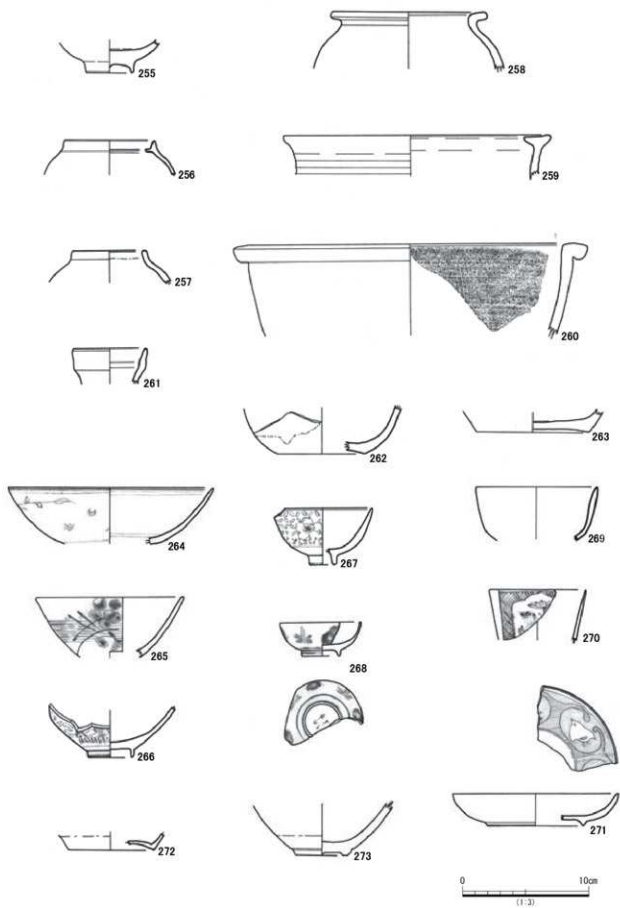
第75図 集積遺構出土の軽石加工品(1)



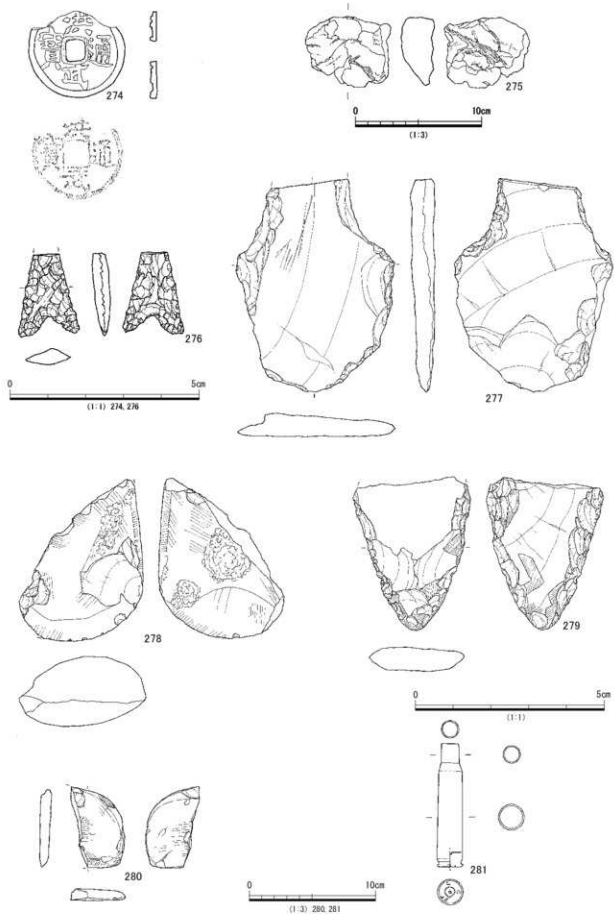
第76図 集積遺構出土の軽石加工品(2)



第77図 焼土2号・土坑10号



第78图 薩摩焼・肥前系磁器



第79図 1層の主な出土遺物

第8表 弥生時代～古墳時代遺物観察表

博物館 番号	発掘 番号	出土 遺物	器 種別	部位	分類	形			調整		文様	色調		胎土					備考						
						口	底	器高	外底	内底		外底	内底	石炭	赤土	黒土	黄土	灰土		砂	石灰				
27	25	35106	C13	II	口縁部	中期	(23.2)	—	(4.9)	横ナテ	横ナテ	—	7.5YR/6	7.5YR/6	○	○									
	27	35113B	C4	IIb	胴部	中期	—	—	—	ナテ	ナテ	—	10YR6/4	10YR5/4	○	○					○	○	良好		
	28	35329B	D45	IIb	胴部	中期	—	2.8	(2.8)	ナテ	ナテ	—	7.5YR/6	5YR5/6	○	○								良好	
29	29	34877	C6	IIb	頸口縁部	成川	(25.8)	—	(6.5)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/4	10YR7/6	○	○								良好	
	30	34649B	B5,C4,5	IIab	胴部-胴部	成川	(26.1)	—	(20.3)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/4	10YR7/1	○	○								良好	保存者
	31	35129B	D4C4	IIab	胴部-胴部	成川	(26.4)	—	(16.7)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/4	10YR7/4	○	○								良好	
30	32	94他	B5,C4,5	II	胴部-胴部	成川	(34.0)	—	(17.1)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	5YR6/6	5YR6/6	○	○								良好	
	33	一他	C3	I	頸部	成川	(24.4)	—	(4.5)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/4	10YR7/6	○	○								良好	
	34	35360B	B5,C4,D4	I, II b	胴部-変帯	成川	(30.8)	—	(6.7)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	7.5YR6/6	7.5YR6/6	○	○								良好	
31	35	35234B	C5,D5	IIb	胴部-胴部	成川	(30.0)	—	(10.0)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/1	10YR7/4	○	○								良好	
	36	35225B	C5,D5	IIb	胴部	成川	(29.0)	—	(6.5)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR7/4	10YR7/4	○	○								良好	
	37	35299B	D45	IIb	頸口縁部	成川	(31.0)	—	(11.0)	横ナテ	横ナテ	変帯1条	2.5Y/2-7.3	2.5Y/3										良好	
32	38	34461B	B5	IIab	胴部	成川	—	—	—	横ナテ	横ナテ	変帯1条	10YR6/6	7.5YR6/6	○	○								良好	
	39	35324	D5	IIb	頸部	成川	—	—	—	ナテ	横ナテ	変帯1条	2.5Y/3	2.5Y/4	○	○								良好	
	40	34589B	B6,C6	IIab	胴部-胴部	成川	(29.0)	(10.4)	(20.9)	横ナテ	横ナテ	—	5YR5/6	7.5YR5/6	○	○								良好	
31	41	35248B	D5	IIb	頸口縁部	成川	(23.4)	—	(7.9)	ナテ	ナテ	—	10YR7/6	5YR6/6	○	○								良好	
	42	34788B	B6,C6,D5	IIb	頸部	成川	(22.0)	—	(4.0)	ナテ	ナテ	—	7.5YR6/6	7.5YR6/6	○	○								良好	
	43	34589B	B6	IIa	頸部	成川	(12.0)	—	(8.5)	ナテ	横ナテ	—	5YR5/6	5YR5/6	○	○								良好	
32	44	35337B	D5	I, II b	胴部-胴部	成川	(17.6)	—	(9.6)	ナテ	ナテ	—	10YR7/6	10YR7/6	○	○								良好	
	45	35344B	D5	IIb	頸口縁部	成川	(17.4)	—	(6.4)	ナテ	ナテ	—	10YR5/4	7.5YR7/4	○	○								良好	
	46	99他	B5,C4,5	II, III b	頸部	土師妻	—	—	—	横ナテ	横ナテ	—	7.5YR5/6	7.5YR5/4	○	○								良好	
32	47	186他	B6,C5,D4,5	I, II ab	胴部	成川	—	—	—	横ナテ	横ナテ	—	7.5YR5/6	7.5YR5/4	○	○								良好	
	48	35379B	C5	IIb	胴部-胴部	成川	(20.4)	—	—	横ナテ	横ナテ	変帯1条	7.5YR5/6	7.5YR5/6	○	○								良好	
	49	34796B	B6,C6	IIb	胴部	成川	—	—	—	横ナテ	ナテ	変帯1条	10YR7/4	10YR6/3	○	○								良好	変帯部(25.6)
33	50	34403B	B6	IIab	頸部	成川	(28.0)	—	(11.7)	ナテ	ナテ	変帯1条	10YR6/6	10YR8/6	○	○								良好	
	51	—	C3	I	頸部	成川	(29.4)	—	(10.9)	ナテ	ナテ	変帯1条	7.5YR/6	5YR5/6	○	○								良好	
	52	34748B	B6,C5,6	IIab	胴部-胴部	成川	(24.8)	—	(15.9)	ナテ	ナテ	変帯1条	10YR6/6	10YR7/4	○	○								良好	
34	53	—	C3	I	頸部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	変帯1条	7.5YR5/4	10YR6/4	○	○								良好	
	54	35411	C4	IIb	変帯部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	2.5Y/3	2.5Y/6	○	○								良好	内に黒線
	55	34407B	B6,C5,D4,5	IIab	胴部-胴部	成川	(25.4)	—	(17.8)	横ナテ	横ナテ	—	10YR7/4	5YR5/4	○	○								良好	
35	56	2525	D5	IIb	小頸部	成川	(17.8)	—	(5.6)	ナテ	ナテ	—	7.5YR5/6	7.5YR6/6	○	○								良好	
	57	35313B	C5,6	I, II a	頸部	成川	(17.4)	—	(6.2)	横ナテ	横ナテ	—	7.5YR6/6	10YR6/4	○	○								良好	
	58	35237B	C5	IIb	頸口縁部	成川	(19.0)	—	(8.3)	横ナテ	ナテ	沈線	10YR3/1	10YR6/4	○	○								良好	
34	59	35429	C5	IIb	頸口縁部	成川	—	—	(8.6)	横ナテ	ナテ	—	7.5YR5/6	7.5YR5/4	○	○								良好	
	60	34943B	B5,C5	IIab	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	変帯1条	10YR5/4	5YR5/4	○	○								良好	
	61	34613B	B5,6,C5,6	I, II ab	胴部-底縁部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	7.5YR6/4	7.5YR6/6	○	○								良好	
35	62	35392B	C3,4	I, II b	頸部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	変帯1条	10YR6/4	10YR6/6	○	○								良好	
	63	35307B	D4,5	I, II b	頸部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	7.5YR5/6	7.5YR5/6	○	○								良好	
	64	34697B	B5,6	IIa	胴部	成川	(15.2)	—	—	ナテ	横ナテ	—	10YR6/6	7.5YR5/4-6.6	○	○								良好	
35	65	35110B	B4	IIb	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	10YR7/4	10YR6/3	○	○								良好	
	66	35309B	D5	IIb	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	10YR7/4	10YR7/3	○	○								良好	
	67	34575B	B6,C6	IIab	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	7.5YR6/6	7.5YR7/4	○	○								良好	
35	68	34815B	C5,6	IIab	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	10YR6/6	7.5YR6/6	○	○								良好	
	69	35177B	B5,C3,4,5	I, II b	底縁部	成川	—	—	—	横ナテ	横ナテ	—	10YR6/6	7.5YR7/1	○	○								良好	内2ヶ付着
	70	34387B	B5,6,C3,D5	IIab	胴部-底縁部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	10YR6/4	10YR7/4	○	○								良好	
71	34684B	B5	IIab	胴部	成川	—	—	—	ナテ	ナテ	—	2.5Y/3	2.5YR/3	○	○								良好		

第9表 土師器等観察表

博覧 館 番号	出土 番号	グランド 遺構	新遺構名	形	群	部位	分類	径			色調		胎土		備考			
								口	底	器高	外面	内面	赤褐色	赤色				
44	125	—	SK275	地下式坑1号	—	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(13.6)	(9.4)	29	7.5YR8/6	7.5YR8/7			真	白粘土あり	
	127	—	SK284	地下式坑4号	—	Ⅲ	底縁	土師器	—	(9.0)	(2.7)	7.5YR8/6	7.5YR8/7			真	白粘土あり	
47	130	—	SK284	地下式坑4号	—	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(12.2)	(7.6)	29	8.0YR8/6	8.0YR7/3			真好	ハナ型	
48	131	—	SK288	地下式坑5号	—	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.0)	(6.1)	32	2.5YR/3	2.5YR/3			真好	赤切底	
	133	—	SK289	地下式坑6号	—	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.8)	(6.2)	36	7.5YR8/3	7.5YR8/2			真	赤切底	
49	134	—	SK289	地下式坑6号	覆上	Ⅲ	体部-底部	土師器	—	(10.0)	(3.4)	2.5YR/3	5YR8/4			真好	真	
53	142	34621	SK272	土坑4号	①	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(10.8)	(8.0)	27	10YR8/4	10YR8/4			真	ハナ型白粘土	
61	149	35669	SD40	遊民遺構	②	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.8)	(6.8)	41	10YR8/3	10YR7/3			○	真	
	150	—			—	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	12.0	8.8	31	7.5YR5/2	2.5YR6/6			真好	赤切底	
	151	35365			③	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(9.8)	(6.2)	18	10YR8/6	10YR8/6				真	
66	167	—	G10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(13.0)	(9.2)	32	10YR8/4	7.5YR8/4			○	真好	赤切底	
	168	—	E9	カラウシ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(12.0)	(8.0)	31	10YR8/4	10YR8/5				真好	赤切底	
	169	—	H10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	12.2	9.0	30	5YR8/8	5YR8/8	○		真好	赤切底		
	170	—	G9	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.6)	(7.4)	37	2.5YR/4	2.5YR/5			真好	淡黄色土粒あり		
	171	—	CS	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(10.2)	(6.8)	34	7.5YR8/6	7.5YR8/6			真好	黒色顔料あり		
	172	—	F11	Ⅱ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(13.7)	(10.4)	30	7.5YR8/6	7.5YR8/7			真好	真好		
	173	—	G9, 10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.6)	(7.6)	29	2.5Y7/3	2.5Y7/4				真好		
	174	—	F10	Ⅲ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.0)	(7.2)	32.5	10YR8/3	10YR8/3			○	真	赤切底	
	175	—	D10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.8)	(9.0)	34	5YR8/8	7.5YR7/6				真好	赤切底	
	176	—	G10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.0)	(9.2)	32	10YR8/4	10YR8/4				真好	赤切底	
	177	—	G9	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(11.0)	(7.6)	32	10YR8/4	10YR8/4			○	真好	赤切底	
	178	—	H10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(10.8)	(9.0)	33	10YR7/3	10YR8/3				真好	赤切底	
	179	—	D10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(10.6)	(6.6)	23	10YR7/3	10YR7/4			○	真好	赤切底	
	180	—	D10	Ⅰ	Ⅲ	側部-底部	土師器	—	(6.8)	(1.7)	10YR8/3	7.5YR8/4				真好	赤切底	
	181	—	C11	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(7.4)	(5.6)	19	10YR8/3	10YR7/3				真好	赤切底	
	182	—	G11	Ⅰ	Ⅲ	底縁	土師器	8.6	6.2	23	7.5YR7/6	7.5YR8/6				真好	赤切底	
	183	—	G11	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(9.0)	(5.8)	1.8	10YR8/4	7.5YR8/4				真	赤切底	
	184	—	G10	Ⅰ	小Ⅲ	底縁	土師器	9.3	6.4	26	10YR8/3	2.5YR5/8				真好		
	185	—	CS	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(8.0)	(6.0)	19	5YR7/4	7.5YR6/4				真好	赤切底, 煤粒あり	
	186	—	G10	Ⅰ	小Ⅲ	底縁	土師器	7.0	4.6	19	7.5YR8/6	7.5YR8/4	○			真好		
	187	—	G10	Ⅰ	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(8.2)	(6.2)	20	7.5YR7/6	7.5YR7/6				真好	赤切底	
	188	35112	B4	Bb	Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(8.2)	(7.4)	19	7.5YR7/4	10YR8/4				真好	赤切底	
	189	—	G9	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(8.0)	(7.0)	22	7.5YR7/6	7.5YR7/6			○	真好		
	190	35381	G11	Ⅰ	Ⅲ	底縁	土師器	7.6	5.9	19	10YR8/4	10YR8/4				真好	赤切底	
	191	—	G10	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(7.2)	(6.8)	1.8	7.5YR8/4	7.5YR8/5				真好		
	192	—	D9, 10	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(6.6)	(5.0)	1.7	7.5YR7/3	7.5YR7/3				真好		
	193	35320	D5	Bb	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(9.0)	(8.0)	1.6	7.5YR8/4	7.5YR8/4				真好	赤切底	
194	—	B10	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(6.8)	(4.2)	1.9	7.5YR8/6	7.5YR8/6			○	真好	ハナ型		
195	—	G9	Ⅰ	小Ⅲ	口縁部-底部	土師器	(6.8)	(4.4)	1.8	7.5YR8/6	7.5YR7/6				真好			
79	275	—	D5	Ba	—	—	構成粘土	—	—	—	—	10YR8/6-7/6						

第10表 陶磁器他観察表

国産品 番号	フリック 番号	新造機名	層	種類	分類	群種	部位	口径	底径	器高	胎土の色調	釉薬の色調	裝飾部位	産地	時期	備考		
45	128	SK278	地下式汎2号	1. 皿	磁器	青磁	皿	口縁部-胴部	24.0	—	—	灰色	10Y5/2	全面	中国	中世	取上No.34889集	
46	129	SK283	地下式汎3号	1. 皿	陶器	黄赤	磁鉢	胴部-底部	—	14.4	—	—	—	—	—	—	—	
49	130	SK289	地下式汎6号	—	磁器	青磁	碗	口縁部	18.0	—	—	灰色	7.5Y5/2	全面	中国	中世	保存者	
137	—	—	—	—	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	16.8	—	—	淡紅色	5Y7.5/2	全面	中国	中世	貫入眼	
50	138	SK289	地下式汎6号	—	磁器	青磁	碗	口縁部-底部	11.6	6.65	2.6	灰白色	7.5Y4/2	全面	清化森野	中国	中世	—
—	—	—	30	土器	瓦葺土器	美	口縁部-胴部	11.6	—	—	5Y8/1	黒釉(漆喰)	—	日本	中世	取上No.3786		
61	152	SD40 D1011	流状遺構	①	陶器	黄赤	磁鉢	口縁部-底部	28.2	13.2	13.4	小豆色	灰緑-白緑色	内面-口縁外縁	中国地方	中世	取上No.35601集	
153	SD40	①		陶器	黄赤	磁鉢	口縁部-胴部	22.0	—	—	灰	黄緑-小豆色	口縁外縁	中国地方	中世	—		
154	SD40 C9 D911	—		陶器	黄赤	磁鉢	胴部-底部	—	12.4	—	—	内灰色 内小豆色	—	—	中国地方	中世	—	
155	SD40	—		磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	12.6	—	—	灰白	灰緑?、灰色	全面	中国?	中世?	—		
156	SD40	—		②	磁器	青磁	碗	底部	—	7.2	—	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面(高台除)	中国	中世	—	
157	SD40	—		③	磁器	黄緑	碗	底部	—	5.0	—	灰白	2Y9.5-3Y9.1	縁部(高台除)	中国	中世	取上No.35389	
158	SD40	—		④	磁器	黄緑?	小部	胴部	—	—	—	灰白	緑緑-2.5Y4/3	全面	中部?	中世?	包具?	
159	SD40 C11	—		⑤	磁器	白磁	碗	口縁部-胴部	11.2	—	—	白	透明釉	全面	日本?	中世後	貫入眼	
160	SD40	—		⑥	磁器	白磁	碗(灰)	口縁部-底部	9.0	4.8	2.3	白	透明釉	全面(器付除)	中国	中世	—	
161	SD40	—		⑦	磁器	染付	皿	口縁部-底部	10.0	2.9	2.5	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面(器付除)	中国	15-16C	器底	
162	SD40	—		⑧	陶器	黄赤	小鉢	胴部-高台	—	5.0	—	5Y8.5/4	黄赤-3Y9.2	全面(高台除)	鹿児島	近世	赤土製の器類同	
64	166	F2469		—	陶器	黄赤地?	碗	胴部	—	6.4	—	黄白色	黄白色	全面 器付高台除	鹿児島?	近世	—	
196	C8	—		1	陶器	黄赤	磁鉢	口縁部-胴部	27.6	—	—	灰(中々小豆色)	不詳-灰色	口縁外縁	岡山あなろ	中世	—	
197	E8	—		1	陶器	黄赤	磁鉢	口縁部	—	—	—	灰	灰緑-淡黄色	口縁部	中国地方	中世	—	
198	D5	—	1	陶器	黄赤	磁鉢	口縁部	23.4	—	—	1.5Y9.5-小豆色	—	—	中国地方	中世	—		
199	C11.12	—	1	陶器	黄赤	磁鉢	胴部-底部	—	11.0	—	暗灰(中々小豆色)	—	—	中国地方	中世	—		
200	R6	—	IIa	陶器	黄赤?	磁	口縁部	11.0	—	—	灰色	—	—	日本	中世	取上No.3484		
201	D.511	—	1	陶器	黄赤	磁	口縁部	15.6	—	—	淡小豆色	—	—	中国地方	中世	—		
202	D11	—	1	陶器	黄赤	瓶	底部	—	13.2	—	—	淡黄灰	瓶輪 全面 (高台面含)	中国地方	中世	—		
203	B4	—	IIa	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	12.4	—	—	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	隣連者、貫入		
204	D8.10	—	1	磁器	青磁	碗	口縁部-底部	15.0	—	—	灰色(黑色粒含)	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入(隣連者?)		
205	B10	—	1	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	13.0	—	—	灰(黑色粒含)	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入大粒?		
206	D12	—	1	陶器	緑釉	碗	口縁部-胴部	18.4	—	—	黒(緑粒含)	5Y8/4	全面	中国?	近世?	貫入眼取No.35905		
207	G9	—	1	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	14.0	—	—	灰(中々黄赤) 2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入(口縁部)			
208	C8.9	—	1	磁器	青磁	碗(灰)	口縁部-胴部	13.0	—	—	白(中々黄赤)	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入、黒色粒有		
209	G10	—	1	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	16.2	—	—	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	—		
210	C10 D1012	—	1	磁器	青磁	碗	口縁部-胴部	—	—	—	暗灰	緑緑-2.5Y4/2	全面	中国	中世	—		
211	C11	—	1	磁器	青磁	碗	底部	—	5.2	—	灰	2Y9.5-3Y9.1	高台蓋以外	中国	中世	黄灰土(見込部)		
212	B.D10	—	1	磁器	青磁	碗	胴部-底部	—	4.6	—	灰	2Y9.5-3Y9.2	全面 器付高台除	中国	中世	—		
213	C9	—	1	磁器	青磁	碗	胴部-底部	—	4.9	—	灰白	2Y9.5-3Y9.2	高台蓋以外	中国	中世	隣連者		
214	D8	—	1	磁器	青磁	碗	底部	—	6.0	—	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面 器付高台除	中国	中世	隣連者		
215	D11	—	1	磁器	青磁	碗	胴部-底部	—	5.5	—	暗灰白	2Y9.5-3Y9.1	高台蓋以外	中国	中世	貫入大粒?		
216	C12	—	1	磁器	青磁	皿	口縁部-底部	12.5	5.8	3.4	灰白	2Y9.5-3Y9.1	高台蓋以外	中国	中世	取上No.35982		
217	C9	—	1	磁器	青磁	皿	口縁部-胴部	10.8	—	—	灰(中々黄赤)	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入大粒?		
218	D11	—	1	磁器	青磁	小鉢	口縁部-胴部	8.0	—	—	暗灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	貫入大粒?		
219	C10	—	1	磁器	青磁	皿	口縁部-底部	11.8	6.3	2.8	灰白	2Y9.5-3Y9.2	全面 器付高台除	中国	中世	貫入大粒?		
220	G11	—	1	磁器	青磁	皿	口縁部-底部	12.8	7.5	3.3	暗灰(中々黄赤)	2Y9.5-3Y9.2	高台蓋以外	中国	中世	貫入		
221	G9	—	1	磁器	青磁	皿	口縁部-胴部	14.0	—	—	暗灰	2Y9.5-3Y9.2	全面	中国	中世	隣連者取上No.35999		
222	B4	—	IIa	磁器	青磁	皿?	胴部-底部	—	10.8	—	—	暗灰	2Y9.5-3Y9.2	全面 (高台面除)	中国	中世	隣連者文有	
223	E7	—	1	磁器	青磁	皿?	底部	—	6.0	—	白	2Y9.5-3Y9.2	高台蓋以外	中国	中世	—		

種別 種別 番号	グリッド 区画 番号	新造種名	層	種別	分類	品種	部位	口径	直径	器高	胎土の色調	施釉の箇所・色調	施釉の部位	産地	時期	備考
69	224	C3A	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	100	36	24	白(黒色紋食)	透明釉	全面 底面(高付型)	中国	近世	
	225	H11	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	88.8	—	—	白(赤か黄か)	透明釉	全面 底面(高付型)	中国	近世	買入
	226	D10	I	白磁	白磁	瓦(1号)	口縁部～胴部	98.8	146	26	白(黒色紋食)	透明釉	全面 底面(高付型)	中国	中世	
	227	G9	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	69.0	148	—	白	白色釉 (厚塗)	全面 見込 底面(高付型)	中国	近世	切高付、目録 表上3630268
	228	E8F9	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	111.0	—	—	白(やや灰白)	透明釉 (やや緑)	全面	中国	近世	
	229	D9	I	白磁	白磁	瓦(緑丸)	口縁部～胴部	111.0	160	22	白	透明釉	全面 底面(高付型)	中国	近世	
	230	C12	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	—	160	—	灰白(黒色紋食)	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	
	231	D10	I	白磁	白磁	瓦(黄丸)	口縁部～底面	120.0	166	31	白	透明釉	全面(高付型)	中国	中世後期	
	232	B10	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	113.0	—	29	白	透明釉	全面	中国	中～近世	
	233	C12	I	白磁	白磁	瓦(黄丸)	口縁部～胴部	140.0	—	—	灰白(黒色紋食)	透明釉	全面	中国	中世	
	234	C9	I	白磁	白磁	瓦(黄丸)	口縁部～底面	111.4	162	22	—	透明釉	全面(見込)	中国		
	235	C11	I	白磁	白磁	瓦(のみ)	口縁部～底面	7.0	36	45	白	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	
	236	C12	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	111.1	167	21	白(やや灰)	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	砂目有
	237	C10	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	102.2	24	29	白	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	近世一 中世末
	238	C12	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	—	146	—	白	透明釉 (やや黄)	全面	中国	中世末～ 近世初	赤褐色、砂目有
	239	C10	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	108.8	48	27	明灰	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	赤褐色
	240	D11	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	118.6	130	28	白	透明釉	全面(高付型)	中国	中～近世初	赤褐色、砂目有
	241	D8E	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	—	160	—	白(黒色紋食)	透明釉	全面(高付型)	中国	中世	
	242	D811	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	140	58	23	白	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	高台
	243	C9	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	—	138	—	黄土色	透明釉	全面(高付型)	鹿児島	近世	
	244	D11	I	陶器	黒磁	急須	口縁部～胴部	74.1	—	—	茶色	茶色のたれ	外面全体	鹿児島	近世	
	245	C10	I	陶器	黒磁	急須	口縁部～胴部	56.6	—	—	赤褐色	黒色釉	外面(胴部) 底面(高付型)	鹿児島	近世	
	246	E6	I	陶器	黒磁	小壺	口縁部～胴部	120.0	—	—	黒褐色	—10Y3/2	全面 口縁上縁部	鹿児島	近世	
	247	C8	I	陶器	黒磁	鉢	口縁部	21.8	—	—	茶色	黒釉	全面	鹿児島	近世	
	248	C13	I	陶器	黒磁	鉢	口縁部～胴部	28.0	—	—	暗赤色	黒釉・緑釉	口縁部 外面(高付型)	鹿児島	近世	
	249	D9	I	陶器	黒磁	土鍋	口縁部	86.0	—	—	N2/0	黒色-7.5Y2/2	全面	日本	近世	
	250	D9	I	陶器	黒磁	急須	胴部～底面	—	168	—	茶色	赤不透明 白濁	胴部 外面	鹿児島	近世	
	251	D8	I	陶器	黒磁	瓦	底面	—	188	16	2.5Y7/2	黒色釉	見込のみ	中国	近世	
	252	D89J8	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	160.0	—	—	白	透明釉	全面	中国	近世	
	253	D8	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	111.6	—	—	白	透明釉	全面	中国	近世～近代	
	254	D9	I	白磁	白磁	瓦	胴部～底面	—	136	—	—	透明釉	外面	中国	近世	ブロンズは型押
	255	C8	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	7.8	119	44	—	透明釉	外面(高付型)	中国	近世	型押
	256	SD40	—	白磁	白磁	小瓶	口縁部～高台	6.4	31	27	白	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	
	257	C9	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	94.1	—	—	白	透明釉	全面	中国	近世～近代	輪下割
	258	D6	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～胴部	74.6	—	—	白	透明釉	全面	中国	近世～近代	輪下割
259	D11	I	白磁	白磁	瓦	口縁部～底面	133.0	176	35	白(やや灰)	透明釉	全面(高付型)	中国	近世	口縁の大彫 プリント	
260	D9	I	白磁	白磁	瓦	底面	—	166	—	灰白	わずかに施釉	底面	中国	近世		
261	D9	I	陶器	黒磁	瓦	胴部～底面	—	43	—	2.5Y8/2	黒色釉	全面 (外面下縁部)	中国	近世	輪下に白化粧土	
262	B10	II	—	—	古銭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
263	C9	I	武蔵	—	葉巻	葉巻部	1.4	20	99	—	—	—	—	—	—	太平洋戦争

第11表 石器観察表

種別 番号	取上番号	グランド 遺構	新造機名	層	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考							
48	132	—	SK288	地下式坑5号	—	磨製石斧	12.5	(32)	2.5	144								
50	139	—	SK289	地下式坑6号	—	砥石	(7.7)	3.25	(0.95)	27.23	シルト質頁岩							
	140	32957			②	磨面磨熟礫	20.0	9.2	5.4	1330								
	141	—			Ⅲ上	打製石斧	21.9	16.0	1.9	700								
59	143	32527	SD40	遺状遺構	①	五輪帯(丸輪)	13.0	31.7	13.0									
	144	32528			②	五輪帯(丸輪)	16.5	32.0	16.4									
	145	32582			③	五輪帯(丸輪)	16.7	31.6	16.7									
	146	32529			④	五輪帯(丸輪?)	12.6	31.2	12.6									
	147	32590			SD40	遺状遺構	⑤	五輪帯(水輪)	16.8	23.9	16.7							
148	32526	⑥	五輪帯(地輪)	17.2			32.1	17.0										
62	163	30667	SD40	遺状遺構	①	石器	5.1	4.5	1.6	52.51								
	164	30672			②	石器	7.0	7.9	3.2	99.1								
	165	—			—	凹石	8.6	8.0	5.1	40.2								
70	243	34084	C5	Ⅱb	—	砥石	(5.5)	5.8	1.7	59.6								
	244	34016	B6	Ⅱa	—	磨製石斧	12.3	4.7	3.0	257								
	245	34009	B6	Ⅱa	—	打製石斧刃部	3.3	5.7	1.2	27.49								
	246	34037	B5	Ⅱb	—	磨面礫	13.9	6.5	4.6	61.9								
	247	34098	B6	—	Ⅱb	—	磨石加工品	6.9	4.1	2.5	38.21							
72	248	34465	SK258	土坑9号	①	—	石臼	20.5	26.5	11.5								
75	249	—	SS82	—	—	—	—	—	—	—	—							
	250	—	SS82									—	—	—	—	—	—	—
	251	—	SS82															
76	252	—	SS82	—	—	—	—	—	—	—	—							
	253	—	SS82									—	—	—	—	—	—	
	254	—	SS82															—
	276	—	D6									Ⅲ上	—	打製石礫	2.0	1.5	0.4	
79	277	—	D5	1	—	打製石斧	10.8	8.0	1.2	126								
	278	—	B9	1	—	磨製石斧刃部	(8.2)	(6.3)	3.6	192								
	279	—	D11	1	—	礫片	7.7	6.0	1.9	65.32								
	280	—	E7	1	—	磨製石器	(4.1)	(2.7)	0.6	9.35								

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の種類と目的

永吉天神段遺跡の第3地点における自然科学分析は、平成27年度に「出土試料の自然科学分析（テフラ分析）」を、平成29年度に「出土試料の放射性炭素年代測定」を行った。

これらの分析では、縄文時代早期とされる竪穴住居跡の埋土中の火山砕屑物を抽出し、その鉱物組成や細屑物の特徴を捉えることによってテフラであることを確認し、既知のテフラとの対比を行った。また、竪穴住居跡2基の出土炭化材2点について放射性炭素年代測定を実施し、分析結果を基に時間的位置付けを検討する基礎資料とした。

第2節 永吉天神段遺跡のテフラ分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は、縄文時代早期とされる竪穴住居跡SI55の埋土及び地山より採取された10点中の4点である。

調査区内の基本層序は、上位よりV層からVIII層まで分層され、これらのうちV層には鬼界カルデラ火山灰（K-Ah：町田・新井，1978）、VIII層には松島のテフラである松島薩摩テフラ（Sz-S(Sz-14)：町田・新井，2003、P-14：小林，1986）が確認されている。竪穴住居跡はVI層中部からVIII層中部までを掘り込んでいる。埋土は上位より①層・②層・③層に分層され、側壁に付随する埋土は④層とされている。

10点の試料は1～10までの試料番号が付されている。各資料が採取された層位は、試料番号1が③層、試料番号2が②層、試料番号3～5が①層である。試料番号6・7は竪穴住居跡を覆うVI層上部から採取されており、試料番号8は住居跡側壁を構成するVI層下部から、試料番号9はその上位のVI層上部から、試料番号10はさらに上位のV層からそれぞれ採取されている。本分析では、試料番号2・4・7・8の4点が選択された。各試料の外観は以下のとおりである。

- 試料番号2：暗褐色を呈するやや砂質の火山灰土。
径2～4mmの黄褐色軽石が中量程度散在する。
- 試料番号4：黒褐色を呈するやや砂質の火山灰土。
径2～4mmの黄褐色軽石が少量程度散在する。
- 試料番号7：黒褐色を呈するやや粘土質の火山灰土。
径2～4mmの黄褐色軽石が微量程度散在する。
- 試料番号8：黒褐色を呈するやや粘土質の火山灰土。
径1～3mmの黄色軽石が中量程度散在する。

2 分析方法

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥後、篩別して得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離。重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで固定する。重鉱物固定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落斜光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型が薄手平板状、中間型が表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型が小気泡を非常に多く持った塊状及び気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。スコリアが認められた場合は、火山ガラスと同様に計数する。

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から抽出した火山ガラスと重鉱物分から抽出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3 結果

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表12、図80に示す。重鉱物組成は、4点の試料とも斜方輝石が最も多く、次いで不透明鉱物、単斜輝石の順に多い。VI層の試料番号7・8に比べて、埋土の②層と①層の試料である試料番号2・4は斜方輝石がやや少なく、単斜輝石と不透明鉱物がやや多い傾向が認められる。

火山ガラス比は、4点の試料ともに少量の軽石型火山ガラスが含まれ、極めて微量のバブル型火山ガラスも含まれる。

(2) 屈折率測定

測定結果を図81・82に示す。以下に、火山ガラスと斜方輝石に分けて述べる。

1) 火山ガラス（図81）

試料番号2：n1.498-1.500の低屈折率のレンジと、n1.504-1.513までのやや幅の広い高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードはn1.499であり、高屈折率のモードはn1.507である。

試料番号4：n1.499-1.500の低屈折率のレンジと

n1.503-1.513までのやや幅広い高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードはn1.500であり、高屈折率のモードはn1.508である。

試料番号7：n1.498-1.500の低屈折率のレンジと、n1.507-1.512までの高屈折率のレンジに明瞭に分かれる。低屈折率のレンジのモードはn1.499であり、高屈折率のモードはn1.509である。

試料番号8：n1.498-1.500の低屈折率のレンジと、n1.504-1.513までの高屈折率のレンジに明瞭に分かれる。低屈折率のレンジのモードはn1.499であり、高屈折率のモードはn1.507である。

2) 斜方輝石 (図82)

試料番号2： γ 1.706-1.712の低屈折率のレンジと γ 1.718-1.723の高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードは γ 1.708であり、高屈折率のモードは γ 1.722である。量的には低屈折率のレンジに入る方が多い。

試料番号4： γ 1.707-1.713の低屈折率のレンジと γ 1.728-1.733の高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードは γ 1.711であり、高屈折率のモードは不明瞭である。量的には低屈折率のレンジに入る方が多い。

試料番号7： γ 1.707-1.713のレンジを示し、モードは γ 1.710である。

試料番号8： γ 1.708-1.714の低屈折率のレンジと γ 1.746-1.752の高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードは γ 1.712であり、高屈折率のモードは不明瞭である。量的には低屈折率のレンジに入る方が多い。

4 考察

火山ガラス及び斜方輝石の屈折率の状況から、いずれの試料においても複数のテフラに由来する火山ガラスや斜方輝石が混在していると考えられる。その由来が最も明瞭なものは、4点の試料に低屈折率のレンジで認められた火山ガラスである。これは、その値とレンジの幅の狭さが特徴となっており、いずれも遺跡の立地するシラスを構成している入戸火砕流に由来する。この特徴は、入戸火砕流の細粒物が給源から遠隔地において降下火山灰として認められている始良Tn火山灰 (AT:町田・新井, 1976) を識別する特徴の一つともされている。一方、斜方輝石ではSI55埋土の①層から採取された試料番号4の高屈折率のレンジを示すものがシラス由来の斜方輝石に相当する。

そのSI55埋土①層の試料番号4において主体を占める低屈折率のレンジの斜方輝石に由来するテフラは、同試料において高屈折率のレンジを示す火山ガラスの由来するテフラと同一のものと考えることができる。試料番号

4における高屈折率の火山ガラスは、そのレンジの広さから複数のテフラに由来する火山ガラスが混在している可能性が高い。前述した調査区内のテフラ層序と町田・新井 (2003) による火山ガラス屈折率の値に従えば、由来するテフラとしてS_z-S、K-Ah及び板島12 (Sn-12(町田・新井, 2003)P-12(小林, 1986)) の3者が混在している可能性がある。なお、Sn-12の噴出年代は暦年で約9000年前とされている (奥野, 2002) が、今回の分析結果からはSn-12の住居跡埋土内における堆積状況が不明なため、Sn-12の降下堆積とSI55の構築との前後関係は明らかではない。

VI層上部の試料番号7では、シラス由来の火山ガラスとそれより高屈折率の火山ガラスが混在する。高屈折率の火山ガラスは、その値と調査区内のテフラ層序からS_z-SIに由来すると考えられる。斜方輝石の屈折率のレンジはそのことを支持している。

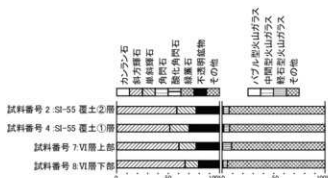
VI層下部の試料番号8においても、高屈折率の火山ガラス及び低屈折率の斜方輝石はS_z-SIに由来する可能性が高い。同試料における高屈折率の斜方輝石については、他の試料に認められないほどの値であり、これに該当するテフラとしては、始良カルデラを給源として1.9万年頃頃に噴出した燃島テフラ (Mj:小林, 1986) に由来する可能性がある。S_z-Sとの層位関係から、VI層下部における降灰を示すものではなく、降下堆積後の攪乱再堆積によりVI層の火山灰土中に混入した可能性があると考えられる。

【引用文献】

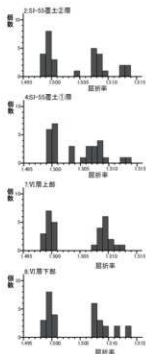
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定及び形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 小林哲夫, 1986, 板島火山の形成史と火砕流. 文部省科学研究費自然災害特別研究. 計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流 (火砕流等) の特質と災害」(代表者荒牧重雄) 報告書, 137-163.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336 p.
- 奥野 充, 2002, 南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代. 第四紀研究, 41, 225-236.

第12表 重鉱物・火山ガラス比分析結果

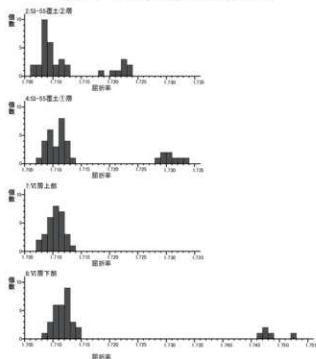
試料番号	層位	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中細型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
2	SI-55 覆土②層	146	47	0	57	0	250	3	0	14	233	250
4	SI-55 覆土①層	129	47	1	73	0	250	2	2	14	232	250
7	VI層上部	151	42	0	57	0	250	1	0	22	227	250
8	VI層下部	166	33	0	51	0	250	2	0	11	237	250



第80図 重鉱物組成及び火山ガラス比



第81図 火山ガラスの屈折率



第82図 斜方輝石の屈折率

第3節 出土試料の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 測定対象試料

永吉天神段遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町永吉の檜ヶ山集落に所在し、持留川とその支流に挟まれた標高約30mの河岸段丘及び標高約50mのシラス台地上に立地する。第3地点は台地西端の縁辺部に位置し、測定対象試料は同地点から検出したSI54・55の埋土内で確認された炭化物が2点である。試料が出土した遺構はVI層上面で検出されており、縄文時代早期の堅穴住居跡と想定されている。

2 分析方法

試料の状況を観察後、塩酸 (HCL) により炭酸塩等の酸可溶成分を除去。水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等のアルカリ可溶成分を除去し、さらに塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等の酸可溶成分を

除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸・水酸化ナトリウムともに 1 mol/L であるが、試料が脆弱な場合や少ない場合はアルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ (AaAと記載)。

試料の燃焼・二酸化炭素の精製・グラファイト化 (鉄を触媒として水素で還元する) はElementar社の vario ISOTOPE cube と Ionplus社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC社製のハンドプレス機を用いて内径 1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver&Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3.2 (Bronk,2009) を用いる。較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.2013) を用いる。

3 結果

結果を表13・図83に表す。今回は分析試料が少なく脆弱なため、いずれも定法よりもアルカリ濃度を薄くして前処理を行っている (AaA)。このような処理によって、測定に必要な炭素量は十分に回収できている。同位体補正を行った測定値は、試料番号7のS155Cが5885±35BP、資料番号8のS154A区埋土が8070±35BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期5730±40年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差 2σ の暦年代は、試料番号7のS155Cが6785±664calBP、資料番号8のS154A区埋土が9114～8779calBPである。

4 考察

試料番号7と試料番号8は縄文時代早期とされており、試料番号7の年代値がやや新しい。年代値と遺物からみた時代観のずれは、堆積物の攪乱による炭化物の移動や土中に埋まっている時に古い炭素や新しい炭素の吸着等によって起こると考えられる。今回のような脆弱な試料に関しては、アルカリ濃度を低くして分析しているため、土壤中で汚染された炭素を十分排除できず年代値のずれに影響を及ぼした可能性もある。

【引用文献】

Bronk RC.2009.Bayesian analysis of radiocarbon dates.Radiocarbon.51.337-360.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk RC, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton T J, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughes KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013.IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP.Radiocarbon.55.1869-1887.

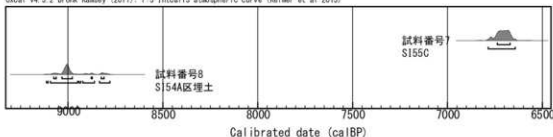
Stuiver M. & Polach AH. 1977.Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Date.Radiocarbon. 19.355-36 3.

第13表 放射性炭素年代測定・暦年較正結果

試料名	種別/ 性状	方法	補正年代 (暦年較正前) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代										Code	No.				
					年代値												標準			
					σ	cal	BC	4789	-	cal	BC	4721	6738	-				6670	cal	BP
S155C	炭化物	0.1M (AaA)	5885±35 (5887±33)	-31.7 ±0.5	2σ	cal	BC	4836	-	cal	BC	4694	6785	-	6643	cal	BP	0.954	TKA-	pa1-
					σ	cal	BC	7126	-	cal	BC	7113	9075	-	9062	cal	BP	0.034		
S154A区 埋土	炭化物	0.1M (AaA)	8070±35 (8069±37)	-27.7 ±0.5	2σ	cal	BC	7083	-	cal	BC	7029	9032	-	8978	cal	BP	0.588		
					σ	cal	BC	6929	-	cal	BC	6923	8976	-	8872	cal	BP	0.014		
					σ	cal	BC	6876	-	cal	BC	6861	8825	-	8810	cal	BP	0.046		
					σ	cal	BC	7165	-	cal	BC	7156	9114	-	9105	cal	BP	0.006	TKA-	pa1-
					σ	cal	BC	7144	-	cal	BC	7001	9090	-	8960	cal	BP	0.727	17983	11089
					σ	cal	BC	6994	-	cal	BC	6964	8943	-	8933	cal	BP	0.007		
σ	cal	BC	6973	-	cal	BC	6912	8922	-	8861	cal	BP	0.093							
σ	cal	BC	6985	-	cal	BC	6930	8834	-	8779	cal	BP	0.111							

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として同年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%以内範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AaAは「アルカリ」前処理を示す。AaAはアルカリの濃度を薄めた場合の処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。
- 6) 暦年の計算には、補正年代()で暦年較正前年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが強制だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算の再計算が行いやいやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017). r-5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第83図 暦年較正結果

第6章 総括

第1節 旧石器時代について

志布志ICから鹿原申良JCT間の区間で発掘調査された遺跡では、これまでのところ細石刃文化期の遺構や遺物の出土が目立つ傾向にある。当該区間は、宮崎県との県境付近から続く丘陵地が高隈山系で終わり、笠野原台地に接続して、さらに肝属平野に下る河岸段丘に至るといった地形にある。

他方、上記の丘陵地を南北に貫通してきた末吉財部ICから鹿原申良JCT間における発掘調査では、ナイフ形石器文化期から細石刃文化期にかけての良好な資料が発見されてきており、あたかも地形の変化と当時の活動状況が連動するかのような様相を呈している。

このような状況のなかで、永吉天神段遺跡第3地点では、角錐状石器と台形石器が出土した。それぞれ単体の出土であるため情報量としてはきわめて限られたものであるが、笠野原台地から志布志平野部にかけて当該時期の事例が希薄になっているように見える現状にあっては、それなりに貴重な資料ではある。

第2節 縄文時代について

発見された遺構及び遺物は、早期の竪穴住居跡と集石、及び早期の土器・石器と後～晩期の土器・石器であり、出土量は少なかった。しかし、2軒発見された早期の竪穴住居跡のうち2号住居跡については、偶然土層観察用バレット部分にかかっていたため、間接的ながら掘り込み開始面がVI層中位までであることを確認できた点は大きな成果といえる。このことから、本来の住居の「深さ」を把握する手がかりを得ることができた。1号住居跡も、平面形状や面積等が2号とはほぼ類似することから、同時期の建物と想定したい。

ただ、どちらの住居跡内からも土器など時期を比定できる資料が発見されなかったのが残念である。調査区内では前平式土器と下刺峯式土器の破片が少量ながら出土しており、2号住居の成果と併せると、早期中葉頃の住居跡と想定できるが、土器量の少なさが想定の根拠としては苦しいところである。なお、埋土中の炭化物を用いて年代測定を実施したところ、1号住居跡採取試料は調査状況とほぼ整合する測定値を示したものの、2号住居跡採取試料は縄文時代前期に相当する測定値が出ており、層位から想定された年代観とは整合しない結果となった。

第3地点の住居跡が「早期中葉」に属すると想定すると、当該時期に比定できる可能性のある住居跡の発見例は、近年の東九州自動車道の発掘調査により増加しつつある。第3地点では、南東に下る傾斜面のはほぼ同じ高度に、20

m程離れて発見された。2軒の間には中世の道状遺構1が構築されている上、台地の中心部は調査範囲の北東側にあるため不明な点はあるが、調査範囲においては、他に住居跡は発見されていないことから、多くても数軒の家が建っていただけという状況になるが、これは、これまで発見された早期中葉の住居跡群の状況と矛盾しない。

これまでにも指摘されていることだが、南部九州早期の住居形態の変遷についてはまだまだ不明瞭な部分が多い。そうした中でも蓄積されつつある早期中葉段階の成果を踏まえた、新たな研究が期待される。

第3節 古墳時代について

古墳時代は第3地点の調査で最も多くの遺物が発見された時代であるが、明確な遺構は発見されなかった。東側の第2地点では住居跡5軒と土坑が10基発見されていることから、当時の中心地は、第2地点から調査区北隣に広がるものと想定される。また、出土した土器の特徴から、遺跡が形成されたのは主に前半期と想定される。

第4節 中世から近世について

第3地点の調査で最も多くの遺構が発見された時代である。本章では、そのうち、地下式坑と道状遺構についてまとめることとした。

1 地下式坑について

第3地点では、第2地点-2でも紹介した地下式坑が新たに7基発見された。

地下式坑は、平成19年時点で全国各地約1,000か所から5,500基程度の発見例が報告されている。そして、その約9割は関東地方に集中しており（約800地点4,600基）、西日本での発見例は福岡、大分をはじめ熊本、山口、鳥取の順に偏在する状況である（平成19年時点での国内出土地南限は熊本県宇城市）。

また、現在、地下式坑の機能に定説はないが、以下の想定がなされている。

- 葬送施設説 中世仏教を背景に発生した墓坑形態のひとつ
- 宗教施設説 修験僧が即身仏となるための捨身行（土定）を行っていた施設
- 貯蔵施設説 食料や家財等を収納する施設
- 地下壕説 中世（戦国期）の混乱期にシェルターとして活用

さて、第2地点で発見されたものを含め、本遺跡で発見された地下式坑の形態等についてまとめると、おおよそ第14表のとおりとなる。

第14表 地下式坑の規模

単位:m()内は推定値

地点	遺構No.	旧No.	検出面からの深さ	竪坑			地下室			出土遺物 (小片等の未視認分を含む)	
				幅	奥行	平面形	幅	奥行	床面からの高さ		平面形
第2地点	1号	S K 251	2.30	—	—	—	—	—	—	方形?	土師器
	2号	S K 148	1.02	—	—	方形?	2.64	2.70	—	隅丸方形	土師器杯、石鏡?
	3号	S K 170	2.20	1.20	1.20	方形	3.30	3.30	—	円形	五輪塔(空輪)
第3地点	1号	S K 275	(2.00)	1.44	(1.22)	台形	2.24	2.04	—	楕円形	土師器皿、成川式土器
	2号	S K 278	2.36	0.72	0.80	方形	2.32	2.40	(1.32)	楕円形	土師器皿、青磁、瓦質土器、甕前焼、成川式土器
	3号	S K 283	—	—	—	—	(2.44)	(4.40)	—	不整形円形	土師器皿、甕前焼、成川式土器
	4号	S K 284	(3.35)	—	—	—	(2.40)	—	(1.20)	略方形?	土師器皿、成川式土器
	5号	S K 288	2.76	0.78	0.72	方形	2.37	2.19	(1.20)	双房形	土師器皿、古銭、棒万丈焼、成川式土器
	6号	S K 289	1.70	—	(0.55)	方形	—	2.13	(1.70)	楕円形	土師器皿、青磁、瓦質土器、甕前焼、古銭、磁石、成川式土器
	7号	S K 292	1.28	0.60	0.80	円形	1.60	1.76	(0.60)	楕円形	土師器皿、成川式土器、鉄洋

こ他の特徴として、

- 台地の縁辺部に集中して構築されている。
- A T層を地下室の床面としている。
- 壁面に工具痕らしき筋が見られるものがある。
- 閉塞の痕跡を確認できない。
- 流れ込みを含め、近世以降の遺物はほぼない。
- 周辺に、掘立柱建物跡など居住を想定させる遺構が見当たらない。

などがあげられる。

以上、本遺跡の地下式坑について、現地指導者の所見や調査担当者の見解も踏まえ以下のとおりまとめた。

時期については、一部には15世紀前半や17世紀前半のものも存在するが、ほとんどが15世紀後半から16世紀代、おおむね戦国期の所産と考えられる。

機能については、残念ながら積極的に言及できるような情報等は得られなかったため消去法的推察になるが、埋め戻された形跡が見られないことや遺物が少ないこと、第2地点-2の総括において言及されている信仰関連施設の可能性まで踏まえると、先に述べた諸説のうちでは、葬送施設または宗教施設が該当すると考えられる。

ちなみに、本遺跡の状況に基づいて原内の遺跡を概観してみると、市ノ原遺跡第3地点(日置市東市来町)のI層検出土坑69(床面長軸4.6m程度、床平面形略方形、検出面からの深さ約3.4m、壁面に階段状構造)と、向楕城跡(日置市東市来町)の大型円形土坑1(形状等不詳、断面図計測で床面約2m、検出面からの深さ約2.5m)及び2(形状等不詳、断面図計測で床面約4m、検出面からの深さ約2.2m)が、大まかな規模と遺物の時期や出土状況に類似する点が看取されるようである。

2 遺状遺構について

第3地点で発見された遺状遺構は、遺構内の施設から谷部と台地をつなぐものと想定される。遺物の出土状況

等から、13~15世紀頃に造られ、近世(~近代?)まで使用されたものと想定される。

県内における遺状遺構の例としては、新田遺跡(鹿屋市輝北町)から、本遺跡と同様に階段状構造の両脇に溝状の細い構造物が掘り込まれた遺構が発見されている。また、城久遺跡群(大島郡喜界町)では、ビーチロックを砕いたものを敷き詰めた遺構が発見されており、遺状遺構と解釈されている。これら以外で中世に帰属する可能性のある遺状遺構の報告例はないが、近世では、市ノ原遺跡第4地点(日置市東市来町)、中原遺跡(始良市脇元)で街道筋に比定されている遺構が発見されているほか、西ノ平遺跡(薩摩川内市中福良町)では、集落と水場などを結びと想定される遺跡が発見されている。

ただし、類例として上げた遺跡では遺状遺構近辺で建物跡などが発見されているのに対し、第3地点では建物跡等は見当たらず、地下式坑や土坑墓があるという点が注目される。さらに、摩耗しているため帰属時期は不明だが踏み石に転用された五輪塔もあることまで踏まえると、中世から近世における第3地点は、墓域または宗教関連の区域であった可能性を想定できる。今後、周辺の歴史事象等を踏まえた研究の深化が期待される。

<参考文献>

- 房総中近世考古学研究会・東国中世考古学研究会編
2007『全国地下式坑集成資料集』
大崎町史 1997
宮田栄二 2006『九州東南部の地域編年』『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
東国中世考古学研究会・房総中近世考古学研究会編
2007『地下式坑を考える』
原田昭一 2000『九州・山口における中世「地下式坑」の諸様相』『古文化談義』第45集 九州古文化研究会

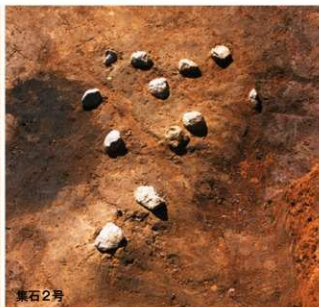
圖

版





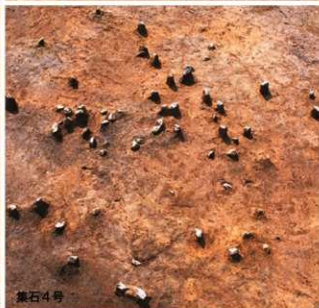
集石1号



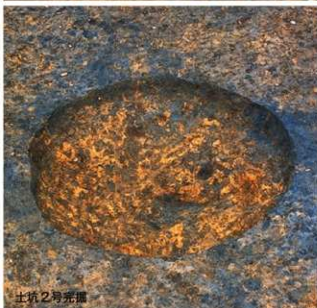
集石2号



集石3号



集石4号



土坑2号発掘



土坑3号発掘





地下式坑1号写真



検出状況



上層断面



検出状況2



完掘状況3



图版6
地下式坑3·4号





图版8
地下式坑6号







道状遺構完掘状況1



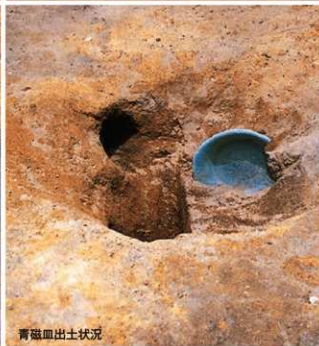
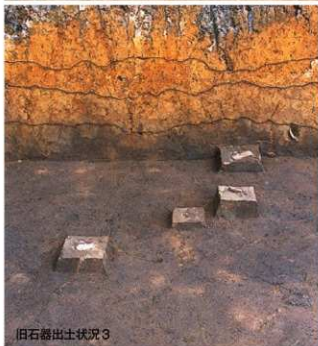
完掘状況2

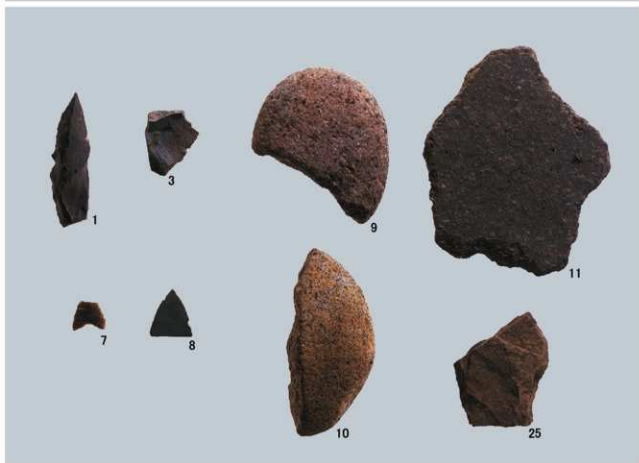


五輪塔転用状況

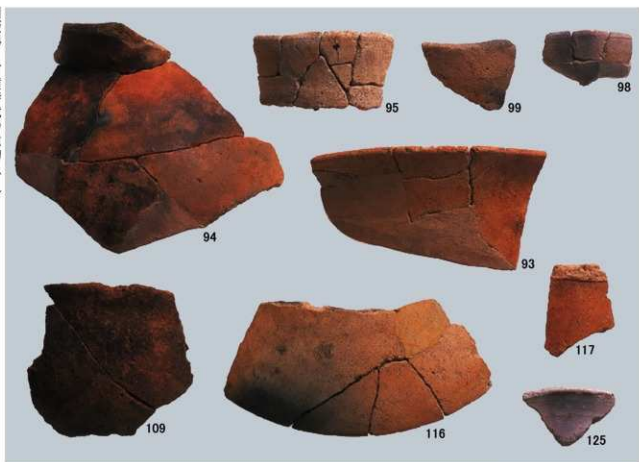


土層断面









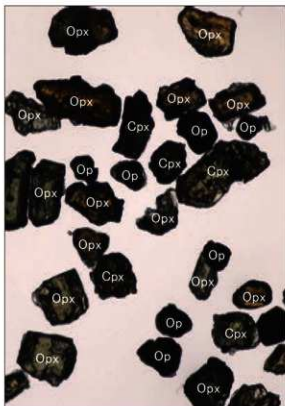




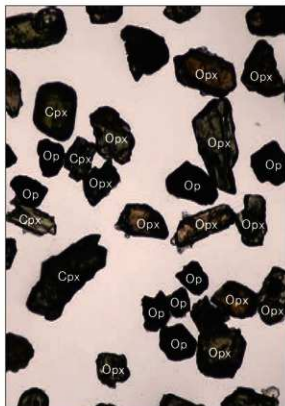




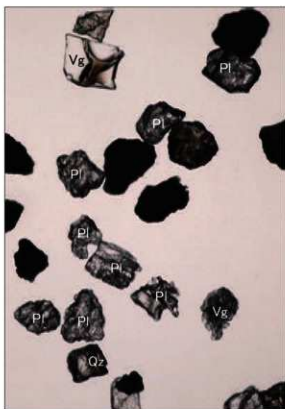




1.重鉱物(SI-55覆土②層:2)



2.重鉱物(VI層下部:8)



3.火山ガラス(SI-55覆土②層:2)



4.火山ガラス(VI層下部:8)

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Qz:石英.
Pl:斜長石.

0.5mm

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(22)
東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡4 第3地点

発行年月日 2019年2月
編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
印刷所 日進印刷株式会社
〒892-0846 鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県